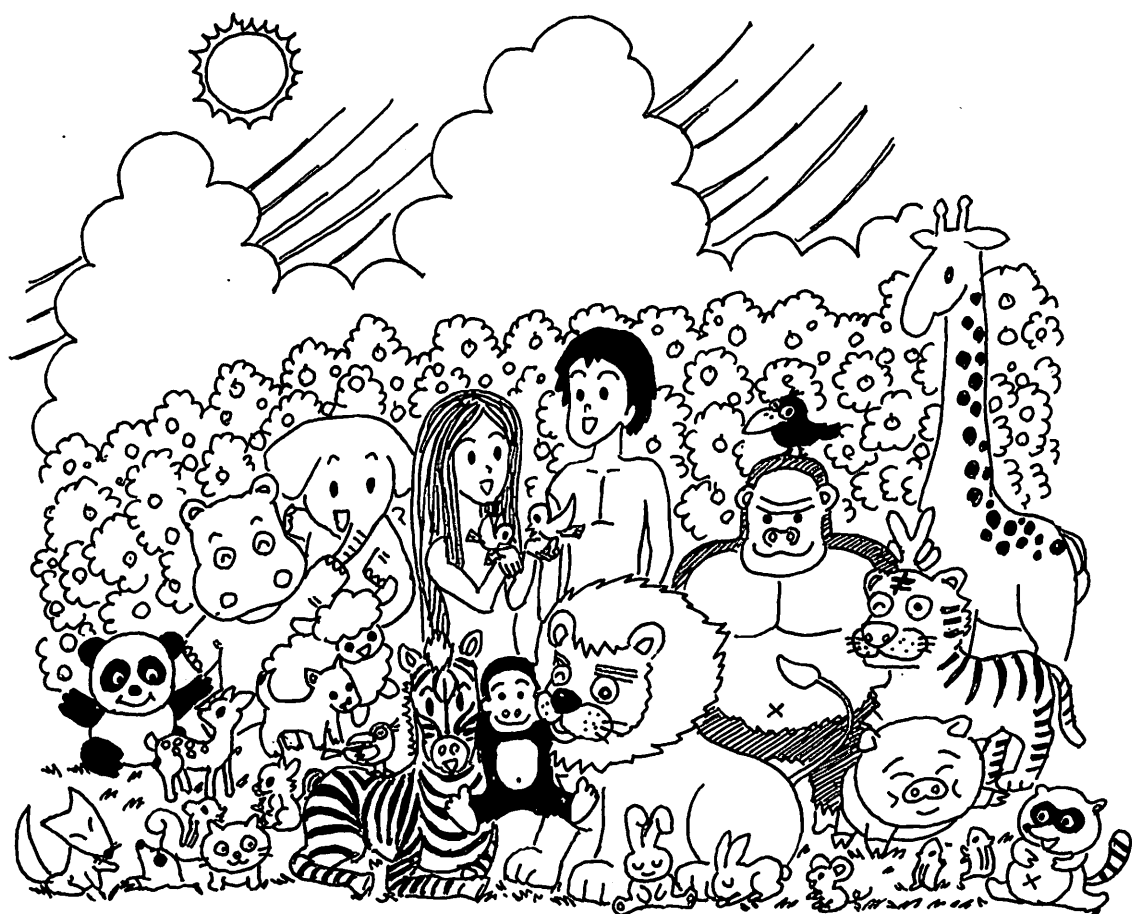


教会学校教案誌

No.14
2004.7.8.9月号



日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

も く じ

まえがき	小野静雄	3
巻頭説教「荒れ野の泉はある」	橋谷英徳	4
日曜学校・教会学校訪問		
多治見教会日曜学校の紹介		7
講演録「日曜学校教師に求められること ～子どもへの牧会の視点から～」(一)	加藤常昭	9
2004年7・8・9月分カリキュラム		26
聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例		27
7月4日		28
7月11日		36
7月18日		44
7月25日		52
8月1日		60
8月8日		68
8月15日		76
8月22日		84
8月29日		92
9月5日		100
9月12日		108
9月19日		116
9月26日		124
成人科		
「創立20周年記念宣言と今日的意義」(一)	牧田吉和	132
自由献金のお願い		138
2004年10・11・12月分カリキュラム		139
2004年度年間カリキュラム		140
編集後記		142

まえがき

小野静雄（多治見教会牧師）

(1)『日曜学校教案誌』（『教会学校教案誌』と改称）が、中部中会教育委員会の監督の下、委員を含む有志たちの志により始まり、委員会活動の一環として継続されてきたことに、深い感謝と神さまの導きを感じています。教案誌が、やがては大会の教育委員会に引き継がれるべきことは、明らかだと思いますが、それにいたる基礎を固める仕事を、とくに中部中会が担うよう導かれていることは、私たちの中会にとってたいへん光栄なことではないでしょうか。

私じしん、当初ころよい支援を送らなかつた者として、反省をこめて言います。ひとつの良いことが始まるときに、必ずしも多くの賛同を得なくても、神様が道を開いてくださることを、この教案誌の履歴が物語っています。だれかが始めたことを、否定するのは非常にたやすいことです。会議などでは、だれかの発案を否定すれば、それだけで自分が人より賢くなったような錯覚をいただくものです。そのような錯覚と思いがりが、私じしんの長い牧師としての歩みを、ときに停滞させ、ときに歪めてきたことを深い反省をもって思い返します。多くの方がたが、この教案誌のめざすところを、虚心に評価して下さり、支援とともに、さまざまな建設的な意見を寄せてくださるよう、(遅れてきた支持者の一人として) お願いしたいのです。

(2) 森有正さんの晩年の説教・講演記録が数冊、「オンデマンド版」として復刊されました。買いそびれていたものを購入して読んでいます。ひとりのキリスト者として、信仰の本質をわかりやすく、しかし実に深く語って、興味は尽きません。森さんが、キリスト教信仰の本質的な態度として、繰り返し語られたこと。それは、

人が自分の問題を神に解決してもらうために神に求める救いの道ではない、ということです。「神様が、人間について問題にされることを解決するために神様御自身がお作りになった救いの道なのです」（『古いものと新しいもの』69ページ）。

神ご自身が問い掛ける神として私たちの前に立たれる。そこに聖書の信仰のほんとうの深さと確かさがあると、森さんは言っているようです。そのこととの関連で、日曜学校での問答教育にも触れておられます。カテキズム教育のひとつの眼目は、まず子どもに向かって「問い」が投げかけられることだと言うのです。子どもが、自分の中にある問いを考えるのではなく、何が本当の問題なのかを、子どもたちにぶつけることから、教育がはじまる。それが教会の教育であり信仰の教育だと考えているのです。

そこから、さらに自分中心を捨てようという呼びかけも起こります。アブラハムの信仰は、自分の中に中心を作らない決断としてあった。それがアブラハムの人生に、ほんとうの冒険をもたらしたのです。「自分でないものに自分の生活の軸を結びつけるということ、それが信仰ということであります」（同173ページ）。

人の生きる意味が、自分の外からの促しによって生まれてくること。それがまさに信仰の学びであり教育だと思います。自分主義という辛い牢獄から、解き放たれるため、そしてイエス・キリストという「負いやすい“くびき”」に人々を導くために、教案誌の問いかけが、まさに神からの問いとなるよう、祈りつつ励みたいのです。

「荒れ野の泉はある」

—創世期16章6b～14節による説教—

橋谷英徳（伊丹教会牧師）

主の御使いが荒れ野の泉のほとり、シウル街道に沿う泉のほとりで彼女と出会って、言った。「サライの女奴隷ハガルよ。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか。」
「女主人サライのもとから逃げているところです」
と答えると、主の御使いは言った。
「女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい。」
主の御使いは更に言った。
「わたしは、あなたの子孫を数えきれないほど多く増やす。」
主の御使いはまた言った。
「今、あなたは身ごもっている。やがてあなたは男の子を産む。
その子をイシュマエルと名付けなさい
主があなたの悩みをお聞きになられたから。
彼は野生のろばのような人になる。彼があらゆる人にこぶしを振りかざすので
人々は皆、彼にこぶしを振るう。彼は兄弟すべてに敵対して暮らす。」(創世記16章7～12節)

日曜学校教案誌の巻頭の説教をすることが、私に与えられた課題である。教案誌である以上、この説教の聴き手は、何よりも日曜学校の教師たちであろうかと思う。そして、説教である以上、今ここで、語られる神のみことばを取り次ぐことが私に与えられた課題となる。

日曜学校の教師の務めは伝えるということである。伝えるのは神のみことばでありキリストの福音である。これは幸いな務めである。

しかし、この務めを果たす者が、いつも悩み苦しむことも確かなことであろう。「明日は日曜日、子供たちに説教をする。けれども、まだ何を伝えたら良いのかがまだわからない、聞こえてこない、見えてこない。どうしたらよいのだろうか？」日曜学校の教師であるならば、誰でもこのような経験があるのではないだろうか。

神のことばを伝えるというのは楽なことではない。日曜学校の教師の苦しみは他の教会員よ

りも朝早く起きて教会にやって来なければならぬということではない。そういう労苦も確かにあるであろうが、子供たちに、神のみことばを伝えるということにおいて悩み苦しむのだ。しかし、この苦しみは決して、耐えられない苦しみではないし、報いのない苦しみでもない。この苦しみの先には恵みがやってくるからだ。喜びがそこに必ずやって来る。私は日曜学校の教師が喜びの務めであることを信じて疑わない。

伝えるためにまず何よりも必要なことは、言うまでもなく私たち自身が御言葉、福音にあずかることである。御言葉の力、慰めにあずかることである。そこではじめて伝えるということがなされる。御言葉に聴くことに失望してはならない。あきらめてはならない。御言葉は必ず与えられるからだ。そして、御言葉は空しく地に落ちてしまうことはない。

今日、与えられたのは創世記16章の御言葉である。

私たちは、ここに途方に暮れ、力尽き、全くかがみ込んでしまっている一人の人を見いだすことができる。その名はハガル。この女はエジプトの奴隷女であった。彼女はまた少女であった頃、アブラハムの一族のところに、エジプトの王ファロオの命令によって、連れて来られたのであろう(創世記12章16節)。こうしてハガルは、アブラハムの妻、サライに従順に仕える侍女となった。しかし、成人したある日、女主人の命令でその夫アブラハムのもとに入るように命じられる。主人の側からすればさまざまな理由があったことであろう。しかし、ハガルからすれば、非人間的な仕打ち以外のなにものでもない。こどものいない夫婦の身代わりになり、身ごもらされる。そして、いざ身ごもると今度は手のひらを返したように、ひどい仕打ちを受けることになった。こんな苦しみに遭うぐらいなら……。このような思いが彼女をアブラハムの家から飛び出させた。着の身着のまま彼女は、せっぱつまった思いで荒れ野を歩いて行く。身重のからだをかかえて。彼女はおそらく生まれ故郷のエジプトの方向に歩きだした。やがて彼女は荒れ野の泉のほとりて休息する。力尽きていたに違いない。途方に暮れていたに違いない。しかし、彼女はそこで、荒れ野の泉で主と出会った、主の御言葉を与えられたというのである。

御言葉は私たちの生きる世界、人生をしばしば荒れ野に喩える。荒れ野そこは人が生きるのに適さないところである。命の危険にさらされる場所でもある。しかし、また同時に、荒れ野、そこは不思議にも、神との出会いが起こされる場所でもある。ここではその荒れ野に泉があったというのである。砂漠の中にそこだけ緑が生い茂ったオアシスである。私たちの世界にはそういう場所があると聖書は語っている。全く見捨てられた中に私たちは生きているのではない。荒れ野の中に泉がある。それは私たちがいつも

覚えておいてよいことである。万策尽き、途方に暮れ、力尽きることがある。けれども、不思議にも御言葉はそのようなところでこそ、いつも与えられる。

御使いは、荒れ野の泉のほとりに屈み込んでいるハガルを発見する。そして、このハガルに語りかけて言った。「ハガルよ。あなたは、どこから来て、どこへ行こうとしているのか。」御使い、それは神のこばを伝えるメッセンジャーである。それならば、このとき、御使いがハガルに語りかけたこばは神のこばである。

ハガルに語りかけられたこの神のこばは不思議な語りかけである。出てきた場所を問い、これから行く先を問う。しかし、ただそれだけのことではない。

ある人はこのみことばから、「哲学の究極的使命は、人間がどこから来たのか。またどこへ行くのかという問いに答えようとするものである」というカントのこばを思い起こすと言う。しかし、この御言葉の問いは哲学の問いとは異なるところがある。哲学が問題にするのは「人間」であるが、御言葉は「あなた」と問いかける。哲学が問題にするのは、一般的普遍的な真理である。けれども、御言葉はあなたと二人称で問いかける。

創世記はすでにその最初にこの二人称を用いている。

「あなたはどこにいるのか。」(3章9節)

「あなたはどこから来て、どこへ行くのか。」

これは現代的な問いでもある。自分がどこから来たものなのか、どこへ行くのかわからないのが現代に生きる人間の姿でもある。

しかし、この問いかけは、問いかけるものを苦しめ、ただ悩ませるような問いかけではない。この問いを投げかけられるものを孤独のままにしてしまうような問いかけではない。この問いかけは、力ある慰めをもたらした問いかけなのである。そのことは続く対話から明らかになる。

「女主人サライのもとから逃げているところです。」

すると主の御使いは言う。

「女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい。」

この御使いの単刀直入なことばはどういう意味であろうか。ただ単に元いたところに戻れ、元の鞘に収まれということではないであろう。

ハガルはもともとはエジプトの少女であったが、アブラハムの家に連れて来られて育てられた。だとすれば、その彼女がエジプトの神々を信じ続けていたとは考えられない。彼女はすでにアブラハムの神、主なる神、ヤーウエを信じるようになっていたに違いない。だとすれば、御使いの勧めは、主なる神のもとに帰れということなのである。

この荒れ野の泉における経験は、彼女に自分が何者なのかということを感じさせることになった。自分が神のものであることを彼女はこのことによって気づかされたのだ。御言葉はそれを聞くものに、自分がいったいどういう存在であるのかを新しく見いだすことをもたらす。

ハガルは自分がすでに神のものであること、つまり、どれほど尊い存在であるのかをこの時まで気づいていなかった。いや少なくとも、この時は忘れていた。命を奪われるような危険の中で、自分の人生の歩みが違った有様で、新しく見えてきたのである。確かにそれは表面的には、飛び出してきたアブラハムの家に戻ることであったろう。けれども、この時、ハガルはまるで全く新しい人になって再び立ち上がる。

御使いは、ハガルが神のものであることを明らかにするだけではない。御使いの語った主のことばによってハガルは自分の人生に明るい見通しを持つようになる。彼女は、「あなたこそエル・ロイです」(13)と喜びつつその信仰の告白をするに至る。御使いの語ったみことばは、彼女の人生に明るい光を当てた。彼女は自分の人生に明るい見通しを持つことはできなくなってい

た。彼女には行く当ても進むべき道も見えなかった。けれども、ここで彼女は明るい見通しを持つものに変化している。いや変化させている。これが御言葉の恵みである。「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます。」(詩編119:130口語訳) 御言葉は、それを聞く人の人生に光を当てる。言い換えると、神の救いの歴史の中で自分の人生を新しく見ることをもたらすのだ。神の救いの歴史の中に私たちの歩みが位置づけられる。ある人は、聖書の言葉は「自分の小さな物語にではなく、神の救いの大なる物語」の中に私たちを導く働きをすると語っているが、まさにそのとおりだ。

「あなたはどこから来て、どこに行くのか。」

御言葉は今、荒れ野の時代に生きる私たちにも問いかけている。

あなたも神のもの、いやキリストのものである。なぜなら、キリストが私たちの罪のために十字架におかかりになり、復活なされたからだ。そして、あなたはあなたの人生の行く手は、このキリストによって、その髪の毛の一本もその許しがなければ地に落ちることもないほどに守られているのだ(ハイデルベルク信仰問答問1)。

この御言葉はこの唯一の慰めのもとに私たちを立たせてくれる。

この御言葉の慰めにあずかるところで、日曜学校の教師である私たちがこどもたちへの説教と牧会とによって、何を伝えなければならないのかも見えてくる。

私たちの目の前にいる子供たちもまた自己の本当の価値を見いだせないままに屈み込んでしまっただけではないであろうか。自己の人生の行く手に明るい見通しを持つことができないままでいるのではないだろうか。御言葉が真実に伝達されることによって、諸教会の日曜学校が荒れ野の泉になることができれば幸いである。主はきっと私たちを用いてくださるに違いない。

多治見教会日曜学校の紹介

多治見教会日曜学校校長 小野静雄

1. 多治見教会と日曜学校

多治見教会は多治見で伝道を始めて、昨年で百周年を迎えた教会で、日本最初のプロテスタント教会の伝統につながる教会です。聖書に忠実な信仰と地域に根ざした信頼される歩みを求めています。私たちの教会は、年齢の構成にあまり片寄りがありません。幼児や小学生と一緒に家族が多く、中高年の方々も含めて80名ほどが集まります。毎週の日曜学校に集まる生徒は大人も含めて30名ほどです。

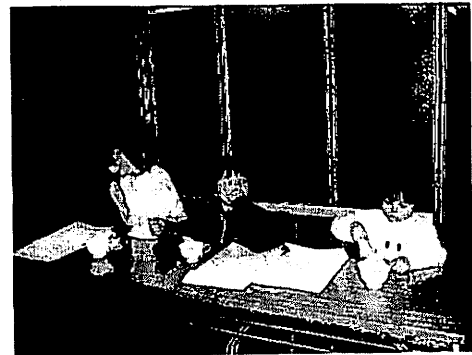
2. 礼拝

礼拝は9時半から始まります。牧師、日曜学校の教師7名に長老、執事も加わって順番で礼拝説教を担当しています。絵などを用いてわかりやすくお話をして子供たちを飽きさせないいろいろな工夫しています。



3. 分級

礼拝が終わった後、それぞれのクラスに別れて、分級が持たれます。クラスは幼稚科、小学校低学年科、高学年科、中高生科と4つに別れています。月の最後の週は合同分級ということで幼児から中高生までが一緒になってゲームなどしたりして楽しく過ごしています。



4. 年間行事

(1) 進級式

子供たち全員に小さなプレゼントを渡し、ささやかなお祝いをします。新しい分級の担任、メンバーを紹介します。

(2) イースター

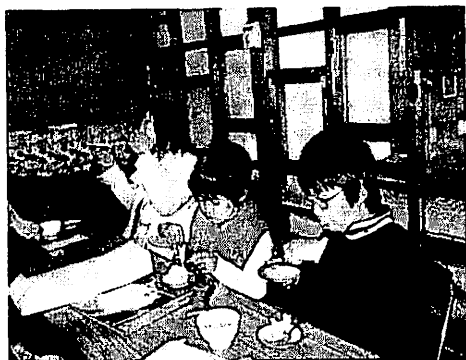
子供たちで作るかわいいイースターエッグは好評で教会員の方々毎年買って下さいます。お昼には卵を使った食事をいただきます。

(3) 母の日

お花とカードをお母さんや日頃お世話になっている女性会員の方たちに感謝を込めて贈ります。

(4) 夏季学校

夏休みに入ってからすぐ、一泊で行きます。聖書



の学びや賛美、ゲーム、工作など毎年テーマを決めて取り組みます。若いお兄さんたちが参加してくれると子供たちは大喜びで、夜の花火やお風呂も楽しみ、嬉しくて夜中まで眠れない子供続出です。

(5) クリスマス会

最近は大人の祝会と合同で行います。聖書物語劇がやはりメインですが、何より魅力は持ち寄りのごちそうかもしれません。賛美礼拝の夜に行う子供たちのキャンドルサービスもとても好評です。

(6) 「子らと共に」礼拝

春と秋の年2回、子供たちへの伝道として合同礼拝を行います。教会員の方からもわかりやすくよいと好評です。

礼拝後は軽い食事を摂り、若いお父さんやお母さん方との交わりの機会が持たれます。

5. 教師会

現在、7名と牧師1名で構成され、毎月第4主日の午後に教師会がもたれます。各分級の子

供たちの様子や行事計画などについて話し合います。

礼拝でのお話当番や分級での奉仕の責任は重いものですが、その事を通して得られる恵みも大きく、子供たちと共に教師自身自らの成長も願いつつ、熱心に取り組んでいます。

6. 課題

現在の日曜学校教師は5つの家族の親のみで占められており、広がりを持ちません。忙しく厳しい社会の中、疲れた大人が増えていることは否めませんが、情熱を持って子らと関わってくれる教師を広くもとめています。

また、このような現状も手伝ってか、子供たちだけのクリスマス祝会も今はできていません。

「子供たちを私のところへ来させなさい」との主イエスのみことばに従い、地域の子供たちを招く教会となるべく、子供のクリスマス祝会の復活を教師の拡大と共に祈り願っています。

(日曜学校教師会 宮嶋豊美 野田ひろえ)

「日曜学校教師に求められること ～子どもへの牧会への視点から～」(一)

加藤常昭(神学者)

〈編集部より〉

加藤常昭氏は、1929年生。東京大学哲学科、東京神学大学卒。1963年から86年まで東京神学大学教授。ハイデルベルグ大学客員教授(86～87年)。著書多数。97年まで日本基督教団鎌倉雪ノ下教会牧師。

現在は、神学者、伝道者として精力的に著作・翻訳活動、説教・講演などの伝道活動、説教塾運動を展開されています。日本人説教者の中でも史上随一であり、既に世界的な説教者といっても過言ではありません。

著書多数。『説教全集』(教文館から刊行中)、『魂への配慮の歴史』(日本キリスト教団出版局から順次翻訳刊行中。なお、『子どものための説教入門』は日本キリスト改革派教会西部中会教育委員会からの刊行。

中部中会教育委員会として加藤先生をお招きしたのは、上述の、『子どものための説教入門』における主張が、教案誌執筆奉仕者に前もって読んでいただくことを求めるほど、私どもの求める日曜学校像と大きな相違がないからです。今回は、説教の課題をより深め、結実させるために「牧会」を主題に講演をお願いしました。これも、ほとんど本誌の主張と軌を一にするものです。本稿は、牧師、日曜学校教師はもとより、「慰めの対話」(牧会)という務めに召されているはずの全会員に読んでいただければと思います。今号にてまず午前の部を掲載し、第15号にて午後の部を、第16号において質疑応答を掲載する予定です。

なお、いのちのこば社から刊行中の『福音

主義神学における牧会』(2003年刊行。牧田吉和師監修で同師の開会礼拝説教所収。福音主義神学会全国研究会議における加藤師の主講演と福音派の牧師たちのレスポナントからなる論集)を、本稿の学びを深めるための参考資料としてご紹介いたします。(相馬伸郎)

〈講演録〉

司会 遠山信和教師

祈り

天の父なる神様、あなたが私たち一人ひとりをあなたのもとに導いてくださり、あなたが私たちに先立って罪のために十字架に向けて歩いてくださり、また、御霊を与えてくださって、その御霊の働きを通してわたしたちのすべての歩みを導き支えてくださることを心から感謝いたします。今日私たちは、日曜学校の教師研修会をこれから行おうとしております。私たちの日曜学校の歩みの中に、さまざまな問題があり、ここをこうしたらよい、といろいろと思いつみながら、御言葉に聴きながら祈りながら私たちはその働きをしておりますけれど、今日その先生方お一人お一人の心の内にあなたが語ってくださいまして、私たちがあなたによって与えられた務めにあなたの御心になんてそれを果たすことができますように、どうか上よりの導きを与えてください。講師の加藤先生を立てられておりますけれど、加藤先生のこれまでのお働きとともに、また主にあるお働きが、このところでも豊かな恵みを持って与えられ、まことに私たちがあなたからの、聖書のみ言葉を覚

えながらも一度私たちが教師として立てられていることを覚え、特に子どもたちへの牧会のことについて考えるひとときを与えてください。

今私たち日本に住む子どもたちもさまざまな問題を抱え、さまざまな困難を経験しております。そういう中であって、私たちが確かなみことばを与えられ、みたまの導きの中に今子どもたちにどのように接していったらよいのか、どのようにコミュニケーションをとり、共に歩いていったらよいのか覚えることができますように、主よ、このひと時をあなたのみ手に委ねますからあなたが語ってくださいますように。キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

聖書は、講演の中でお語りになるということですので、割愛させていただきます。それから講師の紹介も、省略していただきますことです。ご存じでしょうと、そういうことでもありますので、それも割愛させていただきます、先生からお話をお伺いいたします。

* * *

〈午前の部〉

今日は私がもっぱらお話をすることが中心になっておりますが、もちろん質疑をお受けいたします。午後の講演が終わりましてから、皆さんから質問があったら自由にしていただきたいと思います。今までの経験でそういう質疑応答の時間にほとんどの場合に始めしばらく沈黙の時間が続くのです。とても奇妙な沈黙が続きます。そしてどなたかが質問を始めると、堰を切ったように、質問が続いて、終わりの時間を超過するという事も起こります。それである時から私がしておりますのは、質問がある方で、前もって文章化できる方は、紙に書いて出してくださいと、そうお願いしています。もしかすると、午前中のお話をいたします間にも、このこ

とはもっと聞きたいというようなことがある、もしかしたら午後お話をすることであるかもしれないけれども、そんなときにメモをしてくださって、昼の休みの時間に文章化してくださってそれを出してくださってもよいかと思えます。そのことを考えて主催者の方で質問用紙を用意しておられるかもしれませんけれども、先ず申し上げておきます。

『子どものための説教入門』という私の書物があります。そのもとになりましたのは、西部中会で私が二晩にわたって講演をしたものがもとになっております。そこで説教に続いて牧会を語れ、それを中部で語れ、ということになったかと思えます。

日曜学校における牧会、このことを考えていきます時に、最初に、日曜学校における牧会という主題をどのように理解し、受けとめておくかということに関して確認しておきたいことがいくつかあります。ひとつは、ここで私がお話をすることは、かなり自由な発言であるということです。もうひとつは、改革派教会の教師ではありませんから、その意味では改革派教会における日曜学校の実態というものを知らない、まあ、プロテスタントの教会で、日本の教会であればだいたい同じようなことである、ということ的前提として語りますが、やはり日本キリスト改革教会、改革派教会と呼ばれております教会のしている日曜学校教育は、その独自の歴史もあります。改革派教会とひとくくりにならずに、それぞれの教会の日曜学校の姿も違うのではないかと思うのです。そういうものをよく知らない者の発言だということを、よい意味で受けとめてくださればよいと思えます。これは言い換えると、私の発言をお聞きになって、皆さん初めからそのつもりでしょうけれども、どの意見をどのように受けとめるかは皆さんの自由だということです。

ただそこでひとつお願いをしたいことは、私

がお話しすることを、「なるほどそうだ」と思いになったらそれを積極的に受け入れていただきたい。積極的に受け入れるということは、実際にやってみてほしいということです。41年の間、牧師をしていてしみじみ思いましたが、どうも教会というのは基本的に保守的なものがあります。保守的と言えばよいのですけれども、別の言葉でいえば、姿勢が固いのです。それをなかなか変えようとしません。プロテスタント教会というのは、特に改革派教会というのは、いつも改革される教会という意味がそこに込められているわけですから、いつでも自分を新しくするという柔らかい姿勢があるはずですが、どうも身も心も固い。もっと率直なことをいうと、私が関わってきた教会の中でも、私がおりました教会では教会学校といっておりましたが、教会学校の教師というのが頭も心も体も硬いというところがあります。何年もやってきた方たちは、どうもそれを変えるのが面倒だということもあると思いますが、自分たちがやっていることは基本的にまちがいないと思っておられるところがあると思います。牧師もそうだし、その牧師の心が固いということが日曜学校、教会学校の教師に伝染しているのだと私は反省もするのです。この場合に、どちらかという、私たちがこれまでにやってきたことを変えない理由は、教会がやることをくるくる変えるものではないという、そういう考えもあると思うのです。確かに正しいところがありますが、教会というのは、いっほうでは2000年来変わらないところがあります。たとえば、私たちが語る福音は、何語で語っても同じ福音ということから始まって、教会の営みの中心になっている礼拝、またその礼拝における説教と sacrament を重んじるということは、変わりはありません。しかし、そういう変わらざるものを、私たちが置かれている時と場所に応じて柔らかな姿勢で言い表す言葉を変えていく、姿を変えていくということもまた教会の特質であったと思うのです。

私は、よく、教会の牧師をしておりました時に、「とにかくやってみよう、実験してみればよいじゃないか、だめなら止めよう」と言いました。教会員はびっくりして、「教会というのは、一度決めたものをそんなに簡単に換えられますか」と反論する。それは礼拝の言葉や姿を変えようというのは大きな問題かもしれないけれども、そうでなくて自由にやってみてだめなら止めようということはいくらでもあるはずだと私は言いました。そのところは柔らかい姿勢になること、それがひとつです。

もうひとつ、こういう講演を聴いて役に立ちますのは、別に、話を聞いたからといって自分たちのやっていることを変える必要はないということを確認するためでもあります。たとえば私のような者の発言を聞いて「ああそうだ、今自分たちのやっていることもまちがいはなかったのだ」と確信を得るといことも大事なことです。だから自分たちがやっていることを、変えるべきことは変えるし、そして今やっていることをさらに確かめる、確信を持つ、「これでやっぺいこう」、ということで志がひとつになる、それも大事だと思います。

日曜学校の牧会ということ論を論じる時に、いったい日曜学校独自の牧会論というものがあるであろうかという問いがあります。あり得ると考えますからこういう表題が生まれていると思いますし、後で私が私なりの日曜学校らしい牧会とはどんなのだろうかと言うことを発言しますけれども、基本的には、私は相手が大人であろうが子どもであろうが、一般的に語られる牧会論は変わらないと思っております。そういう意味で今日私がお話しいたしますことはかなりの部分、大人がつくっている教会においても通じる牧会論であるということができると思います。これは先ほどから言っておりますように、キリスト教会がやることは、基本的には、どこの国、いつの時代であっても変わらないものであるとい

うことによります。むしろそういう、いつの時代においても行われてきた、どこにおいても行われてきたこと、あるいはそういうところで教会のいのちになってきたもの、言い換えると伝統といっても言い、その伝統を確認しながら、いったい教会ということをどのように理解し、それがそれぞれのところでどのように行われてきたかということを知ることがとても大事であると思います。

そこで参考文献について言及しておきます。私と、その他の福音的な神学者たちの共著になっておりますが、今年、しかも夏すぎからですが、いのちのことば社から、『福音主義神学における教会』という書物が出ました。昨年、ちょうど一年くらい前に、ここでも出席して下さった方がありますが、神戸で改革派神学校の牧田先生が中心になって、この主題で、シンポジウムといいますか、研究会を行いました。そこで私が責任を持って四つの講演をさせていただいて、四つの主題についてそれぞれ福音派の神学校で教えておられる先生たちからリスポンスがあって、それをまとめて本にしたのです。その時からそう思っていたのですけれど、必ずしもお互いの対話がきちんとできたわけではありません。私は牧田先生に厳しく言われまして、あの先生に厳しく言われると、言うことを聞かざるを得ないのですけれども、かなり早く原稿を書いて、それぞれの先生方に読んでいただいて、それに対する反論なり何なりをと期待したのですが、どうもあまり一つの主題について意見が向かい合ったり激しい討論があったりということがありませんで、私は振り上げた刀をどこにおろしてよいかわからないようなことになりました。そのためか最近、いのちのことば社の小さなパンフレットに、これは余計なことですけれども、古屋安雄という先生がこの書物について書いてくださった。本当なら売れるような批評を書いてくださればよいのに、否定的な批評がありまして、加藤常昭の日頃の迫力がないと

書かれました。私にはそんなにいつも迫力があるかなと思ったのですが、迫力の出しようがないような基本的な、教会とは何かということについて、初めての教会学上の主張を書いたものです。ですから迫力よりも何よりも、事柄をきちんと言い表さなければいけないということに力点を置いておりますが、しかしこれは、先ほどから言っておりますように、日曜学校の教会においても同じようなことなので、今日お話しいたしますこともかなりの部分、神戸でいわば神学的にもっと丁寧にしたものを日曜学校という場に当てはめてみるとこうなるという再叙述のところがあって、神戸で私のお話を聞いた方は、ああまた同じ話をしていると思われると思います。それでよいと思います。教会というのはそんなところ基本が変わるわけではないのです。皆様と一緒に大事だと思ふところだけ取り上げて考えてみたいのです。その意味で特にここにおられる牧師の方たちにもお願いをしたいと思いますが、この書物は是非買って読んでみていただくとありがたいと思います。文章の形で丁寧に調べることができると思います。

後は皆様のこの会の参考書にあがっていたものでありますが、『子どものための説教入門』。それから私が教会ということを考える時の基本になっておりますのは、もうずいぶん前に、1961年に、初版を出しましてすでに14版を重ねております、スイスの牧師、神学者、エドワルト・トゥルンアイゼン先生の『教会学』ここでは「I」だけを挙げております。『教会学II』というのもありまして、こちらの方がお役に立つかもしれません、『教会学I』が、教会の神学的な基礎を語っているものです。先ほど申しましたようにこれまた感想を申しますと、神戸での対話がうまくいかなかったひとつの理由は、先生方が、いずれもこのトゥルンアイゼンの教会学を参考書としてあげて下さっているのですけれども、読み方が違っていたのかなという感想も持っているのです。もっと突っ込んで読ん

で下さっていると、そこでも対論の共通の基礎ができたと思っているのです。もっともこの牧会学が日本の教会で、これは、まず牧師の方たちによく読んでいただけたら、という思いがいたします。私は牧師として、このトゥルンアイゼンを訳すことによって、ある種の立ち直りを経験したものです。

おそらく皆さんが読んでよく分かるし共感を持って読んでいただけると思うのはハイデルベルク大学の実践神学の教授をしておられるクリスティアン・メラー先生が書いたものでありまして、原著の題を私が勝手に変えたのですが、『慰めの共同体・教会』というのを出しています。これはお読みくださった方たちが、とても共感を持ってくださったものです。

同じクリスティアン・メラー先生が編集いたしましたもので『魂への配慮の歴史』というのがあります。これは全12冊になりますが、12巻のうち11巻まで既に刊行されております。できれば、各教会の蔵書に加え、日曜学校教師に読んでいただきたい。好きなどころ、あるいは好きな人の項目を読んでくださってもよいと思うのです。これは二千年の教会の歴史の中で魂へのみどり、魂への配慮に生きた65人が選ばれておりまして、それぞれの専門家が、その人たちのポートレイトを、どのような生涯を送り、どのような言葉を語り、どのような手紙を書き、どのような人びとの魂のみどりをしたか、書いています。これは、私は訳しながらしばしば、これは涙さえ流して訳したものであります。一人でも多くの方に読んでいただきたいと願っているものです。原著では3巻でありますけれども、買いやすくするために12冊に分けてみました。その中でひとりの人を後で紹介したいと思っております。

その次は、私が書きました説教論で一番最近のもの、『愛の手紙・説教』です。説教について書いているのですが、説教がわれわれが考える意味での牧会的になるというのはどういうこと

なのか、という主題を論じているとも言えます。要するに、牧会というのは後でもお話ししますが、一人ひとりの魂に愛の言葉を語るということが出来るかどうかの基本だと思っているのです。そういう意味では、メラーさんの『慰めの共同体』も説教論から始まっているのですけれども、私はもともと説教というのはラブレターではないのかということを考えて、『愛の手紙・説教』という書物を書いたのです。愛の手紙、ラブレターというと、それこそ恋文を考えますけれども、この場合の愛の手紙の模範として考えているのはパウロの手紙です。新約聖書が伝えるパウロの手紙は、それぞれが愛の手紙なのです。パウロの手紙をよく読むことで、このパウロの言葉遣いまで、われわれは学ぶことができるのではないかと。それは言い換えると、しばしば日曜学校でもそうですが、礼拝で語られる説教というのはそこに集まっている方たち、子どもたち一人ひとりに愛の手紙を送るというよりも、学校の教室の講義みたいな文章を原稿に書いてきてそれを読み上げているだけではないか、黒板でも立てた方が似合っているような話になりかねない。それでよいのだろうかというのが私の問題提起であります。

そこで、基本的考察に入ります。はじめに、パースペクティブ思考法という、いきなり英語が出てきて申し訳ないのですが、先ほどの、「福音主義神学における牧会」という書物のあとがきを牧田先生が書いておられまして、その牧田先生の考察ですと、やはり加藤の基本的な特質は、パースペクティブ思考法というのにあって、われわれもそれをよく理解しないと加藤の言っていることがよく分からないのではないかと言っておられます。これは半分当たっていて、半分当たっていないと思っているのですが、当たっていないところは、そんなに難しく考えなくてもよいのではないかとということなのです。私がここで言っていることは、実は、われわれ

がやっている、身につけているものの考え方でしかないのであって、それを意識的に取り出していることだと思っております。

パースペクティブというものの考え方を教えてくれたのは、1958年に英語で書かれておりますシュワード・ヒルトナーの『牧会者の神学序説』であります。訳書名は『牧会の神学』です。アメリカのシカゴの大学の神学部で教えた「牧会カウンセリング」という書物のある人であります。このヒルトナーは、改革派教会の神学者です。『魂の配慮の歴史』第12巻で紹介されます。そこではこのヒルトナーが改革派神学における実践神学の代表的な存在として、特にカルヴァン以来の改革派神学というのを重んじながら、現代的な牧会心理学とかカウンセリングと取り組んだ人だということを強調して書いておりました。私はなるほどと思いました。それでヒルトナーの書いている言葉の謎が解けるという思いがしたものです。改革派の方たちがこれにもっと関心を持ってくださってもよいと思います。もう古い人だと決めつける人もありますが、そんなことはないのです、私は日本の教会はまだヒルトナーに学ぶところがたくさんあると思っております。

このパースペクティブという英語ですが、どうして英語のままなのかというと、これが頭の痛いところでありまして、いろいろな翻訳を考えてみたのですけれども、いやこの頃は英語が日常化していて、パースペクティブという言葉聞いて何のことかわからない人もないだろうと思って訳さないでそのままにしております。西垣一二先生の翻訳では視座と訳しているのですが、私はパースペクティブというのは、座という日本語とは対応しないと思っております。パースペクティブというのは、お分かりだと思いますが、たとえば、私がここに立っている時に皆さんを見ながら話している。具体的な、物理的なパースペクティブをここで獲得しながら皆さんを見ながら、話をしている。そういうと

ころから始まる言葉であるといつてよいと思います。

特にこのパースペクティブというのは、何かを見ている、どのように見るかと言うことも含めてですけれども、これがひとつの実践と結びついて捕らえられます。たとえば今私は講演をしています。説教しているのではないのです。説教しているという意図がはっきりしている場合と、説教ではなくて講演をしているという場合ではパースペクティブが違います。先ほど、私の講演の前に「聖書を読むか」と言われて、後で聖書の言葉の引用がたくさんあるから読まなくてよいと言いました。もしかするとそういう時に、「へえ、聖書も読まないで話をするのか」と思われた方があるかもしれません。説教だったら私は必ず聖書の言葉をここで読んでいただきます。これは私の講演なのです。だから自分の言葉に先立って読まれた聖書の説き明かしを必ずしもするわけではない。聖書を基礎にした私の考えを、私なりの聖書の読み方に基づいた私の考えをお話ししますけれども、これは私の講演なのです。説教した場合は、これは事情が違います。説教は神の言葉、「神の言葉を説く説教は神の言葉」なのです。特に改革派教会は大事にしていることですから、「私が語っているのは神の言葉なのだから黙って聞け」という姿勢が私の中に生まれる。しかし、私の説教がありません。教会の言葉を語ります。けれども講演は、私の講演ですから、基本的にはよく理解していただくことは望みますけれども、私の意見に賛成しようが反対しようがそれは皆さんのご自由ですということになるわけです。説教と講演と大違いなのです。

いずれにしても、私が話をするのはこういうことだという目標がはっきり決まって、そしてこれから話を始める時に、先ほどもお話ししましたように、具体的な目も皆さんを見ている。具体的に皆さんを見ながら、同時に皆さんも自分も置かれている日本の現在のプロテスタント

教会の状況を見ている。今日はその点で延々と話しませんけれども、たとえばほとんどの教会の日曜学校が、さびれている。これは共通の現実です。なかで盛んな日曜学校、子どものための伝道をやっておられるところもあるでしょうけれども、どちらかというところ例外です。今も来る途中で車のなかで、私は名古屋に何度も来ていますけれども、あらためて教えを受けたのは、私は名古屋というのは教会の多いところだと思いましたが、そうじゃないそうです。あっても小さな教会ばかりなのだそうです。百名を超える礼拝をする教会は微々たるものだということでした。これが現実であります。そういう現実がパースペクティブの中に入ってくる。皆さんも何かやっている時には、ちゃんと自分が何をやるか、どこでやるか、どのようにやるか、対象は何か、そういうことを、そこで視野に入れる。ですからパースペクティブという言葉は、視座というよりも視野という言葉の方が近いと思います。

しかし同時に今のようなお話というのは、空間的な広がりですけれども、時間的なパースペクティブというものもある。東京神学大学で教えておりました時にパースペクティブについて講演をしたり、講義をしたりしながら、訳語で本当に悩んだんです。それで、東京神学大学の教授会というところは名だたる知恵者が揃っていますから、片端からアンケートをとるみたいなことをしました。パースペクティブという言葉聞いた時に先生は何を思い浮かべますかと、何人かの先生に尋ねた。それがおもしろかった。最初の先生は、「東京タワー」とおっしゃった。高い所で大きな景色を見る時に一番大きな広がりを持ったパースペクティブを手に入れる。今はもう東京タワーはちっとも高くなくなりましたけれども。あるいは、その次の先生、相手が旧約学の先生だったから当然かもしれませんけれども、先生、パースペクティブって何ですか、何を想像するかと尋ねると、「預言者」と言われ

ました。この先生の場合には、預言者といった場合に、もちろん現実をどれだけ深く見るかということもあるでしょうけれども、どこまで遠くまでその目が届くかという、時間的な遠さを考えられたのです。空間的にどこまで遠くまで見えるかということだけではなくて、時間的に見通しがきくかを大切に考える考え方です。預言者の場合は、神のまなざしにおいて時をはかるということを知っていなければならないわけです。

こういうふうに分が何かをする時に、いろいろなものを視野に入れながら行動する。あるいは見通しを立てている。そういうところで、どれだけ明確なパースペクティブを持っているかということが、逆にその人の実践を確かなものにする。そこで忘れてはいけないことは、たとえば預言者という時に、預言者は神に招かれて、召し出されて、神の言葉を与えられて派遣される。そのように、その人を背後から支えている現実もあるのです。だから預言者のパースペクティブは独特のものになるわけです。皆さんに問われるのは、日曜学校教師のパースペクティブです。これは、ただひとりの信徒として日曜学校の現実を見るのとまるで違うでしょう。子どもたちに対するある責任を持つ。神から与えられているものとして子どもたちの現実をどう見ているか、その現実のなかで何をするつもりなのか、そういうことがみんな問われてくる。このヒルトナーという人は教会において行われる行為に一方では必ず固有のパースペクティブというものがあると言いました。たとえば、説教するという時には、説教することと結びついたパースペクティブがある。それから後でもっと丁寧に考えてゆきますけれども、牧会をするという時には、説教壇を下りて、牧会をする時には牧会を規定しているパースペクティブというものがある。

ただしこのヒルトナーの言っていることで私が一番影響を受けたのは、パースペクティブと

いうのはひとつの行為において、重なって働く。神戸でこういう話をしたのですけれども、ヒルトナーはその時に、ちょっとコメントをつけます。コンパートメント思考法と異なると言っているのです。コンパートメントというのは日本語にあまりなっていませんけれども、外国に行ったら楽しいのは、列車に乗ることです。たいてい航空機とバスでツアーをやってしまいますけれども、どこかで列車に乗るとおもしろいと思いますが、いろいろな列車があります。ほぼヨーロッパの列車で共通なのは、長距離の、従って急行列車には、コンパートメントというのがある。車両を貫く廊下がずうとある。廊下を歩きながら自分が座れるコンパートメント、小部屋を見つけなければなりません。指定席ならば番号を見つけて入れればよいし、自由席なら、これはまた楽しいので、ずうと見ながらすいているところを探すことになりますけれども、相客を捜すわけです。今日はあのきれいなお嬢さんの向かい側に座って楽しもうとか、うっかりおしゃべりに巻き込まれると面倒だから、黙っていそうな人のそばに行こうとか、案に相違しておそろしくおしゃべりなおばあちゃんに出会って降りるまで話を聞かされるということもあったりして、これは楽しいものです。しかし、ひとつのコンパートメントに入りますと、隣のコンパートメントに何が起きているかわからない。お客さんが入れ替わったかどうかもわからない。

ちょうどそういう風に、欧米の学問というのは、たとえば説教、それは説教という小部屋に入っている先生が取り扱うので、その部屋に入って研究するということになる。隣の部屋で牧会学の専門の先生がいる。説教の先生と牧会学の先生とは部屋が違うものだから対話もない。ちょっと牧会的なことになると、ああそれは牧会の問題だから牧会学の先生のところに行きなさい。隣の部屋に行けばよい。ヒルトナーは、それはおかしいと言うのです。われわれが、

実際に何かをやっている時に、たとえば説教をしている時に、考えてみたらよいのです。説教者はそこで牧会をしていないのか。メラーさんの、先ほどの『慰めの共同体』という本の中でメラーさんが問うているのも説教においても牧会しているでしょうということです。反対に考えると説教壇を下りて誰かと語り合う。私は先ほど〈牧会する〉と言いましたけれども、大人であろうが子どもであろうが、牧会の基本は後で詳しく考えますけれども、対話です。特にトゥルンアイゼン先生は〈膝つきあわせての対話〉といわれました。マン・トゥ・マンです。バスケットボールなどでは一人の人に一人の人が向かい合うような形でいつも走り回っている。そういうディフェンス、防御の仕方、それと同じで、マン・トゥ・マンで話を聞いてあげる、こちらも話をしてあげる。その時に、説教してないのか、福音を説かないのか、そんなことはないのであって結局は個人的なパーソナルな対話においても説教と同じ福音を説く。そうでないと問題の解決は起こらな。「今やっているのは説教じゃないのだから」なんて言って、イエスさまぬきでやる、そんな対話は教会堂でやる必要はないし、キリスト者のする対話である必要はない。ヒルトナーさんは、対話をしている時にも説教しているでしょう、と問う。そうやってそこでいろいろなパースペクティブを拾い上げてゆきます。その中のどれかが、たとえば、説教する時には、説教するというパースペクティブがドミナントになっている。ドミナントというのは音楽の用語です。訳してみれば、〈支配的な〉パースペクティブということになります。そうすると、説教では、説教するというパースペクティブが基本になって、牧会のパースペクティブやその他のものが重なってくるのです。

そこで、われわれもヒルトナーの真似をして主たるパースペクティブを数えてみます。第一に、「宣教のパースペクティブ」、つまり「福音を宣べ伝えるパースペクティブ」です。これは

一番大きなもので、私どもの実践のどれをも買いかもしませんが、限定すると、この「宣教のバースペクティブ」に並んで、「子どもの教会を形成しようというバースペクティブ」、いつも「子どもの共同体を作ろうとするバースペクティブ」、それから改革派教会では特にそのことに力を入れられると思います、「教理教育のバースペクティブ」、そういうものが牧会をする時に共に働いていると言えます。もちろん基本になるのは「牧会のバースペクティブ」です。

こういうバースペクティブは他にも数えることができると思いますが、あまり数多く数えるとややこしくなって自分のやっていることをきちんととらえることができなくなるので、ここでは参考までに、宣教のバースペクティブ、教会形成のバースペクティブ、教理教育のバースペクティブを挙げました。

ここで、教理教育のバースペクティブについて、一言言っておかなければなりません。最後の方で、われわれの牧会の対象についても考えなければいけないと思うのですけれども、西部中会で「子どものための説教入門」をお話した時から考えていることがあります。日本キリスト改革派教会が洗礼を受けた子どもたちのことを、私がおりました鎌倉雪ノ下教会では「教会の子」と呼んでいたのですけれども、「契約の子」と呼んでおられる、これはよい言葉だと私は感心しました。「教会の子」という言い方も、それなりの独特のバースペクティブがあると思うのですけれど、契約の子というのはもっと視点が明確だと思って気に入りました。その場合に、しかし、「契約の子」というのは、もちろん洗礼を受けていない子どもたちに対しても何らかの解釈を加えれば同じ言葉が使えるかもしれませんが、基本的には洗礼を受けている子どものことのようにです。洗礼を受けている子どもに対して、改革派教会がカテキズムを重んじて自分たちの教会なりのカテキズムを考えて、教理教育に力を入れる。その場合にどうし

ても洗礼を受けていない子どもが必ずしもそこではまだ明確に位置づけられていないのではないか。そのことをもっと積極的に言うと、私は自分が牧師であった時にはやっていないのですけれども、今だったらそれこそさっき申しましたような意味での実験をしたいなど思っているのは、洗礼を受けた子どもとそうでない子どもとははっきり意識的に分けた日曜学校教育ができないかということなのです。これは実は牧師であった時に考えなかったわけでありません。なぜかと言いますと、鎌倉雪ノ下教会という名前の教会でしたが、すぐお隣に雪ノ下カトリックという教会があったのです。その雪ノ下カトリック教会で子どもをどうやって教育しているか私は興味を持って何度か見学に行ったのですけれども、そこで力を入れて子どもを対象にやっているのは子どものための伝道です。土曜日に土曜学校というのをしている。これは洗礼を受けていない子どものための集会です。洗礼を受けている子どもが来てもよいでしょう。来たってよいのですけれども基本的には洗礼を受けていない子どもたちに対する集会です。二三次私は行きましてしばらくそこで見学させていただきました。はっきり言って伝道集会です。だから教理などがそこで語られることはない。礼拝らしい礼拝もしないようです。賛美歌を教えるということもあるし、祈りを教える、これはきちんとしておられましたけれども。外国人の助祭、司祭でなくて助祭の方が、カナダ人でしたが、その方が一人でやるのです。あと信者の方たちが二、三人いてお手伝いするだけで、このカトリックの若い聖職者が、聖職者の衣服を着ているわけでもなく、セーター姿で床に腰を下ろしてギターを弾きながら歌を教えたりする。そして、おそらく自分なりのバースペクティブが明確なのでしょう。何か神さまの話をしています。そうかと思うと、私が行ったものですから、興味を持ってプロテスタント教会って何ですかとって突然われわれのどこを訪ねてきた

りました。そして私にプロテスタントの話をさせたりと自由にしておられました。洗礼を受けた子どもたちは土曜日でなくて日曜日にミサに出るのです。もちろんミサに出る子は初聖体というのを5歳ぐらいに受けまして大人と一緒にミサに出て聖体を受ける。子どもたちは子どもたちなりに、ここはあまり丁寧な話を聞いておりませんが、きちんと子どものための交わりはあるのだそうです。そしてもっとよく分かるようになると、公教要理、カトリックのカテキズムを教える。言葉が分かるようになってから公教要理教育、教理教育をする。

こういうところではっきりと洗礼を受けている者と受けていない者とを区別しておりました。ですから教理教育のバースペクティブというのを考えた時に、教理教育をしないバースペクティブというものもあるのかなという思いがあります。皆さんの考え方に触発されてこういう子どもたちのための、はっきりし伝道意識だけで貫かれる集会というのものもあるのではないかということを考え始めているのです。

いずれにいたしましても、こういうバースペクティブを、先ほど申しましたように、ごちゃごちゃに考えないで、きちっととらえて、洗礼を受けている子どもに対してはこういう姿勢、洗礼を受けていない子どもに対してはこういう姿勢を整える。それをバースペクティブと呼んでいるわけで、そういうことをお互いに明確にすることによって、皆さんが教会の行為として日曜学校をしていく時に自分たちの姿勢を明確なものにすることができるのではないかと、そう思うのです。そこで、ものの見方、事柄をどのように展望しているか、何よりも基本的なこととしてそこで何をやる気なのかということを見定めることによって、自分たちがやっていることをきちんと整えることができます。また神学的に絶えず吟味をしていくことができます。先ほど申しましたように、このバースペクティブというのは、それぞれの日曜学校によって、

具体的には違ってきますから、おそらくそれぞれの日曜学校の独自の日曜学校教育的なバースペクティブというものが生まれて来るであろうと思います。こういうところは、日曜学校教師会が牧師あるいは長老の指導を受けながら、きちんと勉強しなければいけないと思います。勉強して、バースペクティブ、考え方を身につけると、繰り返して言いますが、「あなた今何やってるんですか」といわれた時にそれなりの答えができると思います。何やってるの、と言われても、と応えるのに困るようだと、教育行為自体が不明確になっていると思います。

そこで教会のバースペクティブとは何だろうか。それを丁寧に考えていきたいと思います。で、いくつかのバースペクティブを挙げてみました。これは、自分が教会をしているという時、何をしているのかという中味に踏み込んでいくことです。

第一は、共同体を「世話するバースペクティブ」です。(世話)というのは日本独自の伝統的な側面を持っております。教会学校そのものをも、教師たちが世話をよくすることによって作られる共同体であると理解することです。私が最初に伝道したのは、石川県の金沢です。北陸三県、つまり富山、石川、福井の三つの県にまたがる地域の教会がひとつの単位でよく共同で伝道しました。私はまだ若い伝道者でしたから、間もなく北陸三県の青年たちの集まりのリーダー格になりました。いろいろな教会の青年たちとともに仲良くなって楽しかった。合同の青年たちの集会をよく行ないました。講師を東京から招いたりする。教団かあるいは自分たちの地域が交通費を出してお招きする。そこで日頃は交通費を出して中央から講師を招くことがしにくい教会を助けていただく。一日早く来ていただいて、どこかの教会で説教していただく。どこの教会にしようかと相談すると、ある教会の青年がいつも名乗り出ました。「ぼくのところでして

ください」と。「君ねえ、もう何回目ですか。どの講師でも君のところに引っ張り込みたがる。そんなのはわがままだ。もっと公平に考えよう。なぜそんなに他教会の先生に来て頂く事を求めるのか」。そう尋ねましたら、こう答えた。「いや、うちの教会の牧師の説教でなければよいのです」。愕然として尋ねました。「そんな失礼な、どうしてそんなことを言うんだね」。「先生も知っているでしょう、うちの牧師は説教はもうどうしようもない」。「どうしようもないという牧師の説教をどうしていつも聞き続けているのか」。「いや、説教をあてにして礼拝に出ているんじゃない。他には行かれない。あの先生にはすっかりお世話になっていますからね」。青年がそう言うのです。その言葉を聞いて、ほとんど絶望的な気分になりました。この青年の考え方をどうやってひっくり返そうかと思いました。若い人が、お世話になっているからこの教会で教会生活をしているのだというのはとても日本的です。彼の場合は極端ですけれどもわれわれの中には、そういうところがあるのです。しかも、これは必ずしも否定的に考えることではない。私がお世話をよく考えるようになったのはもっと後のことです。

教会の牧師は世話をします。この場合の世話というのはありとあらゆることを含みます。雪ノ下カトリックの司祭室を私は時折お訪ねしました。話し合っておりましたら、ある時とても印象深い電話がありました。相手は高齢の女性です。風邪を引いたと訴えてきた。一人暮らしです。の司祭は答えて、「もう少し具合が悪くなったらお医者さんに行かなければいけないね。とにかくシスターを送るから」と言われた。カトリックの場合には、シスターも働いておられ、まさにそういうときによく世話をします。「寒くないように気をつけなさいよ」などと慰められ、最後に何をなされたかという電話口で祈るのです。とても短いけれども祈られた。「今お祈りしたから安心して休んでいなさい」。風邪引いた

からって神父様のところに電話をかけるという関係は、とてもよいと思いました。お年寄りの一人暮らしは心細いものです。その時にいつも神父様のことが念頭にあって、どんなことでもこのおばあさんは言うてくるに違いない。それをこの神父はそんなことは私の仕事じゃないと言って断らない。

こういう関係は日本のプロテスタント教会の中にもいろいろな形で生まれてきました。私の知っているある老先生は、俺の一番うまいのは、引っ越し荷物の作り方だと言われました。それは教会員が引っ越しというと先生を頼むからです。先生は、楽しそうにあっちに行って荷造りし、こっちに行って荷造りしていらっしやいました。こういう関係を、私は必ずしもネガティブに考えません。荷造りばかりしていて説教ができなくなったら問題ですけれども、そうではないのです。それは、ほとんど家族のように教会が共同体を作っていると言うことでしょう。こういうところで世話をします、その世話の中には荷造りばかりでなく、結婚の世話もする、就職の世話もする、いろいろな世話をします。ただし私はこれを牧師だけにやらせていたらだめだと思っています。教会員がお互いに世話ができるようにならないといけません。牧師一人が世話しているのでは問題だと思っています。

この世話をします共同体というのは、日本のさまざまな共同体の特質となってきました。会社も学校も、そうした〈お世話共同体〉でありました。今は、それが変わってきました。家族そのものが、互いに世話することができなくなって来ている。高齢者の世話をしない若い世代の主張が当然であるかのように思われ、学校も企業も世話をしないして、世話をしても下手になってきました。メラーさんの『慰めの共同体』のなかでもこのことが論じられています。あるドイツの実践神学者が、教会というのはドイツ的な意味において「互いに世話ができる共同体である」と語っているのを積極的に引用しておられ

ます。現代ドイツにおいても、〈世話〉するところ、世話に生きる共同体の回復が新しく求められているのではないのでしょうか。

使徒言行録第20章28節を読みます。「あなた方自身と群全体とに気を配ってください。聖霊は神が御子の血によってご自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群の監督者に任命なさったのです」。「世話をさせる」、口語訳では、「牧させる」となっていました。新共同訳はもともと現代的な日本語に移すことを意図したものでしょうが、それが、ここでは「世話をさせる」というむしろ古風で、日本的な言葉を用いていることは、興味深いことです。となっています。もしかするとカトリックの神学者の意見でこうなったのかなと思っていますのですが、とてもおもしろい翻訳です。神の教会の世話をさせるためにこの群の監督者に任命なさった。「監督」というと上に立っている監視しそうですけれども、それだけではなくて「世話をする」。「世話をする」と訳されているのは、羊飼いが「羊を飼う」という意味の言葉です。教会員を「飼いなさい」と訳してもよいものです。ヨハネによる福音書第21章では、およみがいりになった主イエスが、ペトロに「私を愛するか」と問われ、「わたしがあなたを愛することはあなたがお存じです」と、ペトロが答える。そのような問答が三度繰り返される。そのたびに、イエスは、原文は言葉が違っているのですが、同じ意味の言葉で、「わたしの羊を飼いなさい」と言っておられる。つまり牧師の牧というのは、牧畜の牧ですけれども、それを使徒言行録では世話と訳している。羊飼いは羊のあらゆる世話をするでしょう。そういうことが先ず考えられています。特に日曜学校の牧会ということを考える時に大事だと思うのです。教師は子どもの世話をするのです。

東京神学大学で教えている時に卒業旅行によく同行しました。ある時に、あるキリスト者が経営している大きな社会福祉施設に見学に行き

ました。いくつかの施設を訪ねまして、ちょうどお昼時に、かなり重い障害を持っている、特に知恵遅れの子どもたちの施設に着きました。子どもたちが食事をしていました。そこにお兄さんお姉さんが登場した。子どもたちが「わあ」と、先生たちの抑止も聞かずに立ち上がって、われわれに向かって突進してきた。ご飯粒はついているし、鼻を垂らしているのもいるし、それと食べ物とがごっちゃになっている。何が起こったかという、神学生たちは立ちすくんだ。一種の恐怖感を覚えたのです。私は、ちょうどポケットにティッシュを持っていたものですから、ティッシュを配って、「ほらあの子の鼻を拭いてやって、この子のご飯粒をとってやって」と言いました。しかし、すぐに手が出ない。どうしてよいかわからない。これは問題だと思いました。それで、その福祉施設に毎年学生たちを合宿させる計画を立てたのですけれども、学生紛争が起こってそのプロジェクトは中止になってしまい、そのままとなりました。残念だと思いますが、〈世話〉というのは具体的なことです。私が日曜学校の教師だった時には、ティッシュペーパー、そのころはちり紙と言っていましたが、それをポケットに入れていつも持っていました。必ず、はな垂れ小僧が来るからです。今の子どもとちがう。「青っぱな」を二本垂らしていました。それをこすって、袖のところがべたべたになっている。子どもたちを迎えた時に真っ先にやったのは、礼拝が始まる前に鼻を全部拭いてやることでした。そうして手が汚れていると台所に連れて行って、手を洗ってやりました。神様の前に入る時にはちゃんとしなければならぬ。〈世話〉というのは、そういうことまで含むと私は思っております。

第二、「魂への配慮のパスpekティブ」。告解（罪の赦しの秘跡）、教会戒規（教会訓練、教会規律）の伝統に生きる牧会のパスpekティブです。これを魂への配慮（ドイツ語が、die

Seelsorge, 英語で言うと、同じ言葉ですが、the care of soul, soulに当たるのがドイツ語の Seele という言葉、Sorge が care です) の パースペクティブといたします。

聖書的根拠がはっきりあります。「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける、あなたが地上でつなぐことは天上でもつなぐれ、あなたが地上で解くことは天上でも解かれる。」マタイによる福音書第16章19節、主イエスのペトロに対するお言葉です。その次はよく心にとめていただきたい言葉であります。マタイによる福音書第18章の14節から20節まで。「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。聞き入れなければ、他に一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人とか徴税人と同様に見なさい。はっきり言うておく。あなた方が地上でつなぐことは、天上でもつなぐれ、あなた方が地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつなぐにして求めるなら、私の天の父はそれを叶えてくださる。二人または三人が私の名によって集まる場所には、私もその中にいるのである」。

これは二つとも非常に内容の豊かなもので、丁寧に説き明かすとそれだけで長くなると思います。これについては『福音主義神学における牧会』の中でも丁寧に取り上げているところで、そこで詳しく調べていただくとよいと思います。はじめに〈告解〉という言葉が出てきています。今は第二バチカン会議以降、日本のカトリック教会は「赦しの秘跡」と呼ぶことになり

ました。しかし、告解という言葉の方がわれわれには慣れているので、これを用いています。

告解という言葉はカトリック教会だけのもののように考えられるかもしれませんが。東京神学大学の学生たちに講演を頼まれて「悔い改めについて」語りました。その時に担当の学生から私に依頼の手紙が来て、「最初に現代のプロテスタント教会の悔い改めというのをどういう風に考えたらいいか聞かせてもらいたい。ルターがカトリック教会の告解を廃止したことはわれわれも教授から伺ってよく知っております」と書いてありました。私の講演は、誰がそれを教えたかそれを追求するつもりはないが、ルターが告解を廃止したと言うのは間違っている、ということから語り始めました。これは歴史的事実ではありません。カトリック的な意味での告解は否定しましたが、ルターの教理問答を読みますと、告解のやり方をきちんと書いてあります。この場合の告解において大事なことは、具体的に罪を犯した時にその罪をこそそ一人で悔んでいるのではなくて、きちんと牧師にその罪の悔い改めをするということです。そしてルター派的なやり方で罪の赦しの約束を聞かせていただいて慰めを受ける。具体的な罪の処置です。このやり方は、ルター派教会の中に、消えてしまった地域もありますけれども、生き生きと生きておりまして、今はむしろ新しい脚光を浴びているということができると思います。

『魂の配慮の歴史』をお読みになりますと、二千年の教会の歴史の中で一貫して告解が大きな主題であったということに気づかれると思うのです。トゥルンアイゼン先生なども牧師の中でもこれまでの最も優れた牧師の一人として数えているドイツの牧師ヴィルヘルム・レーエも、『魂の配慮の歴史』の中に出てきますが、この牧師は、ルター派教会で火が消えかかっていました告解を、自分がおりましたノイエンデッテルスアウという村の教会で復活させて、見事な成

果を上げた人です。そういう例は枚挙にいとまがありません。カトリックの牧会者たちも何人も紹介されておりますが、この人たちが真剣に力を入れたのは告解です。「アルスの司祭」と呼ばれたジャン・バティスト・ヴィアンネという司祭などは、午前5時から夜遅くまで告解を聴き続け、フランス中から人びとが訪ねてきたという記録があります。

われわれは確かにカトリック的な告解はいたしません。しかし、ここで主イエスが語っておられるお言葉は実践すべきでしょう。特にマタイによる福音書第18章で語っておられる、罪を犯した者が一人でも滅びてはならない、それは神のご意志ではない、神のご意志に従ってやるならば罪を犯した人は滅びないようにしなければならぬ、という主の言葉を真剣に受け止めたい。生徒のためにも受け止めたい。そこで先ず何をやるかという二人だけで話す。これが告解の基本的な形です。この場合には罪を犯した人が訪ねてくるのではなくて、罪を犯した人をこちらから訪ねる。そして、あなたは神の前に罪を犯したではないか、悔い改めなければいけないと勧める。マタイによる福音書は、その場合に相手が聞いてくれない場合を考えています。私一人で行っても、「私はそんな悪いことはしていない、悪いのはあのひとです」などと言いかねない時に、今度は二人または三人が行く。そうなりますと、真理の証が立つ。行って説得して、それでも言うことを聞かないと、教会にその事柄を申し出て、教会がそれを処置しなければならぬ。これが改革派教会におけるディシプリンのひとつの根拠となりました。「教会の戒規」と訳したり、少し広げて「教会の訓練」、もっとくだけて言うと「しつけ」、あるいは「教会の規律」と訳すこともできます。それぞれの意味合いがあると思いますけれども、教会の生活の中核をなしているもの、教会の営みの中核となってきたものです。

これは広く改革派教会に対して問われる、私

どもも教団の中にあつて改革長老教会の伝統に生きている者ですが、改めて問われていることだと思っています。ディシプリン (discipline) というのは弟子 (disciple) という言葉から生まれております。あとで、〈弟子の共同体のパスpekティブ〉について語りますが、それと重なることです。特に日曜学校のことを考えて〈弟子の共同体のパスpekティブ〉が大切だと思っておりますが、現代の教会が主の弟子としての規律のある共同体であることが問われるのです。戒規というのは戒めの規則、その内容から言っただけでほとんど罰則といつてもよいものですが、罪は罪として明らかにしてそれに対する教会的な処置をとる。その中核にありますものは、聖餐にあずかることを拒否する、陪餐停止であります。こういう規律をどこまで行っているかということが問われています。日曜学校の場合には相手が子どもです。まだ陪餐する資格はない。ですから今申しましたような意味での戒規というのは話題にならないかもしれません。しかし、陪餐にあずかっていない子どもは罪を犯さないとはいえないのです。ここがとても大切なことだと思ひます。

かつて教会関係の幼稚園や保育園で働いている保育者が全国から集まってくる大会で、講演をしたことがあります。この問題について触れて語りました。幼稚園、保育園で聖書の話をする時に、罪についてはっきり話をした方がよいと言ひました。すぐに、一人ではなく何人もの方から、質問の文章が届きました。「子どもに罪がわかりますか」というのです。私は問ひ返した。「それならば、罪がわかるようになるのは何歳からですか」。返事がかつたのです。幼児教育理論で何歳から罪が分かるから、何歳以上の子どもについて罪について説教してよろしいということがはっきりしているのでしょうか。そんなことはないようです。子どもは純真で罪を知らないということはない。子どもは子どもなりに罪の意識がある。なければ罪の意識を呼び起

こさせてやる必要がある。こういう罪の問題は、まず説教の問題として問われるでしょうが、しかし、子どもが自分のやったことは神さまに対して悪いこと、そして友達に対しても、あるいは親に対しても申し訳ないことだったということがよく分かるのは、また、一対一の対話によるであろうと思います。

クリスマスに、私の『自伝的説教論』という、かつてキリスト新聞に連載したものが本になって出ます。私はそれとなく自分の子どもの時の体験についても書いています。小学校二年生くらいであったでしょうか、日曜学校のクリスマスに子どもたちがみんなろうそくを持ってステージの上に上がって、光の賛美歌をいました。「光の子ども」、「星のように愛の光を」などを歌いました。ろうそくを持って歌っているうちに、ろうそくの火が前にいる女の子の髪の毛にちょっとついた。ちりちりっとならぬ。さあおもしろくなって歌を歌いながら、「ちりちりっ、ちりちりっ、ちりちりっ」……。ご存じでしょうけれど、髪の毛が燃えるといやな臭いがすぐ広がるのです。子どもたちは動揺しました。もちろん、犯人はすぐ見つけましたが。伝道師で、その日曜学校の責任者をしておられたまだ若いきれいな女性がおられたのですが、その先生が私を階段のところに座らせて、「あなたがどんなに悪いことをしたか」と私に分からせようとした。私は最初は、なぜそんなに叱られるのか分からなくて、きょとんとしていました。そのうちその先生が泣き出していました。さあそこで、友達に責められました。「大好きなあの先生を泣かした」と、非難攻撃を浴びて「ああそうか、ぼくは悪いことをやったのだ」ということが気づくようになりました。子どものいたずらにすぎないでしょうが、人の体を傷つけるのですから、それがどれほど悪いことが教えないければならない。その先生が私を座らせて、自分も膝をついて、かんで含めるようにあなたがやったことはどういうことか教えてくださっ

た。罪を問うというのはああいう姿勢かなと今になって思う。忘れないことです。頭ごなしに叱ったのではない。あれが男の先生だったらどんな叱られ方をしたかと思います。この先生は説得したのです。分からせようとしたのです。こういう罪をめぐる対話が求められる。教会の姿勢は、今は動揺しています。しかし、いつでも誠実に罪を問うてきたというこの伝統が皆さんの日曜学校の牧会の中でどう受けとめられているでしょうか。牧会の根本問題は、この罪をめぐる対話がどこまでできるかということだと思っているのです。もちろん説教で罪について語るということはできると思うのですし、そうしなければなりません。しかし、その説教の言葉が一人ひとりの子どもに向かって具体化して行く時に、こういう対話ができるようになるかどうか。それは観念的に「うんうん」とうなずいているだけでは間に合わないの、実際に子どもとそういう対話をする時にどうしたらよieldろうかと、よく学んでいただきたいと思います。

次に「慰めの共同体のパースペクティブ」。これはコリントの信徒への手紙Ⅱ第1章の4節以下が語ることです。

「神は、あらゆる苦難に際して私たちに慰めてくださるので、私たちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人びとを慰めることができます。キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、私たちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。わたしたちが悩み苦しむとき、それはあなたがたの慰めと救いになります。また、私たちが慰められるとき、それはあなたがたの慰めになり、あなたがたが私たちと同じ苦しみに耐えることができます」。

教会は慰めが交流するところです。自分とコリントの教会の人たちとの間で慰めが行き交う

関係のあるのだと使徒パウロは語りかけております。この「慰め」という言葉について、日曜学校の教師会で牧師の説き明かしを聴いて、ぜひ勉強なさるとよいと思います。「慰め」、「励まし」、「勧め」、さまざまに訳される、ひとつのギリシア語があります。バラクレーシスです。バラというのは、「そばに」という意味です。クレーシスというのは「呼ぶ」という意味の言葉です。ですからバラクレーシスというのは「そばに呼ぶ」という意味になります。そこから、「そばに呼ばれてしてあげる」とも意味するようになりました。そばになぜ呼ばれるかという、慰めを求める、助けを、励ましを求める人が呼ぶ。そこで側に呼ばれて助けてあげるほどの代表的存在、弁護士をも意味した場合があります。あるいは主イエスが、「聖霊」をこの名前でお呼びになったこともあります。ヨハネによる福音書第14章です。弁護士、助け手です。

バラクレーシス、これを日本語がまず慰めと訳しているのはすばらしいと思います。もちろん外国語の翻訳に先例があるわけですが、そばに来て慰める、あるいは傍らにいてあげるだけでも慰めになる。これが先ほどの告解の伝統から生まれる対話の大切な課題をも意味する。罪を犯した人の傍らに行って、ただその罪を糾弾するだけではなく、罪人が立ち直れるような助けになる、慰めになる。トゥルンアイゼンの『牧会学Ⅰ』の訳書に私が副題を付けて「慰めの対話」といたしました。このことも、あるいはこのことこそ、日曜学校の教師のしなければならぬことかもしれない。現代の子どもたちが一番知らないのは、この慰めだと思います。自分の傍らに誰かいてくれて、慰めてくれる。立ち上がらせてくれる。学校の教師であれ、親であれ、子どもにとって本当にかげがえのない存在になるのは、教師や親が、子どもにとって慰めの存在になるかどうかであると思いますが、現代の人間というのはまさにこの慰めというのがわからなくなってきています。子どもたちの

犯罪が問題になりますけれども、犯罪を犯す子どもたちの根本問題は慰められていないということです。こういう慰めをどうしたらよいかということが、とても大きな課題です。

四番目は「弟子の共同体のバースペクティブ」でありまして、先ほど申しましたようにキリスト者の共同体というのは、弟子の共同体です。使徒言行録をお読みになってみるととてもおもしろいと思いますが、自分たちのことをいろいろな呼び名で呼びますけれども、何よりも「弟子」と呼んでいます。私どもは教勢と呼んで、教会員の数を挙げますが、使徒言行録は弟子の数が何千人になったと書いている。第6章、第15章では教会総会にあたるような会議のことを記していますが、「弟子たち」が集まって会議をしたと言っています。ディサイプルスという教派の名前がありますけれども、私どもは皆弟子たちです。牧師であった時に言いました。皆さんは弟子であると。鎌倉雪ノ下教会では、「クリスチャン」という呼び名はしませんでした。ただでさえ外国から来た外国の宗教みたいに言われるのに外国語で自分たちの名前を呼ぶ必要はない、立派な日本語があるのだから「キリスト者」でよいと言いました。しかし同時に忘れてはならないことは鎌倉雪ノ下教会員の教会員数600と言った時に、ここに生きる弟子たちの数600という意味だということです。私たちは主の弟子となっている。

主イエスの伝道大命令と言われるマタイ福音書第28章18節から20節には、こうあります。「私は天と地のいっさいの権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなた方に命じておいたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。日曜学校は、この弟子の卵を育てているのです。

あるいはこれに併せて思い出していただければ

ばよいのは、ヨハネによる福音書第13章で主イエスが食事の席で立ち上がって弟子たちの足をお洗いにし、その時に主イエスは第16章までの長い教えを語っておられますし、第17章にはそれに続く長いとりなし、大祭司の祈りをしておられましたが、第13章14節に、こう言われたことです。「ところで主であり師である私があなたがたの足を洗ったのであるから、あなた方も互いに足を洗いあわなければならない。私があなたがたにした通りにあなたがたもするようにと模範を示したのである。」ここは、日本のプロテスタント教会がまだ十分に学んでいないところだと思えます。うっかりすると、世話の共同体だといいますが、世話されることだけに慣れて、教会員生活をするということは、牧師に世話をしてもらおうということだと、ずっと思いこんでいる人もいます。「あなたがたも主イエスのまねをして互いに足を洗い合う弟子となりなさい」という言葉をはっきり心にとめなくなってしまう。「足を洗うのは牧師さんの仕事でしょう」くらいのことしか考えない。しかし、そうではなくて私どもは、弟子を育てる。このことは、子どもたちにとってとても大切なことです。単なる倫理道徳ではなくて、今申しましたように罪を教え、慰めを語る、

そして慰められた者が作る共同体というものは、子どもなりにイエス様の弟子になる。互いに足を洗いあう弟子になることを学ぶ。もちろん牧師が弟子の先頭に立っているし、牧師も教師もまたそれに続く子どもたちの足を洗う弟子であることは明らかであります。主イエスが弟子の足を洗っておられるのですから。

午前中はここまでいたします。お祈りをします。

あなたに召され、あなたに違わされて、子どもたちの全存在を清め、洗い、あなたにお献げするための務めに生きている者たちの、このしばらくの学びの時を、どうぞ父なる御神、祝福し、御霊によって力づけてください。体は疲れても心は鮮やかな勇氣に満ちて、ここから帰ることができますように。御言葉と御霊の導きを心から願い、主の御名によって祈ります。アーメン。

※本講演録は、2003年11月24日に開催された中部中会教育委員会主催日曜学校教師研修会(於名古屋教会)で行われた講演をもとに、書き改めたものです。

日曜学校 2004年度カリキュラム (2004年7～9月)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単 元 の 目 標			
7月4日	唯一の神	問8	ウ小教理5
		使徒17:22-34	イザヤ45:21-22
子どもの救いと成長を阻害する多神教から決別することへと招く			
11日	生ける神	問9	ウ小教理5
		出エジプト32:1-6	イザヤ46:3-4
生ける神の愛を教える。神の愛を裏切らないことへと励ます			
18日	三位一体の神	問10	ウ小6、ウ大9、ハイデ25
		マタイ3:13-17	マタイ3:17
三位一体の愛の交わりに生きておられる生けるまことの神を提示する			
25日	三位一体の神の交わり	問10	ウ小6、ウ大9、ハイデ25
		ヨハネ4:7-16	ヨハネ4:16b
三位一体の神の交わりに招き入れられる救いの御業とその喜びを伝えよう			
8月1日	主権者なる神	問11	ウ小7、ウ大12、ハイデ26
		マタイ8:23-27	コロサイ1:16
天地を統べ治めたもう主権者、全能者なる神への信頼を証ししよう			
8日	天地創造	問12	ウ小教理9、ウ告白4章
		創世記1章	創世記1:1
この世界と自然は神の作品。そこに在ることの喜びと感謝、責任を証ししよう			
15日 (平和)	平和を創り出す	—	ウ告白20、23章
		マタイ5:43-48	マタイ5:9
平和主日として礼拝をささげる。敵を愛せよとの御言葉から、平和を考えよう			
22日	摂理の神 (一)	問13	ウ小教理11、ハイデ26-28
		マタイ10:26-31	マタイ10:30
神は今も働いておられる。わたしたちに慈しみ深く働かれる神に感謝しよう			
29日	摂理の神 (二)	問14	ジュネ28-29、ハイデ94-95
		ルカ7:11-17	ローマ8:28
占いやたたりなどを恐れる思いを取り除こう。主がわたしたちと共におられる			
9月5日	人間の創造	問15	ウ小教理10
		創世記2:6-25	創世記2:7
神の息を吹き込まれて生きる人間のすばらしさを証ししよう			
12日	罪と墮落	問16、17	ウ小教理12-15、ハイデ7-9、62
		創世記3:1-7	ローマ6:23
人間を愛しておられる神の悲しみのまなざしの中で、人間の罪と墮落を学ぶ			
19日 (敬老)	罪の悲惨	問18	ウ小教理17-19
		創世記3:8-24	創世記3:9
キリストを仰ぎながら、人間の罪の姿を学ぶ。自らの姿を省みることに招く			
26日	わたしも罪人	問19	ウ小教理16、ハイデ5
		ローマ7:13-25	ローマ7:24-25a
自らの罪を知り、悔い改めを新たにす。神の御前にひれ伏し祈ることへ招く			

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

テキスト 使徒言行録17章22～34節

〈偶像を追い求めるアテネの人々〉

アテネの人々は知的で、好奇心旺盛な人々であったようです。そのことは21節に、何か新しいことを見聞きすることだけで時を過ごしていたことからわかります。新しいことに関心を持つことは必ずしも悪いことではありません。しかしアテネの人々は、ひたすらに時代の流行を追いかけることで人生を浪費していたのではないかと思います。新しいものをたえず受け入れていても、それを受け入れている人の中身は依然として古いままだということもあります。そこでは、新しいものを取り入れることが自分を確立することにならず、むしろ流行に足元をすくわれて、時代の波に流されてしまうのです。

さらにアテネの人々は、新しい神々をもひたすらに追い求めていました。町に多くの偶像が置かれていたことに、そのことはあらわれています。しかし、朽ち行く偶像には人間にまことの平安と救いを与えることはできません。知っている神々のみならず「知られざる神に」と刻まれた祭壇さえもしつらえていたことに、新しい神々を次々にこしらえつつも得体の知れない運命や人生の不安といったものからときはなされることのなかったアテネの人々の姿が浮き彫りにされていないでしょうか。

このように時代の波にもてあそばされる傾向は、時代と場所をこえて私たちの国の人々にも見られるのではないかと思います。アテネの町と私たちの国は、多くの偶像に取り囲まれているという点でも似通っています。

〈まことの神にたちかえる〉

パウロはアテネの人々に説教し、まことの神の存在についてときあかします。パウロは彼らに、神は手で造った宮などには住まわれないし、人の手で世話してもらう必要もない方であること(24-25節)、そして人間が探し求めさえすれば、ご自分の側からご自分を見出すことができるようにしてくださっていることを論じます。そのように神が人間と近くありたもう現実を、「我らは神の中に生き、動き、存在する」(28)との印象深い言い方によって語り示します。

そして神が人類の救いのためにひとり子イエス・キリストを十字架に死なせ、よみがえらせたもうたことを説き、すみやかにむなしい神々を捨て、悔い改めてまことの神にたちかえるようながすのです(29-31節)。

コリントの信徒への手紙二5章17節でパウロが語るように、人はイエス・キリストに結ばれることによってのみ新しくされます。罪と死に支配された古い人は、ただイエス・キリストの贖いとよみがえりのみわざによって葬られ、新しい命によみがえるのです。そして人はこのキリストにあって唯一のまことの神のふところに帰り来ることによってのみ、まことの命の喜びを与えられ、いっさいの虚無や不安からときはなされるのです。

復活の使信を聞いてもあざ笑うか、その場でていよく話題をかえるという姿勢も、アテネとこの国の人々に共通したものであるのかもしれませんが、しかしどのような時にもまことの神を告げ知らせ、この神にたちかえるようにと語り続けることこそが、イエス・キリストからゆだねられた私たちの使命なのです。

(木下裕也)

カテキズム 子どもカテキズム問8

子どもカテキズム

問8 私たちの神さまのほかに神々はいますか。

答 神さまはただお一人しかおられません。

私たちをお造りくださった神さま、生きておられる真の神さまです。

この問は、問9との関わりで学ぶべきであろう。他の神々とは何かが分からなければ、問の意味も分からないからである。今日は、宗教多元化・多層化の社会であり、様々な宗教がある。そして、それらの宗教によって礼拝されている神々が、確かに違う。

これは、なにも今日的な課題ではない。古代イスラエルにおいては、カナンの豊穡の神々との対決が信仰生活の座であった。また、初代教会は、ギリシャ神話の世界に生きる人々に伝道した。新約聖書には、様々な天界の諸霊が登場する。

筆者は、これらの神々がすべて人間の空想であるとは思わない。霊的な領域があることを認めるべきではなからうか。私たちの思いを越えた霊的な力が、様々な形で働いていて、様々な宗教の形態を生み出していることを認めることは、キリスト教信仰と矛盾するものではない。

問題は、そのような様々な霊的な現象を生ける真の霊なる神様と結びつけることである。イエス・キリストは、天にあっても地にあっても、一切の権能をお受けになられた。他の霊的な活動を認めても、それらは、すべてイエス・キリストの権能に逆らえない仕方では活動が許されているに過ぎない。

霊的な力や霊的な活動を認めても、それらをもって、唯一の生ける真の神と呼ぶことは許されない。聖書の神のみが、「神」という言葉の正しい用法における「真」の神である。聖書の神を真の神と呼ぶとき、他の神々は本来の意味では神とは呼べない「偽り」の神となる。

そして、私たちは、神々の真偽判定を行う者ではない。それをすれば、私たちが、神をも見極める神以上の者となるであろう。聖書の神と他宗教の神々を比較して、私たちの理性により、真の神が分かるものではない。では、どうして他の神々は「偽り」で、聖書の神のみ「真」の神であると言えるのであろうか。神は、救いの恵みとして、聖書を通して、ご自分が真の神であると自己啓示してくださる。私たちは、聖霊が与えてくださる信仰によって、聖書の神が真の神であると知り、受け入れるのである。

神啓示によれば、神は万物の創造主であり、私たちの造り主である。造り主である神様以上に私たちのことをご存じなお方は、この世にいない。そして、神は、生きておられる。死んでいない。祈りを聞き、祈りに答えることができる神である。

(岩崎 謙)

テキスト 使徒言行録17章22～34節
カテキズム 子どもカテキズム問8

(単元のねらい)

神がたくさんいることが、どれほど不合理で馬鹿げたことかに気づかせて、まことの神はただお一人であること、そしてその一人の神は、ご自分の中で統一し、一貫した、信頼できる神であることを理解させていく。

「まことの神さまはただお一人」

あるお店に泥棒が入り、店の物がごっそりと盗まれてしまいました。店のご主人は大変困って、いつも商売繁盛をお願いしている近くの神社にお参りに行って、泥棒が捕まるようにお願いしに行きました。一方、その店に入った泥棒も、自分が捕まらないように、そして泥棒の商売が繁盛するようにと、自分がいつも拝んでいる泥棒の神様にお願いし、盗んだお金を賽銭を投げ入れてお願いしました。みなさんは、どちらの願いが聞かれると思いますか。お店の主人の願いでしょうか。それとも泥棒の願いでしょうか。本当に神様がおられるなら、それは「お一人」だけのはずです。そうでないとこのようなおかしなことが色々起きることになるからです。もし神様がたくさんいるなら、泥棒に入られて困っている店のご主人と、泥棒と、どちらの願いが聞かれるかといえば、店のご主人の神様と泥棒の神様とで、力の強い方が勝つこととなります。もし泥棒の神様のほうが強ければ、泥棒は捕まることなく、いつまでも悪さを続けることでしょう。こんな馬鹿なことはありません。

けれども日本には「八百万（やおよろず）の神々」といって、とてもたくさん神々がいるかのように考えられ、拝まれています。そしてそれぞれが自分のご利益（りやく）を宣伝して、信者をかき集めています。「こっちの水が甘いぞ」と、それぞれの神々が互いに出し抜き合って、信者を獲得しようと必死です。しかしそれではたして真理や真実、正義は成り立つのでしょうか。本当に神

様がおられるとしたら、神様はお一人のはずです。アメリカの神、スペインの神、中国の神様と、神様がたくさんいたら、一番力の強い神様が真理で正義ということになります。戦争の大好きな神が一番であれば、武力こそ正義ということになり、暴力や腕力の強い人の言うことが真理になります。それはおかしいのです。神が本当におられ、この世に真理や正義が成り立つには、まことの神はただお一人のはずだし、唯一の神でなければなりません。まことの神様は、「わたしが主、ほかにはいない。わたしをおいて神はない。正しい神、救いを与える神は、わたしのほかにはない」（イザヤ45章5節）とわたしたちに呼びかけられる、生ける神様なのです。

ここでパウロは、どんな神様かも分からずに、とにかくなんでも神様として拝んでいるアテネの人々に、本当の神様とはどのような方であるかをお話しました。「世界とその中の万物とを造られた神が、その方です。この神は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。」世に神々といわれるものがあっても、それは人間が造ったもので、木や石にすぎず、無力で衰れた人間に似せて造られた像、人間にかたどられたものにすぎません。人間に似せて造られた神様とは、人間をご自身に似せて造られた神のパロディーで

す。本当は、人間が神様に似せて造られたのであって、神様が人間に似せて造られるものではありません。それなのに人間は、自分を救うこともできない無力な自分に似せて、無力な神々を造り、それを神様として拝み続けているのです。「世の中に偶像の神などはなく、また唯一の神以外にいかなる神もないことを、わたしたちは知っています」(コリント一8章4節)。人間が神様を造るのではなく、人間が神様によって造られたのです。ですからまことの神様は、人間に仕えてもらう必要はなく、人間が何かしないと、立つことも動くことも、食事をすることも旅行することもできないような情けないものではなくて、むしろわたしたちこそ、このまことの神様の守りの御手の中で「生き、動き、存在している」のです。

聖書では、繰り返して「まことの神」はただお一人であり、「唯一の神」であると語ります。神様が「唯一」であるとは、数において一つ、一人というだけではなくて、神様ご自身の中で統一し、一貫しておられるということでもあります。自己矛盾することがなく、心変わりすることがない、だから昨日言ったことと今日言うことが違うということがない御方だということです。人間は心変わりし、その熱心さも信仰も変化していきますが、唯一の神様はそうではありません。裏腹などころがなく、私たちに対する約束を誠実に守りぬく御方なのです。永遠に一貫しておられる御方だから、心から信頼していくことができる、それが神が唯一であるということなのです。多神教の

神々は、互いが互いを出し抜きあって、自分に対する信者を獲得し、一人でも多くかき集めようとします。そしてそれぞれに自分のご利益ばかりを宣伝して信仰させようとする神々は、それを信じる者たちをも歪めていきます。知らずして、自分の信じる神々を鏡として生きるようになるからです。

ご利益(りやく)ばかりを宣伝して、自分にばかり引きつけさせていこうとする自己中心な神々を拝む人は、その神々に影響されて、心までひずんだ心になり、統一を失って人生がばらばらになっていきます。しかし唯一の神様を信じ、この神を鏡として生きる人は、その神様の統一された人格と一貫した誠実な姿勢に深い感化を受け、自らの人生も一貫したものとなっていきます。ですから唯一の神だけを信じ、統一され、一貫した唯一の神様を、あなたの神様、人生の主として信じていきましょう。それだけが、自分の人生を統一され、一貫したものとしていくことができるからです。永遠の神は、永遠の見通しの中でわたしの人生を見ていてくださいます。そしてその永遠の確かさで、わたしの人生を導いてくださるので、それは運命にもてあそばされる、見通しのきかない人生ではなく、見通しを持たれた方の確かさと一貫性の中で歩んでいく、統一された人生なのです。わたしたちは、まことの神さまに守られて、今日も元気に生きることができるのです。わたしたちの命の源であるただお一人の、まことの神様を心から信じていきましょう。(三川栄二)

[今日の暗唱聖句] イザヤ書45章21～22節

わたしをおいて神はない。正しい神、救いを与える神は、わたしのほかにはない。

地の果てのすべての人々よ、わたしを仰いで、救いを得よ。

〈主題〉

ただお一人の神さま

〈ねらい〉

「ただお一人の神さま」にいつも心から信頼して応えていくことを勧める。

〈展開例〉

みなさんは、れいはいしたり、おいのりしたりすることを大切にしていますか。神さまに造られたものの中で、人間だけがおいのりをしたり、れいはいをしたりしていますね。

ですから、だれをれいはいして、だれにおいのりするか、っていうことはとっても大事なことです。知らないで、わたしたちに答えてくれない神さまにおいのりすることはとってもむなしいことです。でも、多くの人たちは、人間が造ったものに、頭を下げて、おいのりをしています。それは、ほんとうの神さまのことを知らないからです。

でも、人間は弱いものです。何かによりすがないと安心できないですね。わたしたちも、弱く、何かによりすがないと生きていけません。ほんとうの神さまは、弱いわたしたちのために、ひとり子イエスさまを与えてくださいました。イエスさまを与えてくださった、ただお一人の神さまを信じて、いつもここかられいはいし、おいのりをしましょう。

〈お祈り〉

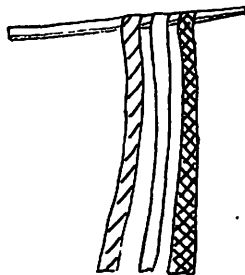
天の父なる神さま。わたしたちはみんな弱く何かによりがなければ生きられません。でも、こんなわたしたちのために、あなたはイエスさまを与えてくださいました。どうか、ひとつのところで、イエスさまを信じ、ただおひとりの神さまを信じることができるよう、みちびいてください。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

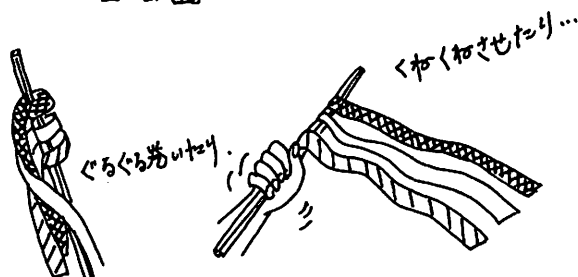
～くるくるへび～

- ①わりばしなどに、色付きテープを3本くらいずつはりつける。
- ②くるくるまわしたり、くねくねさせたりしてあそぶ。

①



②



〈ねらい〉

真実が一つであることから、神様が唯一のお方であることを導いていく。

〈分級教師へのアドバイス〉

今回の「展開例」では、真実が唯一であることから、神様がお一人であることを導きだしていますが、本来の筋道から言えば、神様がお一人であるからこそ変わらない唯一の真実が存在するので、従って、多神教的な社会で生きてると、子どもであっても「それぞれの人がそれぞれ自分がよいと思うことが正義である」という多元主義的な考え方をすることのほうが多いかもしれません。「正義」「価値」等、子どもたちが唯一であることを受け入れやすそうなものを工夫するとよいかもしれません。

子どもがあげ足を取ってきてもむきにならないように、うまくすり抜けることができるように心構えをしておきましょう。

〈展開例〉

①みんなは、学校でテストとかする？

(回答例)

- ・する
- ・しない

②算数のテストで、あっちの先生とこっちの先生

で正解が違ったら困るでしょう

- ・困る
- ・困らない

③同じ答を書いているのに、こっちの先生は○で、こっちの先生は×じゃあ。何が正解だか分からなくなっちゃうね。

④でも、普通はそんなことないよね。誰が答えても、どの先生に聞いても、正解は正解、間違いは誰に聞いても間違いだよ。

⑤神様だって、たくさん神様がいて、あっちの神様とこっちの神様と全然別のことを言ったら大変だよ。

⑥本当の神様は、お一人しかいらっしやらないから、いつでも、どこでも、正しいことを教えてくださるんですよ。

〈祈り〉

天のお父様。あなたが、私たちの唯一の神様であることを覚えて感謝いたします。あなたが私たちに、本当に素晴らしいこと、本当に良いことを教えてくださいますようにお祈りいたします。主イエス様の御名によってお祈りいたします。



〈ねらい〉

①神様と呼ぶことの出来るお方は、おひとりだということと、②その神様以外のものを神様とすることは、まことの神様に対する罪であることに気づかせ、③神様以外のものを神様としないことを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「まことの神様の他に、人びとから神様と呼ばれているものには、どのようなものがありますか。」

「それらのものと、まことの神様は、どのようにちがいますか。」

2. いろいろな神様がいて、それぞれ役割を分担しているとしたら、ほんとうに神様と言える

かどうか話し合ってみよう。

3. まことの神様は、唯一（ゆいいつ）です。ほかにどんなものも、くらべることができないお方です。

4. まことの神様ではないものを神様とすることが、どんなにまことの神様を悲しませる罪であるかについて考えてみよう。

〈祈り〉

天の父なる神様、まことの神様であられるあなたを信じることが出来ますことを感謝致します。まだ、まことの神様を知らない多くの人たちに、あなたを伝えることが出来るように助けてください。わたしたちが、まことの神様以外のものを神様とすることがないようにお守りください。



〈聖書をさらに深く〉

1. オリンピックの開催地でもあるアテネの場所を地図で確認してみましょう。古代から栄えた有名な町ですが、特に学問の都として知られていました。18節に出てくるエピクロス派（快楽主義で有名）、ストア派（禁欲主義で有名）といった名称もそのことを示しています。好奇心ばかりが旺盛であった彼らの姿は、つねに新しいものを探し求める今日の私たちの姿にも通じるものがないでしょうか。
2. パウロは、哲学者たちを相手に万物の造り主である唯一の主を宣べ伝えます。しかし、ギリシャの哲学者たちは身体に積極的な意義を見出していなかったため、パウロが復活について話したのを聞くとあざ笑いました。私たちの周りの人たちは、聖書の教えに対してどのような反応をするでしょう。話し合ってみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 日本や世界にある他の宗教について、知っているものがあれば話し合ってみましょう。特に日本では多くの神々が信じられています。しかし、それらは、人がいろいろな都合に応じて作り出した神です。「私たちをお造りくださった神さま」と、「私たちが作り出した神々」との違いを確認しましょう。
2. 神々を作り出すのは、ある意味では安心を得たいからでしょう。しかし、神が唯一であるということこそ、私たちにとって最も安心できることです。私たちは、あちらこちらへと神々を探し回る必要はありません。唯一の神様が、私たちの祈りをしっかりと聞いてくださいます。私たちは「知られざる神」に祈るのではなく、自分を造ってくださった神さまをよく知って、お祈りするのです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

- 5日（月曜日）
使徒言行録15章1～21節
Q. 使徒たちがエルサレムで協議をするようになった理由は？
- 6日（火曜日）
使徒言行録15章22～41節
Q. パウロとバルナバの意見が激しく衝突した原因は？
- 7日（水曜日）
使徒言行録16章1～15節
Q. パウロと同行することになったテモテの父親はどこの人？
- 8日（木曜日）
使徒言行録16章16～40節
Q. 「主イエスを信じなさい」。そうすればどうなる？
- 9日（金曜日）
使徒言行録17章1～15節
Q. ベレアのユダヤ人は毎日何を調べていた？
- 10日（土曜日）
使徒言行録17章16～34節
Q. パウロの話聞いて信じた人は誰？
- 心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト 出エジプト記32章1～6節

〈神を待つ忍耐〉

その時、モーセはイスラエルの人々のもとを離れ、神の山に登り、神と語っていました。モーセが留守をしたのは、神から十戒の二枚の板をいただくためでした。

しかし、モーセが不在の間に、麓ではあるまじきことが起こっていました。モーセがなかなか戻ってこないことにしびれをきらしたイスラエルの人々は、身に着けていた金の耳輪をはずしてモーセの兄アロンのところに持っていきます。アロンがこれを用いて若い雄牛の鑄造を造ると、民らはこれこそが我々をエジプトから導き上った神々だと言いながら祭壇を築き、献げ物をささげて礼拝したのです。

神の民イスラエルが、彼らをエジプトの国から救い出してくださった主なるまことの神から離れ、こんなにも早々と偶像礼拝におちいってしまったのです。人間の不信仰の現実には暗澹たる思いを禁じ得ません。

モーセの帰りが遅れたことは、イスラエルが信仰の忍耐をつちかうようにと神が与えたもうた訓練であったと考えられます。訓練の中で、私たちがまた神が自分を離れてしまわれたのではないかと思悩むことがあるでしょう。しかし、神はご自分の民に、いかなる試みの時にもご自分の愛といつくしみ、また選びの確かさを確信し、揺らぐことがないようにとお求めになるのです。しばらくの訓練の時を忍耐し、神の愛を裏切って自分勝手な思い込みにおちいることがないように、私たちがまた神を待つ信仰の忍耐を養わねばなりません。いかなる時にも「信仰の創始者また完成者」(ヘブライ人への手紙12章2節)なるお方を仰ぎ

続けるべきことについて、この出来事は私たちにとても重大な教訓なのです。

〈み言葉の大切さ〉

私たちはこの出来事が、神の民が十戒の二枚の板、すなわち神のみ言葉を待ちきれなかったことによって起こったことについて、さらに思いを深めるべきです。

「信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」(ローマの信徒への手紙10章17節)。信仰とはみ言葉に聞き従うことです。

イスラエルの信仰共同体においてモーセが預言者、アロンが祭司の役割を担っていたと見るとすれば、モーセが留守をしたとは、み言葉を語る者が不在となったということを示唆します。そのことはやはり民にとって、大きな試練であったのです。

アロンは祭司としてのつとめを果たしました。しかし、偶像に仕える祭司となることで神のみ怒りを招くこととなりました。み言葉が語られ、聞かれないところでは、人は必ず自分自身の願望や欲求をそのまま投影したに過ぎない神々、すなわち偶像の神々を造り出さずにはおれないのです。さらに、自分勝手な神礼拝の様式を編み出さずにはおれないのです。

ここでモーセが神の山から持ち帰った二枚の石の板に記された、ひとつひとつの戒めを守り行うことこそが、まことの命の道なのです。人がどのようにして神の栄光をあらわすべきか—このことを定めておられるのは神ご自身なのです。

(木下裕也)

カテキズム 子どもカテキズム問9

子どもカテキズム

問9 神々とは何ですか。

答 人間が造りだしたものです。

死んだ人や生きている人、動物や植物などの自然、作り話の神々を拝むことは、私たちの神さまがもっとも悲しまれる愚かなことです。

ここで人間により造りだされた神々とは、神々の偶像のことである。霊的な神に形を与えようとするとき、人間は、像を造る。その際、動物の形、人々の形、自然界の様々な形が、神を表すものとして借用される。どのような形をとるにせよ、偶像には命がない。偶像を作り出したのは、人の手に過ぎない。もちろん、他宗教の人々も、偶像がしゃべるわけではなく、偶像に命がないことを知っている。それでも、熱心に拝むのは、命なき偶像に拝む者たちの命を込めようと努力しているからである。偶像を生きたものにするのは、拝む者たちの熱心である。

偶像礼拝者が、目で像を見て礼拝するのに対して、キリストは、耳で聖書の言葉を聞いて礼拝するのである。聖書を目で読むだけの礼拝をしていると、聖書が偶像化される危険がある。目で見ると、自分から始まるからである。他方、耳で聞く行為は、音が聞こえるのを待つ行為である。神様が、語りかけてくださるから、聞くことができる。偶像を見て礼拝するのではなく、神の御言葉を聞いて礼拝する聖書の信仰の特異性を覚えたい。

神は、霊であり、生きておられる。神を礼拝するとは、この命の源である神によって霊の命を与

えられ、私たちが神に生きる者になるためである。その際、命のない偶像は、決して用いられてはならない。また、キリスト者は、他宗教の偶像を拝んではならない。それは、神が、イエス・キリストに固着する以外の仕方、ご自分が被造物の形に似せられるのを嫌われたからである。神の偉大さと優しさを表す形は、この世にはイエス・キリスト以外にはありえない。キリスト以外の形をもって神を礼拝するとき、私たちは神を矮小化している。神に喜ばれることを求める礼拝者は、神が嫌われることをしてはならない。

日本では、生きた人が、すぐ、〇〇の神様と偶像化される。死んだ人も、すぐ拝まれる。また、その背後に時代の霊が働いているとしても、人間によって造り出された非宗教的な偶像の神々がある。拝金信仰、拝偏差値信仰等によって拝まれている神々である。自分を信じる者は、自分という偶像を作り出し、それに仕えている。更に、「愛」を信じるという場合でも、神の愛を信じなければ、人間的な愛を偶像化して信じているに過ぎない。このような意味での偶像は、無数にある。キリスト者は、このようななかで真の神のみを礼拝する戦いを行っている。 (岩崎 謙)

テキスト 出エジプト記32章1～6節
カテキズム 子どもカテキズム問9

(単元のねらい)

金の雄牛は、偶像を拝むつもりではなく、まことの神を拝むつもりで偶像礼拝をしていた実例であり、偶像とは人間の心が造り出した、人間に似せて造られた偽りの神であり、偶像は人間の外でなく、人間の心の中にあることを理解させる。また、偶像はわたしたちの重荷となるのに対して、まことの神はわたしたちを背負い、救い出してくださる方であることを教える。

「わたしたちを背負ってくださるまことの神」

エジプトを出ることができたイスラエルの人々は、自分たちを救ってくださった神様を心から感謝し、喜びました。ところが、自分たちをエジプトから導き出してくれたモーセが、ちっとも帰ってこないで、人々は自分の勝手な方法で、神様を拝み、礼拝しようとしたのです。それがここで造ったのが「金の雄牛」の偶像でした。よく考えてください。イスラエルの人々は、自分たちの知らない別の神様、何かの偶像を造ったのではありません。イスラエルの人々が造り、拝んだのは、「エジプトの国から導き上った」イスラエルの神様なのでした。どこか別の神様を造り、別の神様を拝んだのではなく、自分たちを救ってくださったイスラエルの神様、聖書が教えているまことの神様を拝んだのです。しかしそれは、神様ご自身が望まれ、喜ばれる礼拝ではなくて、神様がとても嫌われる、偶像礼拝によってだったのでした。イスラエルの人々は、自分たちはまことの神様を拝んでいるつもりで、偽の神々、偶像を拝んでしまっていたのでした。

これも聖書にでてくる話ですが、あるきこりが山で木を切り、寒いので切った木の残りで火を起こし、疲れたのでその火でパンを焼いて食べました。まだ木が残っていたのでそれで自分の神様を造り、それを拝んで「お救いください、あなたはわたしの神」と祈りました（イザヤ44章9～20節）。これがいわゆる偶像の正体だと聖書は教えます。そんなものにわたしたちを救う力がありま

せん。高額な壺、霊験あらたかなお守り、寺社仏閣の祈願や御祓いなど何の意味も、力もないことを聖書は明らかにします。そういう偶像は、動物や人間に背負われますが、その重荷となるだけです。偶像とは、わたしたちを助けるようで、実はわたしたちの重荷となるものにすぎません。そんなものにどれだけひれ伏しても、何の助けも救いも得ることはできません。「それを肩に担ぎ、背負って行き、据え付ければそれ（偶像の神々）は立つが、そこから動くことはできない。それに助けを求めて叫んでも答えず、悩みから救ってはくれない」のです（イザヤ46章7節）。

しかしまことの神は、そんな重荷にあえぐわたしたちを「背負い、担う神」だと言われるのです。「あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出した時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負っていこう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す」と（イザヤ46章3～4節）。「また荒れ野でも、あなたたちがこの所に来るまでたどった旅の間中も、あなたの神、主は父が子を背負うように、あなたを背負ってくださった」（申命記1章31節）と請け合ってくださいるのが、まことの神なのです。こうして聖書は、まことの神は人間が造ったものではなく、むしろ人間を造られた方であり、しかも人間に背負われて重荷となるのではなく、逆に神が人間を背負い、担ってこられたのだと主張するのです。

みなさんは小さいころ、家族で一緒にデパートや近くの海やらへ出掛けたことはありませんか。はじめは「早く、早く」とお父さんやお母さんをせかしますが、帰りはたいてい疲れて眠りこんでしまいませんでしたか。お父さんやお母さんは、その帰りにはたいてい寝てしまったあなたをだっこするかおんぶして帰るはめになります。自分もひどく疲れているのに、そのうえ眠って重くなった子をだっこして帰るのは、とてもつらいものです。しかしまことの神様は、わたしたちをこれまでそうしてきたし、今もそうしているし、これからもそうしてくださると約束してくださる神様なのです。「父が子を背負うように、あなたを背負ってくださった」と約束される神様なのです。それに対して偽りの神々、偶像は、わたしたちを救うことはできないし、背負うこともありません。むしろわたしたちの「重荷」となり、わたしたちがそれを背負わされるはめになるものにすぎないのです。どれほど美しく、見事な出来栄であつたとしても、その見かけの美しさがわたしたちを救うわけではなく、救うこともできません（イザヤ37章18～20節、詩編115編4～8節）。それは木や石にすぎず、無力で哀れな人間に似せて造られた像、人間にかたどられたものにすぎないからです（イザヤ40章18～26節）。

こうして聖書は、何でもいいから信じれば救われるというのではなく、何でも神にして拝みさえすればよいというのでもなく、救われるかどうかは、何を信じ誰を拝むかによっているのであり、あなたが何を神様とし、誰に依り頼むかということが大切であることを教えます。信じるあなたの「心」（信心）が大切なのではなく、信じる「相手」が大切なのです。ですから「まことの救い、まことの命」にいたるために、「まことの神」を求めていきましょう。わたしたちにまことの救いを与えることができる、まことの神様を。「わたしが主、ほかにはいない。わたしをおいて神はない。正しい神、救いを与える神は、わたしのほかにはない。地の果てのすべての人々よ、わたしを仰いで、救いを得よ」。このようにわたしたちに呼びかけることのできる神様こそ、「生けるまことの神」です。生けるまことの神とは、わたしたちに語りかけ、呼びかける神様です。死んだ神は、口があっても語りかけ、呼びかけることはできません。ましてわたしたちを救うことはできません。わたしたちを、その悩みから救いだし、わたしたちを背負いつづけてくださる、生けるまことの神へと心を向け、救いを求めていってください。

（三川栄二）

【今日の暗唱聖句】 イザヤ書46章3～4節

あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出た時から担われてきた。

同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで、背負っていこう。

わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。

〈主題〉

生きておられる神さま

〈ねらい〉

わたしたちを造られた本当の「生きておられる」神さまがおられることを伝える。

〈展開例〉

みなさんは、神さまは生きておられる、っていう喜びがありますか。小さな種から大きな木に成長していくように、「いのち」ほど、神さまの生きておられることをしめすものはありません。あかちゃんも、お母さんのお腹の中で、育って、生まれてきますね。みなさんも、じつは、みんな、生きているのはあたりまえのことではなくて、神さまが生きておられるから、生きているんですね。そのことを、神さまに「生かされている」と言います。神さまは、イエスさまをわたしたちに与

てくださることによって、いのちの大切さを教えてくださったばかりでなく、「たとえ、死んでも生きる」という力強い恵みを与えてくださいました。イエスさまの復活の日、みつかいたちは「イエスさまは生きておられる」と弟子たちに告げたのです。みなさんも、イエスさまは生きておられることを信じて、ほんとうの神さまに愛され、生かされていることを、こころから感謝しましょう。

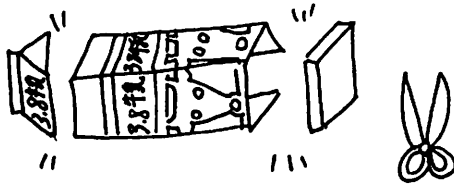
〈お祈り〉

天の父なる神さま。あなたはわたしたちに「いのち」を与えてくださったばかりでなく、あなたの生きておられることを教えてください。どうか、神さまの造られた世界の中で、いのちを大切に、神さまに生かされていることをよろこんで、感謝することができますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～サンドイッチをいただきます～

①牛乳パックの注ぎ口より上の部分と、底の部分を切り取る。



②裏返して、サンドイッチのパンのようにたたむ。



③パンの間に、色紙でトマトやレタスをつくってはさみこむ。



※三角サンドにしても面白い。

〈ねらい〉

本当の神様は、生きた、私たちを守ってくださるお方であることを示す。

- ・金でできていた
- ・人間が作った
- ・動かない

〈分級教師へのアドバイス〉

特に未信者の家庭から来ている子どもに対しては、あまり具体的に偶像礼拝を否定しないほうがよいかもしれません（仏像、位牌、神社等）。配慮の足りないひとことが、子どもや親のつまずきとなる可能性があることに注意しなければなりません。

充分な配慮と共に、真に生ける神様の唯一性を誠実にはっきりと伝えることができるようにしましょう。

〈展開例〉

①モーセさんがいない間に、アロンさんはどうしましたか？

（回答例）

- ・金の雄牛を造った。

②でもそれは神様に怒られる、いけないことでしたね。

③金の雄牛は、本当の神様ではありませんでした。一体何が違うかわかりますか？

- ・牛の格好をしていた

④嘘の神様は牛の格好でしたけれど、じゃあ、本当の神様は？

- ・人間の格好
- ・目に見えない

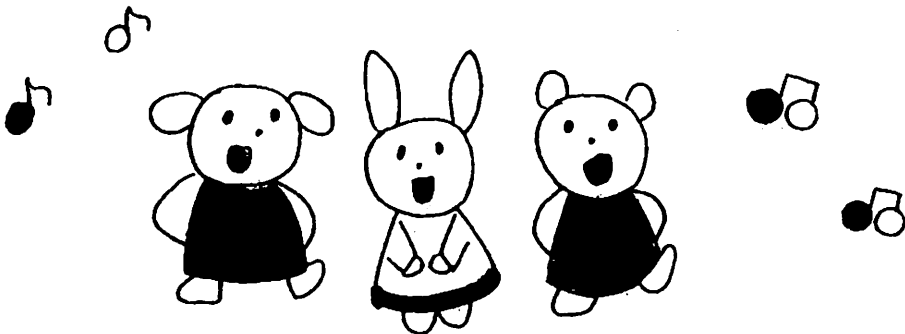
⑤じゃあ、本当の神様は、何でできているの？誰がつくったの？動く？

⑥本当の神様は、誰からもつくられない、目に見えない、霊の、生きて動くお方ですよ。

⑦動けない喋れない神様では、私たちを助けてくれないですね。生きていて、動いて、私たちのお祈りを聞いてくださって答えてくださる神様にお祈りしましょう。

〈祈り〉

天のお父様。あなたが、本当に生きていて、私たちをいつも守っていて、助けてくださるお方であることを感謝します。私たちが困った時、苦しい時、一人の時、いつでも神様が私たちのことを守ってくださいますように。主イエス様の御名によってお祈りいたします。



〈ねらい〉

①まことの神様が、ご自分から語りかけられ、②生きて働かれるお方であることを覚え、③その神様が愛してくださっていることを覚える。

〈展開例〉

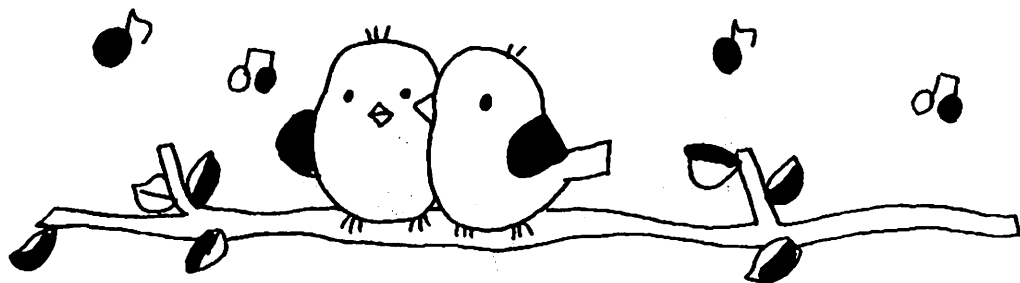
1. アイスブレーク（うち解けるための質問）
「今まで、神様がおられることを感じたことがありますか。それは、どんなときでしたか。」
2. まことの神様は、生きておられるので、ご自分から語りかけて来られます。聖書は、神様から語りかけてくださっているお手紙です。

3. まことの神様は、神様のほうから私たち人間に働きかけて来られます。天と地のすべてを創られただけでなく、イエス様によって救いを与えてくださっています。

4. その生ける神様が、どれほどわたしたちを愛してくださっているか話し合ってみよう。

〈祈り〉

天の父なる神様、私たちにご自分から語りかけてくださってありがとうございます。イエス様、生ける神様の愛を十字架の救いによって、はっきりとあらわしてくださってありがとうございます。あなたの愛を感謝します。



〈聖書をさらに深く〉

1. 出エジプトの経路をたどりながら、金の子牛事件が起こった場所（シナイ山のふもと）を確認しましょう。モーセを待ちきれなかった民は、自分たちで神々の偶像を作ったのです。私たちにも、神様の働きかけを待ちきれないということはないでしょうか。あるいは逆に、神様を信じて忍耐することで恵みを知ったことがあるなら、話し合ってみましょう。
2. 神がモーセを通して御言葉（十戒の板）を与えてくださるということと、アロンたちが自分で神々の偶像を作り出すということが、対照的に描かれています。キリスト教は、目に見えるものを拝む宗教ではなく、目には見えない神を、しかしその御言葉を聞くを通して礼拝する宗教です。ふだんどのようにして御言葉に親しんでいるでしょうか。

〈教理を響かせるために〉

1. 人は誰でも宗教心を持っており、その心を大切にしたいという素朴な思いで偶像を作ることもあります。他の宗教についても、ただ軽蔑して見ることのないようにしましょう。しかしまた、巧みに偶像を作り出して、それで人々を誘惑しようとする宗教も存在します。とにかく、人の心が作り出した偶像には本当の救いがないことをよく理解しましょう。
2. 私たちも、文字通りの偶像を作って拝むということはしてなくても、身の周りの何かに、神様以上に頼っているということはないでしょうか。お金、学歴、友人、才能など。それらは決して悪いものではありません。しかし、それらがすべてだと思ってしまうと、そこにも偶像崇拜の危険があります。神様が与えてくださったものは、感謝して受けるものであって、崇めるものではありません。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

12日（月曜日）

使徒言行録18章1～17節

- Q. パウロがコリントで出会ったユダヤ人夫婦の名前は？

13日（火曜日）

使徒言行録18章18～28節

- Q. エフェソにいたアレクサンドリア生まれの雄弁家は？

14日（水曜日）

使徒言行録19章1～20節

- Q. エフェソの弟子たちが受けていたのは誰の洗礼だった？

15日（木曜日）

使徒言行録19章21～40節

- Q. エフェソにあったのは何の神殿？

16日（金曜日）

使徒言行録20章1～16節

- Q. 三階から落ちて死んでしまったが、パウロによって生き返らされた青年は？

17日（土曜日）

使徒言行録20章17～38節

- Q. エフェソの長老たちが非常に悲しんだのはなぜ？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト マタイによる福音書3章13～17節

〈メシアとしての任職〉

主イエスの受洗は、このときに主イエスが公にメシアとして任じられたことを示す出来事です。それまでは人目から隠された生活をしておられた主イエスは、このときからメシアとしての公生涯に入っていくことができます。

「天がイエスに向かって開いた」(16節)とは、天と地、神と人との間の通路が今こそ開かれた、人の罪によって隔てられていた神と人との関係に和解がもたらされ、インマヌエルの祝福が回復される時が今こそ到来したということです。その天地の架橋こそ、仲保者イエス・キリストなのです。

主イエスが「神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった」(16節)とは、聖霊による油注ぎを示すものでしょう。旧約聖書の時代から、預言者・祭司・王といった神の人には、その任職のさいに油が注がれました。それは、聖霊が彼らにその務めにふさわしい賜物と力を与えたもうということを意味していました。今主イエスはこの三職を兼任し、まっとうするまことのメシアとして、聖霊によって証印され、力を与えられたということです。

そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえ(17節)

たと記されます。父なる神ご自身が、愛するひとり子を世を救うメシアとして任じたもうたということです。ちなみに、このみ父の任職の宣言には、ふたつの旧約聖書の箇所との反映が見られると指摘されています。王であり神の子であるメシアを語る詩編2編7節と、苦難とともに人の罪を担う「苦難のしもべの歌」の冒頭であるイザヤ書42章1節です。

〈こぞって働きたもう三位の神〉

三位一体の神はこの世を救う救いのみわざのために、こぞってお働きになります。それは「み父が、み子を通して、み霊において」救いを実行するというかたちをとります。すなわち、み父は救いのご計画をおたてになります。み子はみ父のご計画に従って、み父の助けと導きを受けて救いのみわざをなしたまいます。み霊はみ子に力と賜物とを与え、み子によってなしとげられた救いのみわざを、時代と場所をこえて持ち運んでいけます。このように三位一体の神が世界の救いのために働きたもうこと、主イエスの受洗を記すこの聖書箇所からも見て取ることができるので

(木下裕也)

カテキズム 子どもカテキズム問10

子どもカテキズム

問10 私たちの神さまにはいくつの位格がありますか。

答 真の神さまには三つの位格があります。

御父なる神さまと御子なる神さま（イエスさま）と聖霊なる神さまです。

この三位は同質であり、三位一体の神さまです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問6

ウェストミンスター大教理問答 問9

ハイデルベルク信仰問答 問25

1. 二つの三位一体論

三位一体の教理は二つに分けられ、「内なる神の業」と「外なる神の業」としての三位一体です。「内なる神の業」としての三位一体とは、神のご自身に対する、ご自身の内での働きにおける三位一体で、それを「存在論的三位一体」といい、これが狭義の三位一体です。それに対して「外なる神の業」としての三位一体とは、外つまり被造世界に対する神の働きかけとしての三位一体で、「経綸的三位一体」と言います。「経綸的」とは、オイコノミアから来た言葉で、そこからエコノミー（経済）が派生したとおり、神の世界「経営」を表わします。この被造世界全体に関わってくる、神の働きにおける三位一体のことで、具体的には、御父に帰せられる「創造」、御子に帰せられる「贖い」、聖霊に帰せられる「完成（聖化）」が、しかし同時に三位一体の神の業として考えられるのです。「神の外なる業は分割することが出来ない」ことが原則です。

2. 三位一体と私たちの関係

聖書において三位一体は、神の救いの歴史の進展と成就の中で啓示されてきて、唯一の神への信仰の中から、御子の受肉と聖霊の降臨という歴史的事実によって明らかにされてきました。三位一体の信仰は、神の救いの歴史の中で啓示されたもので、私たちの救いと関わりで考えなければな

りません。三位一体が崩れるならば、私たちの救いもその土台を失って、崩壊します。三位一体の教理は、教会が勝手にねつ造したものではなく、それなくしてはキリスト教の教理の全体が倒壊してしまう土台です。多くある教理の単なる一つではなく、全教理を支え、それを成り立たせる中樞、脊椎なのです。分かつことのできない三位一体の神の御業は、私たちの信仰と生活の至る所で現われ、働かれています。

そのことを「祈禱」において考えることが出来ます。私たちの祈りは、自分が意識するしなみに関わらず、既に「三位一体的」な祈りです。私たちは祈りを「父なる神」に向かって祈ります。私たちの内にあっては、御霊が言葉にもならない祈りを祈らせてくださり、祈りを助けてくださいます。そうして祈られた祈りは「子なる神」によって執り成され、御子は父にあたかも自分の祈りであるかのごとく祈ってくださるのです。しかも御子の祈りは必ず御父に聞かれるゆえに、私たちの祈りは聞かれるのです。ここで私たちは既に、三位一体の神の生きた働きの中に取り込まれ、その中で祈っています。祈り自体が三位一体的なのです。それは同じく唯一の神に祈る、ユダヤ教やイスラム教の祈りとは、根本的に違う祈りとなっているのです。 (三川栄二)

テキスト マタイによる福音書3章13～17節

カテキズム 子どもカテキズム問10

(単元のねらい)

三位一体の神について子らに説明することは至難である。特に説教においてこの神秘を説明しようとするなら、説教が難しくなり、礼拝式が成り立たなくなるおそれすらあるであろう。我々はここで、主イエスが父なる神の御子であり、聖霊なる御神の交わりの内に生きられたことを語る。唯一の神が父と子と聖霊の三つの位格があること、それなしに、礼拝が成立しないことを、まさに礼拝式の体験を通し、あせらず、その積み重ねを通して子らに体得させたい。

「イエスさまが洗礼をお受けになられたとき」

ヨルダン川のほとりで、ヨハネという人が叫んでいます。「神さまの御前に罪を悔い改めなさい。自分勝手に、自分のことを一番に考えて生きることをやめなさい。神さまの栄光のために生きるように、神さまに向かって歩きなさい。それを態度にあらわしなさい。」ある日のことです。ヨハネさんは、いつものように、洗礼を授けてもらう為にやってくる大勢の人達に、こう言いました。「わたしは水で洗礼を授けているけれど、わたしの後から来る方は、わたしより優れた方です。わたしなどはそのお方の履物をお脱がせする値打ちもないほどです。なぜなら、この方は、聖霊によって洗礼を授けることができになるからです。」

するとそのときです。イエスさまがヨハネさんのところにやってきたのです。イエスさまは、言いました。「わたしにも洗礼を授けてください。」ヨハネさんはびっくりしました。「イエスさま、あなたが洗礼を受けるなんてとんでもないことです。やめてください。洗礼は悔い改める必要のある人が受けるものです。イエスさまは、罪とは関係ありません。悔い改める必要などありません。イエスさま、わたしにこそ、洗礼を授けてください。」

イエスさまはおっしゃいました。「ヨハネさん、今はわたしに洗礼を授けてください。もちろん、わたしは悔い改める必要はありません。けれども、わたしはあなたたちと同じ人間です。あなたたちの友だちです。だから、神さまの前に正しい事を

することは、わたしたちにふさわしいことなのです。」

ヨハネさんはもうこれ以上何も言えませんでした。そしておそろおそろ、ヨルダン川の中で、洗礼を授けられたのです。

イエスさまが、水の中から上がられたときです。イエスさまは御自分の上に神の霊が下られるのをご覧になりました。天がイエスさまに向かって開いたのです。天には、天の父なる神さまがおられます。その天がイエスさまに向かってはっきり開いたのです。そこから、聖霊なる神さまがイエスさまに注がれました。聖霊なる神さまは、イエスさまの内に宿られたのです。そればかりではありません。天から声が聞こえてきました。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者です。」これは、誰の声ですか。イエスさまのお父さま、天のお父さまの声です。

問の8や9で学んだことを、改めて思い出してください。神さまは何人もいますか。何々の神さま、何々教の神さまなんていますか。いませんね。真の神さまは、ただお一人しかおられません。これは、とても大切なことです。僕たち私たちをお造りくださった神さま、生きておられる真の神さまだけが本物の神さまです。そしてこの神さまは、今、僕たち私たちがここで礼拝しているこの場所に共におられるのです。これは本当のことです。

でも、ちょっと立ち止まって考えて見ましょう。今、先生は、神さまはこの礼拝堂の中におられると言いましたね。皆は先生が言った事を信じていますか。信じることができるお友達はとても幸せです。本当に、すばらしいことです。

さて、今、神さまがこの場所におられるなら、天には、神さまはおられなくなるのでしょうか。そうではありません。天の父なる神さまは、天におられるのです。ここ、地上にはおられません。それなら、神さまがここにおられるって一体どういうことなのでしょう。それは、天のお父さまのところから聖霊なる神さまが、イエスさまを信じている僕たち私たちの真ん中に、礼拝式の真中に注がれて、ここにおられるということなのです。

そして、聖霊なる神さまは、僕たち私たちにイエスさまのことを教えてください。イエスさまが、真の神さまで真の人間であること、僕たち私たちが受けなければならない罪の刑罰の身代わりになって十字架についてくださったこと、死んでお墓に葬られただけではなく、復活させられたことを教え、信じさせてくださるのです。

真の神さまはただお一人しかおられません。けれども、皆の中には今、先生がお話した中で、天のお父さま、イエスさま、聖霊なる神さまって、三人の神さまがいるように思ってしまうお友達も

いるかもしれません。けれども、そうではないのです。真の神さまは、父なる神さまと御子なる神さまイエスさまと、聖霊なる神さまの三つのご人格があって、しかもお一人なのです。どうしたらこの不思議なことが分かるようになるのでしょうか。それは、イエスさまを信じることです。そのときに、僕たち私たちは、本当の神さまが三位一体の神さまであると信じることができるようになります。

イエスさまは、洗礼を受けられた時に、天のお父さまから「わたしの愛する子」と呼ばれました。つまり、神さまの御子ということです。それだけではなく、天から聖霊なる神さまが降りてこられて、イエスさまと一つになられました。天のお父さまとイエスさまと聖霊なる神さまは一人の神さまなのです。

僕たち私たちは、お祈りするとき、天のお父さまとお呼びし、イエスさまのお名前によってお祈りしますね。そしてお祈りできるのは、聖霊なる神さまが僕たち私たちを助けてくださるからなのです。つまり知らない間に、僕たち私たちは、三位一体の神さまの救いのお働き、この神さまの愛の交わりのなかに、置いて頂いている、生かされているのです。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] マタイによる福音書3章17節

そのとき、

「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」

と言う声が、天から聞こえた。

〈主題〉

キリストを紹介される神さま

〈ねらい〉

救い主イエスさまをわたしたちに紹介しておられるほんとうの神さまを伝える。

〈展開例〉

みなさんは、自分をお友達に紹介したことがありますか。お歳はいくつですか。あなたのお父さん、お母さんは、だれですか。神さまはご自分のことをわたしたちに紹介なさるときに、イエスさまをおしてよくわかるようにしてくださいました。しっかりと、イエスさまを見つめていくとき、決して、ほかのいのちのないむなしなものにひかれていくことはないのです。イエスさまは、わたしたちと同じように赤ちゃんとして生まれて、育ち、大きくなって、洗礼を受けました。それは、

わたしたちの罪をきよめてくださるためです。神さまは、わたしたちの罪をきよめて、ほんとうの神さまのことがよくわかるようにしてくださいます。ほんとうの神さまは、目に見えませんが、聖霊によって、わたしたちの心にはたらいてくださって、心からイエスさまを信じ、天の父なる神さまを信じるように導いてくださるのです。ここからお祈りしつつ、ほんとうの神さまのことをこれからも信じていきましょう。

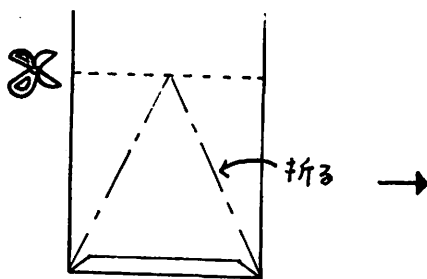
〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちに神さまのことを紹介して下さってありがとうございます。どうか、イエスさまの洗礼を心にとめて、ほんとうの神さまを心から信じてお祈りすることもしてください。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

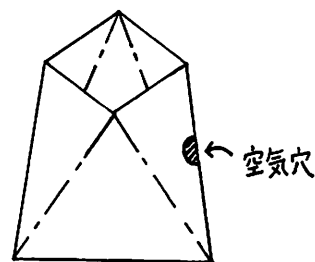
～紙袋で紙風船～

①



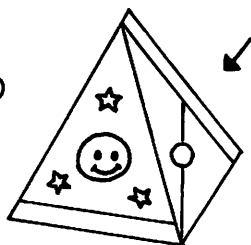
封筒を正方形に切り
折り目をつける

②



両わきを貼り合わせ
空気穴を切り取る

③



飾りつけをして遊ぶ

〈ねらい〉

お祈りを通して、三位一体の神様が私たちと関わってくださっていることについて知る。また、祈ることについても学ぶ。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもに限らず、三位一体についてすべて理解することは不可能です。三位の存在と唯一の神様の両方を同時に示すことは混乱させるだけかもしれません。この分級展開例では、唯一性についてはあまり触れていません。その点、注意が必要です。

〈展開例〉

①みんなは神様にお祈りできるかな？

(回答例)

- ・する
- ・しない

②教会の礼拝式でもみんなお祈りするよね。その時、最初になんて言う？

- ・天のお父様
- ・天の父なる神様

③じゃあ、お祈りの最後、アーメンって言う前にはなんて言う？

- ・主イエス様の御名によってお祈りいたします

④そうですね。私たちがお祈りするのは、天の父なる神様にお祈りするので、そのお祈りはイエス様のお名前によってお祈りするんですね。

⑤それから、礼拝のお話にもあった通り、私たちといつも一緒にいてくださって、私たちを守ってくださるのが聖霊なる神様なんです。

⑥このことを、難しい言葉で「三位一体」って言うんですよ。

⑦私たちの大好きなイエス様。私たちのお祈りを聞いてくださる父なる神様。そして、私たちと一緒にいてくださる聖霊なる神様。みんなの神様が私たちを守ってくださることを感謝しましょう。

〈祈り〉

天のお父様。あなたがいつも私たちを守り、私たちの祈りを聞いてくださることを感謝します。また私たちがイエス様のお名前によっていつもお祈りできることを感謝します。聖霊なる神様がいつも私たちとともにいてくださることを感謝します。どうか私たちがこの神様の守りの中で生きる事ができるようにしてください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①父なる神様の創造の働きを覚え、②子なる神、イエス・キリストの十字架の死による救いの働きを理解し、③聖霊なる神様が、私たちがキリストの教会に招き導いてくださっていることを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「三位一体という言葉聞いたことがありますか。その言葉を聞いたとき、どんなことを考えましたか。」

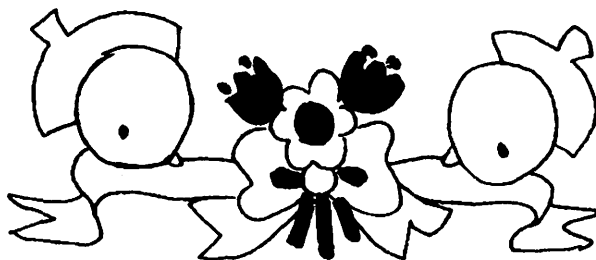
2. 父なる神様の創造の働きについて、話し合ってみよう。

3. イエス様のみ言葉や働きから、神様の子でなければ言えない言葉や、神様の子でなければ出来なかった働きについて話し合ってみよう。

4. 聖霊なる神様が、生きて働かれるお方であることを聖書から探してみよう。

〈祈り〉

天の父なる神様、私たちには、あなたがどのようなお方が、完全に知ることは出来ませんが、聖書をとおして、神様が三位一体の神様であられることを示してくださってありがとうございます。イエス様、あなたの神様として力と愛で私たちに祝福してください。聖霊なる神様、あなたの大きな力と働きを感謝します。



〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまは、ここからいよいよ本格的な宣教活動を開始されます。イエスさまは罪のない方ですから、本来、悔い改めの洗礼などを受ける必要はなかったのに、あえてここで洗礼を受けられたということを確認しておきましょう。ここには私たち罪人のところにまで降ってこられたイエスさまの愛があります。
2. イエスさまの宣教は、三位一体の神様による宣教活動であることが分かります。ここには、イエスさまの姿だけではなく、鳩のように降ってきた神の霊（聖霊）、父なる神様の声があり、神様の三位一体が最もよく現れています。イエスさまを信じて、人々が、そして私たちが救われていくのは、三位一体の神様の働きであることを覚えましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 父・子・聖霊は三つの位格です。これは、互いに交わりが成り立つということです。イエスさまが洗礼を受けられたとき、父が子に語りかけられたように、三位一体の神様の間で交わりがあるのです。神様があるときは父、あるときは子と、仮面を変えるように位格を変えるものではありません。間違った考え方も比較しながら理解してみましょう。
2. 三位の神様は、神様としてまったく同質です。イエスさまや聖霊は神様のようなもので、神様ではない、ということではありません。イエスさまは他の人間とはまったく違う神の御子であり、私たちの内に働く聖霊はただ不思議な霊的存在・力というだけではなく、神様ご自身です。そして、父・子・聖霊が同じ神様として一致して、私たちを創り、救い、完成させてくださることを感謝しましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

19日（月曜日）

使徒言行録21章1～16節

Q. パウロはどこに行こうとしている？

20日（火曜日）

使徒言行録21章17～36節

Q. パウロが捕まったとき、民衆は何と叫んだ？

21日（水曜日）

使徒言行録21章37～22章16節

Q. パウロは人々に何語で話し始めた？

22日（木曜日）

使徒言行録22章17～29節

Q. パウロはどこの市民権を持っていた？

23日（金曜日）

使徒言行録22章30～23章11節

Q. 復活も天使も霊もないと言っていたのは何派の人たち？

24日（土曜日）

使徒言行録23章12～35節

Q. パウロは誰のもとに護送されることになった？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ヨハネの手紙一 4章7～16節

〈愛の源としての神〉

神様は、愛の源です。神様は御父・御子・御霊の三位一体の神様として、御自身の内に愛の交流があります。私たちは、父なる神様と御子イエスキリストとの間の愛を、ゲツセマネの祈りにおいて確認することが出来るでしょう。御子は御父に対して、「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うのではなく、御心に適うことが行われますように。」(マルコ14:36)と祈られました。御子は御父に助けを求めつつも、御父が御子をこの世におつかわしになられた使命をしっかりと覚え、御心に適うようにと、祈っておられます。

つまり、神様は愛の発出者であられると同時に、御自身の内にも愛が充満しておられます。言い換えますと、神様は、無機質なものでなければ、独裁者でもありません。三位一体の神様御自身の内に、愛の交流があります。さらに神様は、私たちの苦しみ・弱さを知り、理解して下さり、その愛によって必要を満たして下さいます。

〈私たちに示された神の愛〉

一方、私たち人間は、罪の中にあり、神様の愛から引き離されていました。罪により、愛が阻害されたからです。そのため、神様を知り、神様の愛が示されなければ、神様を愛することも、人を愛することも出来ません(8)。つまり、愛は神様

から私たちに示されることにより、初めて私たち人間は愛を知り、人をも愛する事が出来るようになります(7)。

神様は、私たちを愛して下さっているからこそ、私たちにも愛をお与え下さろうと、罪の赦しと救いを御計画して下さり、御子をお遣わし下さいました(10)。私たちは、御子の十字架を知り、信じることにより、初めて神様御自身の内にある愛、神様の私たちへの愛を知り、また神様の持つておられる愛を受け入れることが出来るようになります。つまり、神様によって愛が与えられた私たちは、私たち自身が神様を愛し、愛の神様のご命令に従う者へと変えられていきます。それは愛には不正がなく、罪を嫌うからです。

〈互いに愛し合う〉

そして神様によって愛が示された私たちは、互いに愛し合うことが出来るようになります(11、12)。それは、私たちの内に、神様御自身が御霊によって留まっていて下さっているからです(12)。神様の愛は、地上に和解と平和をもたらし、神の国を完成させる方向性を持っています。だからこそ、神様の愛によって満たされた私たちは、地上にあって平和をもたらすため、互いが尊重し合い、助け合い、愛し合っていくことが出来、神様の平和を実現していく方向を目指して歩み続けて行くことが出来るのです。(辻 幸宏)

7月25日 「三位一体の神の交わり」 カテキズム研究

カテキズム 子どもカテキズム問10

子どもカテキズム

問10 私たちの神さまにはいくつの位格がありますか。

答 真の神さまには三つの位格があります。

御父なる神さまと御子なる神さま（イエスさま）と聖霊なる神さまです。

この三位は同質であり、三位一体の神さまです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問6

ウェストミンスター大教理問答 問9

ハイデルベルク信仰問答 問25

1. 三位一体—三つの位格の統一性と区別性

「外なる三位一体の神の業」の根拠に、「内なる三位一体の神」ご自身がおられます。そこでは父と子と聖霊の三つの位格の統一性と区別性が語られます。この三つの位格の間には、位格的区別と相違性があるということで、唯一の神が父と子と霊として交互に現われたとするサベリウス主義の考えが否定されて、三つの位格は互いに区別されつつ、しかも同時に存在されることが告白されます。さらにその三つの位格は、統一性と同一性を持っており、同一の神的本質を共有する者としてまったく同じ神であられ、そこには上下関係や従属関係がないのです。父が霊となって、人間イエスに取りついたとする勢力的モナルキア主義や、御子を御父より劣った第二の神とする従属的キリスト論、聖霊を単なる神적エネルギーとする考え方が否定されます。

このように三つの位格の間には、上下や従属といった関係はなく、同一の神的本質をもつ者として、力と栄光において同等の神であられ、統一された一人の神ご自身なのです。この統一性は、「相互内在」といって、相互に内在する関係を持っておられます。「わたしが父におり、父がわたしにおられる。」(ヨハネ14章10節)「わたしと父とは一つである」(同10章30節)と主イエスが言われるとおりです。

2. 内なる神の業としての三位一体

三つの位格は、ただ「ある」だけではなく、相互に働きかけあうことによって「ある」もの、「なっておられる」存在でもあられます。その固有性とは「御父は何からでもなく、生まれもせず、出もしない。御子は永遠に御父から生まれる。聖霊は永遠に御父と御子とから出る」(告白2章3節)ということです。父は子を生み(ヘブライ1章5節)、子は父より生まれ(ヨハネ1章14節)、聖霊は父と子より出る(ヨハネ15章26節、ガラテヤ4章6節)というように相互に働きかけあいつつ、それによって存在しておられるのです。

真の生ける神とは、まずなによりもご自身において、生きた交わりを持っておられる神であられ、唯一の神とはけって孤独の神、ひとりぼっちの神ではないということが、三位一体の神への信仰です。単一の神として、交わりを持たない「死んだ神」ではなく、ご自身において愛の交わりのうちに生きておられる「生ける主」であられるということです。三位一体の信仰とは、この「生ける神・交わりに生きる神」への信仰に他なりません。そして三位一体の神とは、私たちとの交わりに生きようとする神であられ、私たちと共に生きてくださる、「生ける神」なのです。(三川栄二)

テキスト ヨハネの手紙一4章7～16節
カテキズム 子どもカテキズム問10

(単元のねらい)

三位一体の神は、信じることによるのみ、理解され、体験される。説教者は、一回の説教でこの神秘、真理を分からせなければならぬと考える必要はない。ただ、父と子と聖霊の三つに在りて一人の神でなければ、事実、自分の信仰生活が成り立たない事、愛の交わりに生かされ、慰めに生かされることがないことを伝えれば良い。教師として、三位一体を説くことは、自分の信仰の証そのものをひっさげて子らの前に立つことである。皆で祈ろう。

「愛の神は三位一体」

先週は三位一体という言葉覚えしました。カテキズムの言葉を礼拝式の中で唱えました。また暗唱聖句も唱えました。暗唱聖句は、とても短い言葉ですから、すぐに覚えられたと思います。「神は愛です。」嬉しくなる言葉です。そして先生も、皆さんに言いたいのです。神さまは愛です。神さまは先生のことを愛して下さいます。だから、今日、このすばらしい神さま、天のお父さまのこと、イエスさまのことを皆にお話できることはとても嬉しいのです。でも、神さまがどのような方なのか、先生は、伝えたいのですけれど、上手に説明できません。

僕たち私たちは三位一体という言葉をもう覚えてしまいましたね。どうぞ、忘れないでください。でも、言葉は覚えても、何だか良くは分からないと思ってお友だちもいるでしょう。それでも構いません。教会の礼拝式に来て、神さまのお話を聞き続けるならば必ず、分かります。そして、嬉しくて神さまを心から愛することができるようになります。たとえ自分では、上手に説明できなくても、イエスさまを信じることによって、ああ本当に神さまは天のお父さま、イエスさま、聖霊なる神さまで三人の神さまではなく、お一人の神さまなんだと分かる時が来るのです。

それなら「愛」って何でしょう。愛について、誰か上手に説明することができますか。それも難

しいと思います。それなら、愛ってなんのことが分からないお友達はいますか。おそらく、「そんな言葉聞いたことがない」って言うお友達はいないと思います。でも、もしかすると、それがどんなものなのかわからないというお友達もいるかもしれません。後で、分級の先生に伝えてください。

愛を上手に説明できなくても、お父さんから、お母さんから、おじいちゃんから、おばあちゃんから優しくされたこと、抱っこしてもらったこと、かわいがってもらった事があるでしょう。その時、とっても嬉しい気持ちがありましたね。とっても、気持ちが安らくなったはずです。それを愛と言って良いと思います。

愛ってなんだろう、と考える時に、今日の聖書の中に「ここに愛があります。」という言葉がありました。どこに愛があるのか、ここにあるのだと、手紙を書いたヨハネさんは言いました。「ここ」というのは、今から2000年前に、天のお父さまが僕たち私たちを神の子にするために、独り子の神さまをあのかのクリスマスの時に、この地上に人間として生まれさせてくださったことです。神さまの独り子はイエスさまという赤ちゃんとなってこの地上に来てくださいました。天と地をおつくりになられた御子なる神さまが人間になることだけでも、すごい事です。でも、それだけではありませんでした。イエスさまは、30年程後、僕たち

私たちの身代わりになって、十字架についてくださったのです。僕たち私たちが犯してしまった罪の責任、罪の刑罰を、十字架で身代わりに引き受けてくださったのです。

僕たち私たちは、これまでずーっと、神さまに愛され、守られ、生かされています。それなのに、神さまに感謝することがまったく足りません。本当なら、神さまに喜んでもらうために、自分のすべての力を注いで、生きていかなければならないはずなのに、自分を喜ばせたり、楽しませたりすることばかりに力を注いでいます。神さまの愛に対して、神さまを信じない、神さまを愛さない、神さまを無視して生きているようなものです。

でも、天のお父さまは、「そんな人間なんて、もう勝手にしなさい！自分で滅んでしまって、わたしの裁きを受けなさい！」と僕たち私たちを見捨ててしまわなかったのです。たった一人の愛する愛する御子を、神さまの敵になっている僕たち私たちのために、十字架につけてくださったのです。ここに！神さまの愛があります。

神さまは愛です。愛のお方です。父なる神さまと子なる神イエスさまと聖霊なる神さまはいつもお互いを愛し合っておられます。愛の絆で結ばれ

て離れることがありません。愛に満ち溢れています。その神さまが僕たち私たちを愛してくださるのです。それは、どれほど素晴らしい愛でしょうか。お父さんの愛よりお母さんの愛より、どんな素晴らしい人の愛より、どんなに大好きな人からの愛より、この三位一体の神さまの愛より素晴らしい、本物の愛はないのです。比べられる愛などありません。愛の中の愛、真の愛は神さまが僕たち私たちを愛しておられるこの愛です。僕たち私たちが知っている愛は、すべて神さまから与えていただいた愛と関係があります。本当の愛は、神さまが分け与えてくださるものなのだからです。

最後にもう一度考えましょう。天のお父さまは愛するイエスさまを御自分の手で、十字架で罰せられました。お捨てにされました。イエスさまは本当に死なれたのです。つまり、僕たち私たちの罪が、神さまの愛の絆を破ってしまったのです。けれども、神さまは、僕たち私たちを神さまの子どもにするために、頼みもしないのに喜んで、そうして下さったのです。ここに愛があります！そして、天のお父さまはイエスさまをよみがえらせて下さいました。ですから今、僕たち私たちは、安心して生きてゆけます。三位一体の神さまの愛は、今日もここにいます僕たち私たち、ここにいないお友達にも注がれているのです。（相馬伸郎）

〔今日の暗唱聖句〕 ヨハネの手紙一4章16節後半

神は愛です。

愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。

〈主題〉

愛の神さまとの交わり

〈ねらい〉

救い主イエスさまのもとにある「ほんとうの愛」の交わりに入るように招く。

〈展開例〉

みなさんは、迷子になったことがありますか。多くの人中で、たったひとりになったとき、とってもさびしい気持ちになるだけではなく、とっても怖い気持ちになりませんでしたか。天の父なる神さまは、イエスさまをわたしたちのために与えてくださいました。それは、神さまのもとにみんな帰ることができるためです。迷子になっても、お父さんや、お母さんのもとに帰ると、ほっとして安心しますね。それと同じように、神さまは、「神さまなんかいなくても生きていける」な

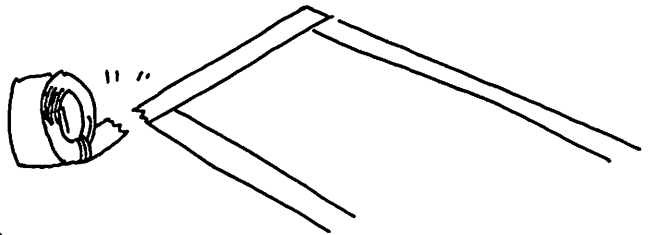
んで意地っ張りなわたしたちのために、イエスさまを与えてくださって、「ここに帰っておいで」と招いてくださっているのです。帰るところがあると、ほんとうに安心ですね。そして、神さまのもとに帰って、そこで、いつも一緒にいることは、もっと楽しいことですね。いつも、一緒に、イエスさまを信じて、ほんとうの神さまにお祈りをしつつ、愛の交わりを楽しんでいきましょう。

〈お祈り〉

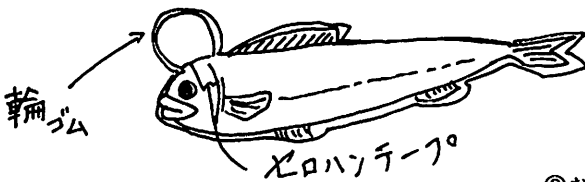
天の父なる神さま。わたしたちをあなたのもとに連れ帰ってくださってありがとうございます。どうか、いつもイエスさまの愛を忘れないで、いつもイエスさまと一緒にいることができるようにしてください。お友達と一緒にイエスさまの愛を喜ぶ子どもにしてください。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

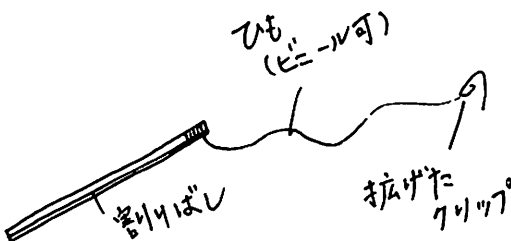
～魚釣りゲーム～



①ビニールテープで床に池の形をつくる。



②おさかなをたくさんつくっておよがせよう。



③つりざおでおさかなをつりあげよう！

※ひもの長さを変えると、ハンディーができます。

〈ねらい〉

「神の愛」を、両親の私たちに対する愛の関係から理解する。

〈分級教師へのアドバイス〉

三位一体の神様の愛を、神様からの恵みや人間どうしの愛でたとえるのは、神の愛の一部分しか示していないことに過ぎません。優しさを強調するあまり、神様の厳しさや義の面を否定して神の愛のイメージを限定してしまわないように注意しましょう。

また、子どもたちの家庭環境を考慮し、特に父親が不在である子どもがいる場合は配慮しましょう。

〈展開例〉

①みんなは、お父さん、お母さんは好き？

(回答例)

- ・好き
- ・嫌い

(わざと、そう言う子もいますが、本当に嫌っている子どもがいる場合がありますので注意しましょう。)

②お父さんはみんなのことを好きかな？ お母さんはどうかな？

③神様のことは好き？

- ・好き
- ・わからない

④お父さんお母さんがみんなのことを大好きで愛して下さっているように、神様も私たち

みんなのことを愛してくださっているんですよ。

⑤先週、「三位一体」って習ったね。父なる神様と、御子イエス様と、聖霊なる神様がおられるよね。

⑥父なる神様は、イエス様のことを愛して、イエス様も父なる神様を愛して、聖霊なる神様も父なる神様とイエス様を愛しておられるの。

ちょうど、私たちがお父さんお母さんを愛していて、お父さんお母さんが私たちを愛してくださっておられるみたいですね。

⑦私たちのお父さんお母さんが私たちを愛してくださっているように、天の神様も私たちのことを愛してくださっておられるし、イエス様も私たちのことを愛してくださっておられるし、聖霊なる神様も私たちのことを愛してくださっておられるんですよ。

⑧だから私たちも、天の父なる神様を愛して、イエス様を愛して、聖霊なる神様を愛して、それだけじゃなくて、お父さんお母さん、兄弟、お友だち、みんなを愛していくんですよ。

〈折り〉

天のお父様。あなたが、私たちを愛してくださっていることを感謝します。その愛をもって、私たちに必要なものを備えてくださいますことを感謝します。私たちが、神様を愛して、私たちの周りのたくさんの人たちを愛していくことができるようにしてください。

〈ねらい〉

①三位一体の神様こそ、愛の源であることを覚え、②イエス・キリストの十字架こそ、その愛の表れであり、③聖霊の働きによって、私たちにも愛があふれることを覚える。

〈展開例〉

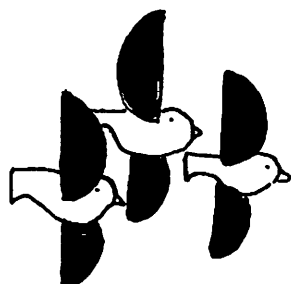
1. アイスブレーク（うち解けるための質問）
「神様の愛について考えるとき、聖書のどの箇所を思い出しますか。」
2. 人間の愛や家族の愛と、神様の愛を比べて、どの点が違うか話し合ってみよう。
3. イエス様が十字架で苦しまれ、死なれたほど

に、私たちを愛しておられることについて考えてみよう。

4. 聖霊の結ぶ実は、愛です。聖霊に満たされて、心にキリストの愛があふれるようにお祈りしましょう。

〈祈り〉

天の父なる神様、私たちが罪や死から救われるために、あなたのひとり子をお送りくださってありがとうございます。イエス様、私が受けるはずの罪の罰を、私に代わって受けてくださって、ありがとうございます。あなたの愛を感謝します。聖霊なる神様、どうぞ、あなたの愛を私たちの心いっぱい満たしてください。



〈聖書をさらに深く〉

1. 神様ご自身が、愛に満ちておられます。そして特に、私たちが神様を愛したのではなく、神様が私たちを愛してくださったのであり、その証拠がイエスさまであるということをしかりと確認しましょう。自分にクリスチャンらしい愛があるかどうかを気にかける前に、神様が愛のない私たちを愛してくださったということに感謝しましょう。
2. 神様はさらに聖霊を与えて、私たちが実際に愛することができるように変えてくださいます。私たちの愛とは、神への愛であり、隣人への愛です。ここでは特に、神を信じる者同士の愛の交わりが強調されています。教会で経験した愛について、小さなことでも話し合ってみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 三位一体の神様が持たれる交わりは、何よりも愛の交わりです。神様は御自身の内に、愛し、愛されるという豊かな愛の交わりを持っておられます。神様は、他の何ものをも必要とされることのないまったく満ち足りた存在です（存在論的三位一体）。このような神様の愛と比べて、私たちの愛はいかに不完全なものか、身近なところから話し合ってみましょう。
2. 三位一体の神様の交わりは、この世界へもたらされ、私たちも、この神様との愛の交わりに入れられます。神様は、私たちにまず御子を与え、さらに聖霊を与えてくださいました（経綸的三位一体）。私たちは、聖霊の働きにより、御子を信じることを通して、神様と一つにされます。このように、三位一体の神様と私たちの信仰との関わりを整理しながら確認しましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

26日（月曜日）

使徒言行録24章1～23節

Q. パウロは誰の前で弁明した？

27日（火曜日）

使徒言行録24章24節～25章12節

Q. パウロは誰に上訴することになった？

28日（水曜日）

使徒言行録25章13～27節

Q. パウロがユダヤ人と言い争っている問題は何かのこと？

29日（木曜日）

使徒言行録26章1～18節

Q. イエスがパウロに現れたのは何のためだった？

30日（金曜日）

使徒言行録26章19～32節

Q. パウロの弁明を聞いたフェストゥスは大声で何と言った？

31日（土曜日）

使徒言行録27章1～12節

Q. 航海の途中、パウロは何を忠告した？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト マタイによる福音書8章23～27節

〈弟子たちの不信仰〉

イエス様と弟子たちは、ガリラヤ湖において、舟に乗り込み (23)、カファルナウム (5) から向こう岸のガダラの地方に (28) 向かいます。弟子たちの中は、ペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネら、ガリラヤ湖において漁師をしていた者たちがいました。彼らは、この湖の気象変化、地理、環境などを知り尽くしていたことでしょう。従って彼らからすれば、向こう岸に渡ることは、日常の出来事の一つにしか過ぎなかったことでしょう。そのため、イエス様を向こう岸にお連れするのは、自分たちの仕事であると信じて、行っていました。しかし彼らは突然の嵐には対応することが出来ませんでした (24)。ここに自分たちの手で成し遂げようとする者の傲慢の罪が露わにされています。

〈全てを委ねておられるイエス様〉

一方その間、イエス様は眠っておられました (24)。慌てふためく弟子たちとは対照的です。これは、漁師である弟子たちの力量を信じていたからではありません。イエス様が眠っておられた原因の一つに、カファルナウムにおいて多くの病人を癒され、肉体的な疲れもあったということもあるでしょう。しかしそれと同時に、否、最大の理

由は、父なる神様に御自身と弟子たちの命を委ねておられたからです。このイエス様の姿を、私たちは覚えなければなりません。

〈自然を支配される主〉

そして、イエス様が風と湖とお叱りになると、すっかり凪になります (26)。ここで、イエス様が自然を御支配しておられる主であることが明らかにされます (参照：詩編89：10、107：29)。主なる神様は、自然を支配され、私たちの命をも司っていて下さいます。

〈主に委ねる信仰〉

聖書は『人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。』(27)と語ります。私たちは、自然を自由に操作することなど出来ないと考えています。しかし主なる神様が、自然を統治しておられるのです。だからこそ、私たちは、自然を自分の手で操作しようと考えたり、何もせずあきらめたりすることなく、神様の力を信じて、神様に全てを委ね、より頼み、助けを求めていかなければなりません。 (辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問11

子どもカテキズム

問11 私たちの神さまの全能、主権とは何ですか。

答 私たちの神さまが、すべてのものを神さまの栄光のために定め、造り、保ち、支配しておられることです。

神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問7

ウェストミンスター大教理問答 問12

ハイデルベルク信仰問答 問26

1. 神の主権としての「聖定」

「神の聖定とは、神の御意志の熟慮による永遠の決意です。これによって神は、御自身の栄光のために、すべての出来事をあらかじめ決めておられるのです」(小教理7)とあるように、神はご自身の栄光のために、「全くの永遠から、ご自身のみ旨の最も賢きよいご計画によって、起こりくることは何事であれ、自由にしかも不変的に定められ」(告白3章1節)ておられます。ここで第一に覚えなければならないことは、この世界を創造された神は、「生ける神」であられるということです。生ける神とは、この世界に生きて働きかけられる神であられるということと、世界がこの神に全く依存しているということ、神なしにはこの世界は存立し、維持していくことが出来ないことを意味します。生ける神とは、この世界の「生命の源」です。この世界において起こり来る全ての事柄も、この生ける神に依存しています。神から離れて、神と無関係に起こり来る事柄は何一つないし、ありえない、この世に偶然ということはないことを信じるのです。なぜか。それは神が既に、この世に起こり来る一切を、永遠の昔から決めておられるからです。この信仰によってわたしたちが信じることは、わたしたちの神は、「主権の神」であられるということで、「神の主権性」への信仰こそ、この教理の眼目です。

2. 「神の御意志の熟慮による永遠の決意」

神の聖定は、起こり来る全ての事柄や出来事において、神が全ての源であられるということで、神の「自律自存性」を表わします。「すべてのものは神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。」(ローマ11章36節)それは時間を超えて、決して変わることはないご計画です。これまでも、これからも将来に渡って変わることがない、神の「不変性」を表わします。「主の企てはとこしえに立ち、御心の計いは代々に続く。」(詩33編11節)そこで計画されたことは、必ず成就し、実現します。それは神の「全能性」を表わし、また偶然に生じることが何一つありえず、一切が神の御手の内にあるのですから、そこには「一貫性」があります。「神がいったん定められたなら、だれも翻すことはできない。神は望むがままに行われる。」(ヨブ23章13節)「わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を必ず果たす。」(イザヤ55章11節)そしてこのご計画は、わたしたちの幸いのためのものです。「わたしはあなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」(エレミヤ29章11節) (三川栄二)

テキスト マタイによる福音書8章23～27節

カテキズム 子どもカテキズム問11

〔単元のねらい〕

神の主権を信じる信仰は、すべてを神の栄光に帰す信仰である。何故なら、神はすべてのものを御自身の栄光のために永遠に決定（聖定）されているからである。これは、問1に明らかにされている人生の目的と重なる。子どもたちに自分の全生涯が、この全能、主権なる神の聖定の下に置かれていることを仰がせたい。神の栄光を目指して安心して生きれる者とされていることを悟らせ、励ましたい。

「イエスさまに叱られた嵐と湖」

ある日のこと、イエスさまは船に乗ってガリラヤの湖を渡ろうとなさいました。ガダラ人という人々がいる場所に行かれるためです。お弟子さんたちは、すぐにイエスさまと一緒に船に乗り込みました。お弟子さんたちは、イエスさまに「あなたさまが行かれるところなら、どこへでも従ってまいります。」と約束したばかりでした。

お弟子さんの中には、漁師さんがいました。ペトロとアンデレさん、ヤコブとヨハネさんです。もしかすると、この漁師達は心の中で思ったかもしれません。「イエスさまお一人で船に乗って向こう岸になんか行けっこないさ。ガリラヤ湖は、なぎの時もあるけれど、ちょっと天気が変わると大変なことになるのだ。だから、俺たちがついて、船を出してさし上げないといけない。」

お弟子さんたちの中でも特にこの四人は張り切っています。そしてこう言いました。「さあ、みんな、安心して乗っててください。なんなら、ひと眠りして下さい。イエスさまはとてもお疲れのはずです。どうぞ、大船に乗ったつもりで横になって休んでください。安全にお運びいたします。どうぞ、任せておいてください。」

彼らは、棹を力の限りこぎ始めます。「ヨイショ、ヨイショ」掛け声も軽やかにどんどん進みます。ところがどうしたことでしょう。だんだん、雲行きが怪しくなって来ました。「ああ、まずいな。急がなくては。」ところが天気はどんどん悪くなるばかり、「ビュービューー」とすごい風が吹きつ

けて来ました。どうどうたまらなくなって叫びました。「みんな、もう危険だ。手伝ってくれ！」でも、もう波は大荒れになって、小さな船は波に飲み込まれて、今にも転覆しそうです。「ああ、恐いよ。ああ、神さま助けて」皆、心の中でこう思っています。

その時、弟子の一人がハッと気づきました。「あれっ、イエスさまは何をなさっているのだろう。」イエスさまの方をチラッと見ました。するとどうでしょう。イエスさまは眠っておられるままです。先生はとても不思議に思います。船が大揺れなのに、いったいどうして寝ることができるのでしょうか。もしかして、眠ったふりをなさったのかなど考えたりします。でも本当に眠っておられるのです。

それなら、どうして眠っておられるのでしょうか。それは、イエスさまは神さまですから、この嵐によって船が沈む事などあり得ないと知っておられるからです。

けれども、弟子たちはそうはいきません。全員がイエスさまの体を揺すります。「イエスさま、起きて下さい。主よ。助けてください。おぼれそうです。何とかして下さい。」弟子たちは暢気に眠っていて何もされないイエスさまに対して、怒りたい気持ちすら芽生えています。「助けてください、何とかして下さい」ってきつい口調です。すると、イエスさまは、きっぱりとおっしゃいました。「何

故、怖がるのか、怖がる必要などないではないか。
信仰の薄い者たちよ」

弟子たちはそう言われて、どんな気持ちがした
と思いますか。あっけにと取られてしまったのかも
しれません。ある弟子はこう思ったかもしれません。
「ああ、本当に、イエスさまは、神さまを信じ
きっておられるんだ。それに比べて俺たちとき
たら、まったくなくていやしないな」

またある弟子はこんな風に思ったかもしれませ
ん。「そんなこと言われても、イエスさま、船が
沈みそうです。転覆しそうです。それでもねむっ
ているなんておかしいんじゃないですか。」皆だっ
たらどう考えるでしょうか。

さて、イエスさまは、起き上がられます。そし
て、風と海に向かってこうおっしゃいました。「黙
れ、静まれ！」するとどうでしょう。一瞬で、ピ
タッとなぎになったのです。静かな湖に戻ったの
です。弟子たちはびっくりしてしまいました。
「いったい、この方はどういう方なのだろう。風
や湖でさへも従うなんて！」

この出来事はお弟子さんたちには忘れられない
ことでした。4つの福音書のすべてにこのお話が
あります。僕たち私たちも、このお話しから、イ
エスさまっていったいどういう方なのだろうと考

えさせられます。

なんと答えれば良いのでしょうか。イエスさま
は神さまだから、風も海も、どんな自然も従わせ
ることがおできになるのです。イエスさまは、天
のお父さまといっしょに、天と地と目に見えるも
のも見えないものもすべてをお造りになられたの
です。しかも、神さまの栄光を現すためにです。
すべてを支配しておられるのです。宇宙の果ての
その果てまでも神さまの力が届かない場所はない
のです。

それなら、僕たち私たちも、安心して良いはず
ですね。僕たち私たちの将来、明日のことはだれ
もわかりません。先生もお父さんもお母さんも、
自分自身分かりません。でも、心配したり、怖が
る必要はありますか。ありません。なぜなら、イ
エスさまを信じている僕たち私たちが、神さまの
栄光を現して生きれるようにちゃんと準備されて
いるのですから。

それなら、僕たち私たちはどうすれば良いです
か。イエスさまを信じることです。イエスさまに
従ってついて行くことです。イエスさまのために
勉強したりお友達と遊んだりすることです。イエ
スさまは、僕たち私たちとどんな時にも一緒にい
てくださいます。
(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] コロサイの信徒への手紙 1章16節

天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、
王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。
つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。

〈主題〉

神さまにみこころをたずねる

〈ねらい〉

すべての世界を治めておられるほんとうの神さまの力を伝える。

〈展開例〉

みなさんは、朝に目を覚まして、夜におやすみするまで、だれの言うことを聞いていますか。お父さんや、お母さんに、「朝ですよ。起きなさい」と言われて起きますか。寝るときは、「もう遅いから、寝なさい」と言われますか。小さいときは、お父さんや、お母さんや、先生の言うことを聞いて大きくなりますね。これから、大きくなって、大人になったら、みなさんは、だれの言うことを一番にして生きていきますか。そう、どんな時にも、神さまの言われることに耳を傾けることが大

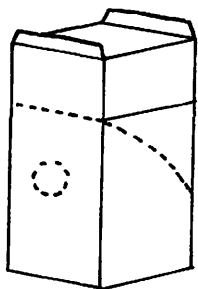
事ですね。実は、宇宙も、世界も、神さまのご意志によって造られて、神さまにおしながいしているのです。朝になって、東の空から太陽がのぼって、夕方になって、西の空に日がしずむのも、朝になって、月や星が光るのも、みんな、神さまのみこころに従っているからです。ですから、人間にとって、一番大切なことは、この神さまのみこころに従っていくこと、どんなことにも、神さまのみこころをたずね求めることが大切です。聖書のみ言葉を学んで、一緒にお祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。どんなことにも神さまの深いみこころをたずね求めることができますように。イエスさまが神さまの恵みと知恵によって大きくなったように、わたしたちにも大きくなれますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

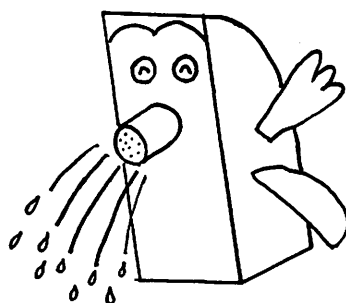
～ペンギンじょうろ～



- ①牛乳パックを図のように切る。
(穴は容器より小さめに)



- ②ヤクルトなどの空き容器を切って、
底に穴をいくつかあける。



- ③口、羽、頭などの飾りを貼り付けて、
水を入れて遊ぶ。

〈ねらい〉

神様がすべてをつかさどる力あるお方であることを知り、その神様に委ねることができることを学ぶ。

〈分級教師へのアドバイス〉

子どもたちは、正確な知識を持たなくても、言葉の上では非常に広い世界を知っています。世界や宇宙、見えるものも見えないものも、すべてが神様の支配の中にあることを示しましょう。迷信世界や異教的な社会も神様が支配される領域として大胆に語ってよいでしょう。

〈展開例〉

- ① 今日のお話のイエス様はすごかったねえ。嵐でも風でもみんなイエス様の命令を聞くんですね。
- ② イエス様は、神様ですから、どんなものでもイエス様の命令を聞くし、どんなことでも、イエス様のおっしゃる通りになるんですよ。
- ③ どんなに遠くのものでも、どんなに大きなものでも、どんなに偉い人間でも、何でもみんなイエス様の言う通りになるんです。イエス様の言うことを聞くものは、ほかにどんなものがあると思う？

(回答例)

- ・人(王様、大臣、先生、牧師先生)

- ・自然(天気、季節、)
- ・宇宙(太陽、星、宇宙人)
- ・霊的世界(幽霊、妖怪、仏さま)

④ 私たちじゃあわからないこと、私たちじゃあいうことを聞かせられないものも、イエス様は全部御存じだし、全部命令して言うことを聞かせることができるんですよ。

⑤ 何でだと思っ？ それはですね。実は、イエス様が神様だからなんです。

⑥ イエス様は何でもしてくださることができるから、私たちはどんなことでもイエス様にお祈りして、お願いすることができるんですよ。

⑦ じゃあ、みんな神様に私たちのことをお祈りしましょう。

〈祈り〉

天のお父様。あなたが私たちに必要なものをすべて与えてくださるお方であることを感謝します。私たちが困った時や苦しい時にあなたが助けてくださることを感謝します。どうか私たちをいつも守り、私たちが神様を信じて生活することができるようにしてください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①神様は、全能のお方であられることを覚え、②すべてのものを支配しておられる生けるまことの神様であられることを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレーク（うち解けるための質問）
「神様とまったくかわりがないものがありますか。みんなで探してみましよう。」
2. 神様は、全能のお方です。すべてのものを創られ、支配しておられます。ですから、すべてのものは、神様との関係をもっています。
3. すべての人は、神様によって生かされています。

す。どの人の人生も生活も、神様から与えられたかけがえのないものです。

4. 神様は、目には見えませんが、生きておられます。私たちは、神様の力と全能の働きの中で生きています。神様は、いつでも、どこにいても私たちを守り導いてくださっています。

〈折り〉

神様、あなたは生きておられ、日々の生活の中で、いつも一緒にいてくださいますから、ありがとうございます。どうぞ、あなたの主権によって、これからも、いつまでも、私たちを守り導いてください。



〈聖書をさらに深く〉

1. 弟子たちの中には漁師もいましたから、湖のことはよく分かっていたはずですが、しかし、その湖に激しい嵐が起こったときに、彼らは慌ててしまいました。自分で得意だと思っていることでも、自分の予想をはるかに越えた出来事によって、心が乱されることがあります。そのような経験があれば、話し合ってみましょう。
2. そのような中、イエスさまは、舟の中で眠っておられました。ここには、父なる神様への信頼があります。また、その後で、イエスさまが風と湖を叱って凪にしたのは、イエスさまの神様としての力の証しでした。私たちが不安にさせるものが、身の周りにどれぐらいあるでしょう。しかしイエスさまが力をもって私たちを守ってくださいます。

〈教理を響かせるために〉

1. 神の聖定という言葉覚えましょう。神様は、世界のあらゆることについて計画を定めておられます。私たちも、自分や身の周りのことについて計画を立てますが、自分の計画どおりいかないことが多いのではないのでしょうか。しかし、神様の計画は必ず実現するのです。
2. その神の計画が、ご自身の栄光と私たちの救いへと向けられていることを覚えましょう。だからこそ、私たちは神様の計画が行われることを信じ、またそのことを祈り求めていくのです。将来の夢など、それぞれの心にある計画や願いについて話し合ってみるのもいいでしょう。そして、その上で、それらが神様の計画にかなうものであるかどうか、祈りながら問うてみましょう。計画や考えが変わることは悪いことではありません。大切なことは、神様の計画に身を委ねて、信仰を持って歩むことです。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

2日（月曜日）

使徒言行録27章13～44節

Q. 船にいた人は全部で何人だった？

3日（火曜日）

使徒言行録28章1～16節

Q. たき火をたいていたとき、パウロの手に何が絡みついていた？

4日（水曜日）

使徒言行録28章17～31節

Q. パウロは自費で借りた家に何年間いて神の国を宣べ伝えた？

5日（木曜日）

ローマの信徒への手紙1章1～15節

Q. ローマの信徒たちにこの手紙を書いているのは誰？

6日（金曜日）

ローマの信徒への手紙1章16～32節

Q. 福音には何が啓示されている？

7日（土曜日）

ローマの信徒への手紙2章1～16節

Q. 神が正しい裁きを行われる日は何の日と呼ばれている？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト 創世記1章

〈初めに〉

世界には初めがあり、神様が言葉を発せられることにより、天地万物が創造されていきました。つまり、神様は時間を支配しておられるお方です。時間を支配するという事は、その時間空間の中に存在する全てのものをも神様の御支配の下に置き、被造物が生きるのも死ぬのも、神様の御意志によってなされることを意味します。

〈秩序正しい創造〉

また、神様は、言葉を発せられる事により、天地万物を創造されます。神様の言葉は、全ての被造物を従わせる力があるのです。そして神様は、6日間で天地万物を秩序正しく創造されました。一般に進化論が叫ばれる中、神様の創造を語り、理解を求めていく、困難な作業です。しかし神様の天地万物の創造の御業は、秩序正しく成されたのです。そしてこの秩序正しさこそが、自然における秩序正しさへと繋がるのです。そして、私たちが秩序正しい生活を送ることが出来るのは、神様がお与え下さった自然の恵みと、これらの自然が秩序正しく動き、私たちの生活にとって必要な全てをものを備えて下さるからです。

しかしながら、聖書は自然科学の教科書ではありません。聖書には、私たちが神様を信じるために必要なことが記されているのであり、聖書に書かれていること以上の詮索をすべきではありません。例えば、天地創造時の一日が、現在の24時間であったか、否かは、聖書から知ることは出来ま

せん。あくまでも神様の持っておられる基準における一日であり、この一日が24時間であったか否かについて、私たちが詮索すべきことではありません。「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」(ペトロニ3:8)

〈人間の創造〉

神様は、第六の日に、人を創造されます。「我々」(26)は一人称複数ですが、「神」・「御自分」(27)は単数であり、御父・御子・御霊なる三つの位格を持ちながらも、なおも一人の神様であられることがここで示されています。そして神様は、「我々にかたどり、我々に似せて」と語られて、人を創造されました。つまり神様は、人を他の被造物とは区別して、特別の存在として、そして神様の持っておられる様々な本性を備えるものとして人間をお創り下さいました。ですから、人間は時間の中で神様によって創造されますが、神のかたちが与えられた者として、この時点では、神様と共に生きる者として、つまり死という前提がないものとして、創造されたのです。

また神様は人間に地上を統治し支配する権能をお与え下さいました(28)。このことは、人間が、神様から特別愛された者として、神様が創られた自然を通して、豊かな恵みを頂くと同時に、自然をはじめとする全ての被造物を統治し、神様が創られた秩序が乱されていくことに対して管理していく働きも与えられているのです。(辻 幸宏)

カテキズム 子どもカテキズム問12

子どもカテキズム

問12 神さまの創造のお働きとは何ですか。

答 私たちの神さまが、ただ御言葉によって、

世界とそこにあるすべてのものを、極めて良いものとして造られたことです。

〈見えるものと見えないもの〉

「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです」(ヘブライ11章3節)。見えるものにばかり心を向け、見えないものへの深い関心を放棄することは、間違いなくわたしたちの人生を軽薄なものにします。軽薄で、見栄や体裁ばかりの人生を、何によって乗り越えられるのでしょうか。聖書の語る創造への信仰こそ、生きることの意味と恵みを、まことの深みでわたしたちに示してくれます。

聖書の創造信仰は、科学による宇宙や世界の探求を否定するものではありません。けれども、科学が明らかにする世界の姿を、もう一度信仰によって、信仰の目で検証することは、欠かせません。「信仰によって……分かる」とヘブライ人への手紙は記しています。信仰によってしか分からないことがあります。

宇宙は無限に見えても限りがあります。時間も無限ではありません。このように、有限な世界を、無限の愛によって創造し、愛してくださる神を信頼することによって、はじめて人生は確かなものとされるのです。

〈ただみ言葉によって〉

神の創造のみ業は、言葉による出来事です。神が「光あれ」と語られて、光が存在したのです。神の言葉の生きた働きが、世界に命をあたえ、目標をあたえました。実際、聖書は、まだ時間も生命もない混沌とした「初め」から、一切の時間が終わる「終局(終末と神の国の完成)」にいたるまで、初めから終わりまでを、残すところなく包み込んでいます。このような書物はほかにありません。「全聖書がカバーする時間は、最初の人間

いや無生物・生物の出現するはるか以前からスタートし、可見の全宇宙の終焉(ゴール)にまで至る」(犬飼道子)。

神の言葉は知恵に満ちた言葉です。神の言葉は愛の言葉です。わたしたちが生きるこの世界は、神の豊かな恵みと愛に満ちた言葉によって、包まれています。それは、わたしたちが学び、考え、働き、愛し、苦しみに耐える生活を続けるときの、驚くべき慰めの宝庫です。神の言葉のない世界で、人は苦しみや試練に耐えることができるでしょうか。学ぶこと働くことは、「意味」を探求することです。もし世界が、単なる偶然の産物だとしたら、人は自分の労苦や忍耐に「意味」を見いだすことができず、空しさに耐えることもできません。神は、世界を御言葉によって創造し、世界と人生に御言葉を満たすことによって、生きることを考えることに、豊かな「意味」を満たしておられます。

〈極めて良いもの〉

神は、「6日間」にすべてのものを創造し、お造りになったすべてのものを「極めて良い」と判断されました。そして、7日目にご自分の仕事を離れて「安息」されました。それは、神が創造された世界のかたわらに、立ち止まってくださることを意味しています。全能なる神は、さらに新しい世界と被造物を求めて、創造のわざを継続することもできたにもかかわらず、創造のわざを終わらせてくださいました。神は、自分の創造の働きに限界をもうけ、世界のかたわらに立ち止まってくださるのです。ここに愛があります。幼子と歩く父親が、子の速度に歩調を合わせるように、神は被造世界を愛して、極めて良い、という愛の判定を下されました。この愛によってわたしたちは生きるのです。(小野静雄)

テキスト 創世記1章
カテキズム 子どもカテキズム問12

〔単元のねらい〕

創造者なる神の信仰を教えることは、この世界を勇気と希望とをもって生きることへと促す力を与えることである。現実の罪の悲惨の世界をなおそのように生きることができるのは、楽観主義や刹那主義からではなく、生ける創造者への信仰に基く。安心して生きることと大自然を支配する責任とをあわせて語る。キャンプなどで、御言葉と共に自然に触れさせることは実に大きな信仰教育の実りをもたらすであろう。キャンプ、夏期学校が祝福されますように！

「幸せだなあ、天地の造り主の神さまを信じる人は」

今日は聖書の最初のページ、第一ページを読みました。旧約聖書の最初の言葉はこうです。「初めに、神は天地を創造された。」

「初めに」って「いつ」のことなのでしょう。聖書の中には、書いてありません。初めてということは、違う言葉で言えば、「始まり」ってことです。始まりの反対は何でしょうか。「終わり」ですね。神さまは、始まりと終わりを造られたのです。神さまはその二つを御手の中に握っておられるのです。始まりと終わりっていうと小学校に行っているお友達は、1学期の月曜日の1時間目の授業は何があるか、すぐ答えられる人はいいますか。答えられなくても学校が始まる時間は知っているでしょうか。1時間目が終る時間は知っているでしょうか。僕たち私たちの生活には、始まりと終わりがありますね。つまり、時間の中で生活しているわけです。遅れてしまうから急ごうとか、時間が足りなくなって宿題が出来なくなってしまうとか。全部、時間が問題になりますね。神さまは、時間をおつくりになられました。それは、神さまが時間を支配しておられるということです。世界はこのままのようにいつまでも続くのではありません。神さまがこの世界を終らせるときが来るのです。それが、いつの日なのかは、先生には分かりません。聖書に書いていないからです。けれども、先生は、天のお父様、神さまはご存知ですから安心していられます。先生は自分

がいつ生まれたのかは知っていますが、いつ死ぬのかはわかりません。けれども、安心です。天のお父さまが、先生の生きること死ぬ事、人生のすべてを守っておられる事を知っているから、信じているからです。天と地と時間を造り、支配しておられる真の神さまを信じて生きる人は、どんな悲しい事、苦しい事が起こっても、へこたれないで生きてゆける人になります。この神さまより強く力あるものは世界の中に何も無いからです。

「初めに、神は天地を創造された。」神さまは、天と地、目に見えるものと見えないものすべて、つまり世界にあるすべてのもの、宇宙のすべてをお造りになられたということです。つまり、世界は偶然に出来上がったものではありません。それなら神さまは、何の為に、どんな目的でお造りになられたのでしょうか。それは、神さまの栄光のためです。

これまで見たことのある景色の中で一番きれいな景色、場所を思い出してください。どこか遠いところに行かなくても、たとえば朝日、朝焼けの空、夕日、夕焼けの空など、きれいですよね。夜空の星もきれいですよね。すべては神さまの栄光のために造られているのですから、きれいなはずですよ。

この間、太陽の光がCDに差し込んで反射して、壁に虹が出ているのを見ました。太陽の光は、実

は七色になっているのですよね。すばらしいな、きれいだなと思いました。

神さまが創造されたものは皆すばらしく、良いものです。そして、そのすばらしさも良さも、神さまの栄光を反射しているからなのです。その神さまの栄光を現すために神さまは世界を創造されたのです。

神さまの栄光は冷たいものではありません。暖かいものです。命です。愛です。すべてのものは神さまの愛によって、つくられているから素晴らしいのです。その中でも人間がもっとも素晴らしいのは、神さまにもっとも愛されているからです。つまり、僕たち私たちは、神さまに愛される為に生まれてきたのです。今、生きている、生かされているのです。何と素晴らしいことでしょう。僕たち私たちは、なんと幸せなものでしょう。

「初めに、神は天地を創造された。」神さまは御自分が創造された一つ一つをご覧になってどう思われたのでしょうか。「神はこれを見て、良しとされた。」ところが実は今、この地球は、このまま行くと人間はもちろんすべての生き物が住めなくなるほど汚れてしまう、食べるものが収穫できなくなったり、温暖化で今住んでいる場所が海の中に沈んでしまったりすると言われていました。

このすばらしいものとしてつくられた世界をいつまでも素晴らしいものとする責任が神さまを信

じている僕たち私たちにあります。昆虫、動物、お魚、お花、木々など自然を大切にしたいと思います。

「初めに、神は天地を創造された。」神さまは、どのような方法で天地を創造されたのでしょうか。「『光よ、あれ。』こうして光があった。」神さまは光も大空も海も陸地も草も果樹も、すべてのものを神さまの御言葉によって創造されました。神さまの御言葉には力があるのです。その通り実現してしまうのです。そのとおり出来上がってしまうのです。

僕たち私たちは、毎週日曜日ここで何をしていますか。今、何をしていますか。神さまの御言葉、聖書のお話、つまり、説教を聴いています。説教は、先生を通して神さまが皆さんに語りかけてくださる生きた言葉です。

神さまが、僕たち私たちに一番告げたいことは、イエスさまが僕たち私たちの身代わりになって死んでお甦りになった事です。天のお父さまは、イエスさまを信じる人は神さまの子になると約束して下さいました。ですから信じている、僕たち私たちは間違いなく神さまの子なのです。神さまの子のためにこそ、世界は創造されました。だから、僕たち私たちは、安心して生きるのです。そして、神さまの栄光のために生きるのです。(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] 創世記1章1節

初めに、神は天地を創造された。

〈主題〉

世界を造られた神さまの祝福

〈ねらい〉

すべての世界を造られた神さまの祝福を伝える。

〈展開例〉

みなさんは、「うつくしいなあとか、不思議だなあ」と思うことがありますか。どんなに小さなことでも、よく注意して見ると、「ほんとうに不思議だなあ」と思うことがありますね。ことりや、小さな虫、ありんこを観察してみましよう。小さなお花を見ましよう。よく見るとほんとうに不思議です。また、とても美しいものです。イエスさまは、「空の鳥を見よ。野の花を見よ」とわたしたちにやさしく語りかけてくださいました。そこに、天の父なる神さまの造られたやさしさと、

細やかさと、いつくしみを見ることかできます。それほど、神さまは、わたしたちを造られただけでなくこの世界のすべてをお造りになって、「とても良い」「すばらしい」と満足されたのです。わたしたちも、心から、神さまの造られたものを見て、「ほんとうにすばらしい」と感謝するとき、神さまをほめたたえずにはいられなくなります。「ハレルヤ、息のあるものは、こぞって、しゅ（神さま）をほめたたえよ」と。

〈お祈り〉

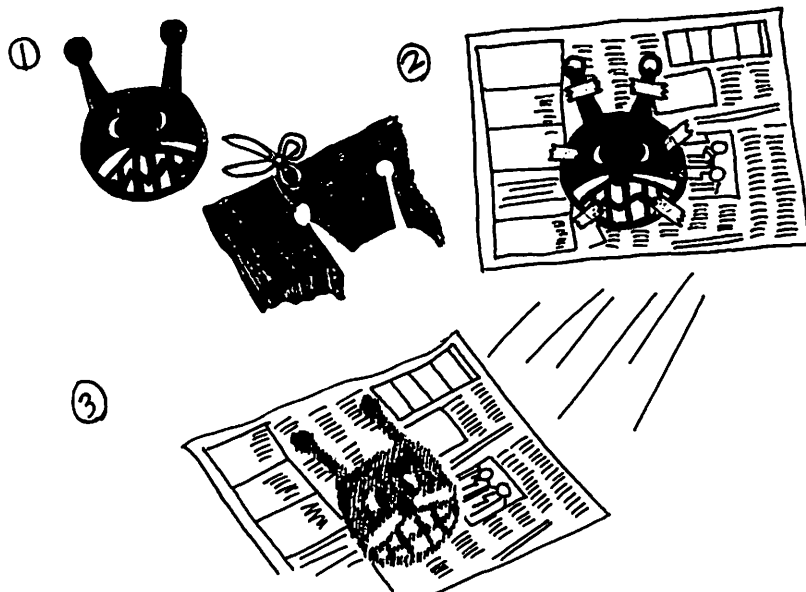
天の父なる神さま。あなたの造られたものを喜ぶこころを与えてください。わたしも世界の人々も、世界も、宇宙も、みんな、神さまの栄光のために造られたことを信じて、神さまをほめたたえることができますように。イエスさまのとういお名前によって、お祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～しんぶんで日光写真～

- ① 黒い紙（光をとおしにくいもの）を好きな形に切る。
- ② 新聞紙に、切った形をのせて、テープでとめる。
- ③ 半日くらい、よく日のあたるところに置いておく。

紙をはがすと、形がうきあがるよ！



〈ねらい〉

この世界のすべてを神様が創造されたこと、神様の計画により、良いものとして創造されたことを覚える。神様の御手のすばらしさを確かめる。

〈分級教師へのアドバイス〉

創造の御業自体は、まったく素晴らしいものであって、その素晴らしさは自然の精緻さに認めることができます。世界の様々な陰や悪は墮落の結果ですが、今回はそこまで踏み込まず、世界の素晴らしさに目を向け、私たちがその素晴らしい世界の中に生かされていることの幸いを覚えることができるようにしましょう。

またさらに理解が進むようであれば、創造主の御手が、終りの日に向かって、私たちが導き続けておられることを恵みとして覚えることができればよいでしょう。

〈展開例〉

①みんなは、動物の名前をいくつか言える？

（回答例）

・ゾウ、キリン、ライオン、イヌ……

②じゃあ、木や草やお花の名前は知ってる？

・チューリップ、桜、松……

③動物も木も草も魚も鳥も、みんな神様が造ってくださったんですよ。

④例えば、象の鼻が長くて耳が大きくて体も大きいのは、神様がそういうふうに造ってくださったからだし、チューリップが春に赤い花や黄色い花を咲かせるのもみんな神様がそういうふうに造ってくださったからなんですよ。

⑤ほかにどんなものを神様は造ってくださったと思う？

- ・空、星、宇宙、
- ・人間、わたし
- ・ビル、車、テレビ

⑥ビルや車は人間が発明したんだけど、その元になった鉄やガラスは神様が造ったんだし、車が走るようにガソリンが燃えたり、電気が点いたりするのも神様が造った仕組みですね。

⑦そんなスゴイ、素晴らしい世界の中で、私たちは、その神様に守られて生きているんですよ。

⑧それは、私たちが、神様の造ってくださったこの世界を通して、神様の素晴らしさを賛美することができるようにするためなんです。

〈折り〉

天のお父様。あなたが、この世界のすべてのものを本当に素晴らしく造ってくださったことを感謝します。私たちがその素晴らしい世界を大切に、造ってくださった神様を賛美して過ごすことができるようにしてください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈あそぼう〉

大きな紙を用意して、みんなで色々な動物を描いてみよう。

- ・人数にもよるが、4～5人で模造紙の全紙くらいあると十分に描ける。
- ・子どもたちは、紙の縁を地面に見立てるので、適当に中の方に地面の線を描いてあげると良い。
- ・折り紙で動物を作って貼るのも良い

〈ねらい〉

①神様は、創り主であられることを覚え、②万物が神様によって創られたことを理解し、③創造のみわざに感謝する。

〈展開例〉

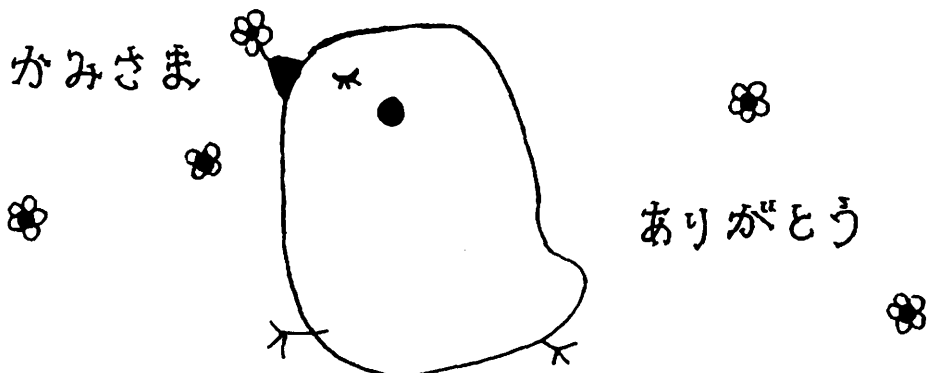
1. アイスブレーク（うち解けるための質問）
「神様が創られたものを、順番に言ってみよう。」
「神様の創造のすばらしさを感じたことがありますか。それは、どんな時でしたか。」
2. 神様は、創り主です。ですから、私たち人間も、自然も宇宙も、目に見えるものも、目に見えないもの（たとえば天使）も、神様によって創られました。

3. 神様は、すべてのものを創られました。どこに行っても、神様が創られたものの中に、私たちは生かされています。

4. 神様は、六日間で天地万物を創られました。神様がお造りになったものは、どれもみな良いものです。神様の創造のすばらしさについて、話し合ってみましょう。

〈折り〉

神様、あなたは生きておられ、日々の生活の中で、いつも一緒にいてくださいますから、ありがとうございます。天地万物を創られたあなたが、私たちをも生かして下さって、ありがとうございます。あなたの創造のすばらしさを、ますます理解することが出来るようにしてください。



〈聖書をさらに深く〉

1. 神様は、六日の間に創造の働きをなされました。それぞれの日に何を造られたか、聖書から確認しましょう。第一日「光」、第二日「大空と水」、第三日「乾いた所、また草木」、第四日「大空に光る物」、第五日「水の中の生き物、また大空を飛ぶ鳥」、第六日「地を造るもの、また人間」。第一日と第四日、第二日と第五日、第三日と第六日が、それぞれ対応していることを確認すると、覚えやすくなるでしょう。
2. 聖書は、創世記1章1節の「初めに」という言葉で始まります。神様は本当にいるのか、人間が神を造ったのではないか、という問いから始まるものではありません。神様が「初めに」天地万物を造り、そして、私たちをも造ってくださったのです。また、新約聖書のヨハネによる福音書も、「初めに」という言葉で始まるということを確認してみてもいいでしょう。そこでは、イエスさまが神様として「初め」からおられたということが示されています。

〈教理を響かせるために〉

1. ウェストミンスター小教理第9問も読んでみましょう。創造の教理で大切な点は、神様が「御言葉によって」、「良いもの」として世界を造られたということです。私たちが聖書を通して毎日ふれている神様の言葉は、ただ私たちの心を励ましてくれるだけの言葉ではなく、この世界を造り出すことができる力ある言葉です。また、この世界は、神様が造られた「良い世界」であり、私たちが喜んで生きることのできる世界です。グノーシスという言葉は難しいかもしれませんが、キリスト教の歴史の中では、この点での大きな異端があったことを知っていてもよいでしょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

9日（月曜日）

ローマの信徒への手紙2章17～29節

- Q. 本当の割礼とは何によって心に施されるもの？

10日（火曜日）

ローマの信徒への手紙3章1～20節

- Q. ユダヤ人もギリシア人も何の下にある？

11日（水曜日）

ローマの信徒への手紙3章21～31節

- Q. 人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、何による？

12日（木曜日）

ローマの信徒への手紙4章1～12節

- Q. 信仰によって義とされた証しとして割礼の印を受けたのは誰？

13日（金曜日）

ローマの信徒への手紙4章13～25節

- Q. 何を信じれば私たちも義と認められる？

14日（土曜日）

ローマの信徒への手紙5章1～11節

- Q. 苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は何を生む？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト マタイによる福音書5章43～48節

聖書が教える平和は単に戦争がないというだけの平和ではありません。平和（シャローム）とは、わたしたちの間にある敵意という壁が取り壊され、神と人との間の交わり、人と人との間の交わりが完全に回復している状態を意味します（エフェソ2:14-17）。それなら敵意の壁を壊し、真の平和を実現させるものは何でしょうか。それこそが、主イエス・キリストにおいて示された敵をも愛する神の愛なのです。

〈ユダヤ人にとっての隣人愛〉

主イエスは本日の箇所、当時のユダヤ人たちの常識であった「隣人を愛し、敵を憎め」という教えに対して、敵をも愛することこそ、神の求めておられる愛であると教えています。もちろん、旧約聖書の中に直接「隣人を愛し、敵を憎め」という言葉があるわけではありません。しかし、彼等は多くの場合、神が求めている隣人愛の対象をあくまでも同じ民族・同胞に限定して考えてきました。そして、割礼を受けていない異邦人は、神の愛からは切り離された罪人であり、隣人愛の対象とは考えていなかったのです。さらにイスラエルの民は、周辺の異民族の国々から頻りに安全を脅かされてきたため、そうした「敵」である異邦人は愛の対象であるどころか、まさに敵意と憎しみの対象でもあったのです。

〈敵をも愛する神の愛〉

しかし、44節で主イエスは彼等に「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」と命じられました。確かに神は義なるお方ですから、神に敵対する罪と悪を憎まれます。しかし、旧約聖書をよく見て行くなれば、神の愛の対象は決してイスラエルだけに限定されていないことが分かります。（出エジプト23:4-5、申命記23:8、箴言25:21-22等）神の愛は神に敵対する諸民族にも実は

及んでいるのです。また、神に敵対するという点では、神の民であるイスラエルこそ、神の愛を受けながらもそれを忘れ、神に敵対してきたのです。しかし、神はそれでも彼等を愛し、滅ぼすことなく、忍耐して待っておられたのです。

主イエスが「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」と教えておられるように、神はわたしたちが神に罪を犯し、神に敵対している者であったにも関わらず、わたしたちに愛を注いでくださいます。それだけでなく、罪人であるわたしたちを罪から救うために、神の御子イエス・キリストを十字架にお掛けになったのです。この敵をも愛する神の愛によって、わたしたちと神とを隔てていた罪の壁が壊され、わたしたちは神との交わりを回復させられ、真の平和を与えられたのです。

〈平和を創り出す神の愛〉

主イエスへの信仰を通して、わたしたちクリスチャンはこのような素晴らしい神の愛と平和を与えられています。しかし、わたしたちに神の愛が与えられ、平和が与えられているのは、私たちもまた、この世界の中で神の愛を伝え、神の愛に生きるためです。そして、そのことを通して、この世界に平和を創り出すという神の御業に積極的に参与して行くためなのです。神はそのようなわたしたちの働きを用いて、世界に真の平和を実現させ、神の国を完成させてくださるのです。

「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ26:52）と、主イエスがおっしゃたように、敵への憎しみと力によっては決して真の平和は実現しません。神は武力による道ではなく、敵をも愛する神の愛による和解の道こそ、わたしたちに求めておられるのです。

（弓矢健児）

〈序〉

今日は59回目の敗戦記念日です。日本は、この間、戦争を行っていません。このことは世界に誇ることが出来ます。しかし近年、自衛隊の海外派遣の議論が盛んになされ、遂に今年に入りイラクに派遣されました。こうした中、キリスト者として、平和を築き上げていくために何が求められているのでしょうか。

〈上に立つ権威に従うこと〉

「教会は、政治に対して口を出してはならない」と語られます。その根拠となる聖句は、「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。従って、権威に逆らう者は、神の定めにく背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。」(ローマ12:1-2)です。このことは、国に立てられた為政者が、キリスト者であるか否かを問わず、神様によって定められていることを語っています。そのためにキリスト者は、神様を信じる者として、為政者に対しても従うことが求められています。

〈抵抗権〉

しかし私たちが忘れてはならないことは、私たちは、第一に神様に従わなければなりません。つまり私たちが為政者に従うのも、為政者が神様から与えられた命令に従っている限りにあることです。たとえ為政者がキリスト者であっても、過ちを犯してしまい、神様のご命令から逸れてしまうこともあります。まして、為政者が非キリスト者であれば、なおさらのことです。彼らにとって、

善悪の基準が神様にありませんから、神様の求めておられる神の国の完成に向けての歩み、言い換えますと平和を築き上げることから離れていくことも十分に考えられます。このような場合、キリスト者は、神様のご命令に従う者として、為政者の行う政治に対して否を唱え、為政者の過ちを正していくことが求められています。

日本のキリスト教会は、明治から第二次大戦中、為政者の過ちに対して、声を挙げることをほとんど行うことが出来ませんでした。それは大別して二つあり、第一に天皇を神とすること(偶像崇拜の罪)であり、第二に、朝鮮半島・旧満州・中国・台湾・東南アジア諸国の占領したこと(隣人のものを欲する・殺す・姦淫する・盗むことの罪)です。

現在の日本のキリスト教会の状況は、過去の歴史から、ヤスクニ問題にある偶像崇拜に関しては、否を唱えていく一致がありますが、正直な所、平和を築くという点で、第二の点に関しては、ばらつきがあるのが正直な所でしょう。神様が求めておられることは、神の国の実現であり、人間が地上を治め、平和を築いていくことです。そのために私たちは、武器を身にまとうのではなく、神の武具である真理の帯・正義の胸当て・平和の福音の履物・信仰の盾・救いの兜、霊の剣を持つ必要があります(エフェソ6:10-20)。

軍隊を持つことは、地上にあっては「普通の国」かもしれませんが、神様の御前では罪深い国であります。時間がかかり遠回りかも知れませんが、神の平和の実現のため、歩み続けましょう。

(辻 幸宏)

テキスト マタイによる福音書5章43～48節

〔単元のねらい〕

かつて我々は（戦中の日本基督教団時代）、日曜学校において『国体護持』教育を推進した。当時の日曜学校教案誌（教師の友）は、軍国少年少女を養成するものと堕した。我々は、今日、戦後かつてない危機的状況下におかれている。キリストの主権を説き続ける我々の教案誌は、ことさら時代の状況を載せなくても、時代と対決する備えを整えることとなると信じる。しかし、本日は、敗戦記念の主日であることを心に留め、平和主日として礼拝式を捧げ、再び子らにこの罪を犯すことがないように、子らを戦地へ赴かせないように祈りたい。

「敵のために太陽を昇らせ、雨を降らせる神さま」

今日は、8月15日です。今日が何の日か知っていますか。日本の敗戦記念の日です。今から約60年前。戦争が日本の敗戦によって終わった日です。その日がちょうど日曜日つまりイエスさまがお甞りになられた主の日、礼拝日と重なりました。今日の子どもの礼拝式では、みんなと平和について考えたいと思います。戦争の事については、分級の時間でそれぞれが学びましょう。

イエスさまは弟子たちを前にして幾つもの教えを語られました。その中の一つが今日、皆と聞いた教えです。「隣人を愛し、敵を憎め」隣人とは、いつもそばで暮らしている仲間達のことです。ユダヤ人にとって隣人は神さまを信じている自分の仲間達のことです。ですから、ユダヤの人達は自分達のことを特別、神さまに愛されているすばらしい民、神の民として誇りに思っていました。そこまでなら何も問題はありません。でも、ユダヤの人達はこう考えました。「もしも、自分達を迫害したり、攻撃したり、自分達のことを軽んじるような人なら、私たちは神さまの味方なんだから、私たちの敵はつまり神さまの敵、そんなやつらは憎んで当然だ、神さまのひどい審きがあって当然だ。神さま遠慮せずにやっつけてください。」皆さんは、このように考えるユダヤの人達のことをどう思いますか。「うわあー、酷い人達」そう思うかもしれません。「自分だったらそんなことは

考えないのにな。」と思っているお友達もいるかもしれません。

けれども、イエスさまはおっしゃいました。「あなたがたはそのように考えていますが、わたしはあなたがた、つまり私の弟子たちには命じます。敵を愛しなさい。自分を迫害する人達のために祈りなさい。」

ここで、イエスさまは何を教えておられるのでしょうか。さて、皆には、敵がいますか。今、けんかしているお友だちがいますか。兄弟げんかをしたことはありませんか。誰でも、一度や二度はけんかしたことがあるでしょう。そんなときききっと、「愛してあげよう」とか「お祈りしてあげよう」とか思わないでしょう。

でもイエスさまは、「愛しなさい。お祈りしてあげなさい。」とおっしゃいました。どうしてかという、主イエス・キリストのお父さま、神さまの目には、隣人とか敵という隔たり、壁がないからなのです。僕たち私たちの天のお父さまは、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせて下さるからだとおっしゃるのです。

ここで考えて見ましょう。僕たち私たちは、自分のことを「どっち」だと思っていますか。あなたは、悪人ですか、善人ですか。あなたは正しい人ですか正しくない人ですか。もしかすると、僕

たち私たちは、すぐに、「僕は、どっちかと言えば、正しい人間の方、善人の方だ」こう考えるのではないでしょう。

でもそれは、本当のことでしょうか。神さまの前に本当に、自分は善い人間、正しい人間と言えるのでしょうか。そのような人は、神さまの前に、一度も罪を犯したことの無い人のことです。罪とは、差別しない心です。「わたしの友達、わたしのことを好きになってくれる人、優しくしてくれる人は大好きだけど、そうでない人はどうでも知らない。むしろ、そんな人は神さまから懲らしめてもらった方が、気持ちグススリする……」こんな風に、考えた事のあるお友達は間違いなく、神さまの前には、罪人、正しくない人間、悪人です。けれども、イエスさまは、そんなことを一度も思ったことの無い人間です。それに比べたら、僕たち私たちは、まったくの罪人ではないですか。

もしもイエスさま、もしも天のお父さまが「そんなお前たちなら、太陽を昇らせるのはやめておこう。雨を降らせるのは、よそう。」とお考えになったら、僕たち私たちはもう明日から、生きて行くことができなくなってしまはずです。

僕たち私たちは神さまの敵となっています。けれども、天のお父さまはこの敵のために、独り

子イエスさまを与えて下さいました。敵を愛すること、敵を赦すことがどんなことかを神さまは見せて下さいました。行なって下さいました。だから、今、僕たち私たちはただイエスさまを信じただけで、神さまの子ども、神さまから「わたしの愛する子」と呼ばれているのです。何も善い事をしていないのに、一方的に、恵みによって善い物を与えてくださるのが、神さまです。

イエスさまは今、僕たち私たちの目をみつめておおせられます。「あなたは正しい人間でなくても、そのまま神さまの子とされています。神さまはあなたがたの天のお父さまになってくださいました。だったら、自分の考えで、自分にとって悪い人、正しくない人と決め付けたり、その人を憎んだり、死んでしまえなどと考えられますか」

神さまは完全な愛、100パーセントの愛で、僕たち私たちを、そしてもちろんここにはいない人達をも愛しておられます。だから僕たち私たちはお友達に親切にしたいのです。何度失敗してもへこたれないで、神さまごめんなさいとお詫びして、お友達にもごめんなさいとお詫びして生きてゆけるし、行くのです。そんな僕たち私たちを天のお父さまは100点満点の子どもと見ておられるのです。
(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句]

マタイによる福音書5章9節

平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

〈主題〉

お互いに仲良く生きる

〈ねらい〉

ただイエスさまの愛によって、世界の人々と一緒に仲良くするように勤める。

〈展開例〉

みなさんは、「ギセイ」という言葉を知っていますか。だれかが生きる代わりに命を捨てることを「ギセイ」と言います。でも、戦争で死ぬことは、ほんとうに、だれかが生きる代わりになっているのでしょうか。ほんとうは、だれかの代わりに死んでもいい人は、一人もいませんし、たとえ、死んだとしても、命をつくり出すことのできる人は、ほんとうは誰もいないのです。命は神さまのものだから。平和をつくり出すために、大切なことは、最も重いものは何かなあ、って考えるこ

とです。それは、人間の一人一人の命です。イエスさまの十字架の「ギセイ」だけがただひとつのたしい「ギセイ」です。ほんとうに、罪びとのみ代わりに死ぬことのできるのは、神さまのひとり子イエスさまただお一人なのです。ですから、イエスさまの「ギセイ」となられた十字架の死がいちばん重い命の代わりなんです。イエスさまの愛によって、世界中のこどもたちが元気に仲良く暮らせるようにお祈りしましょう。

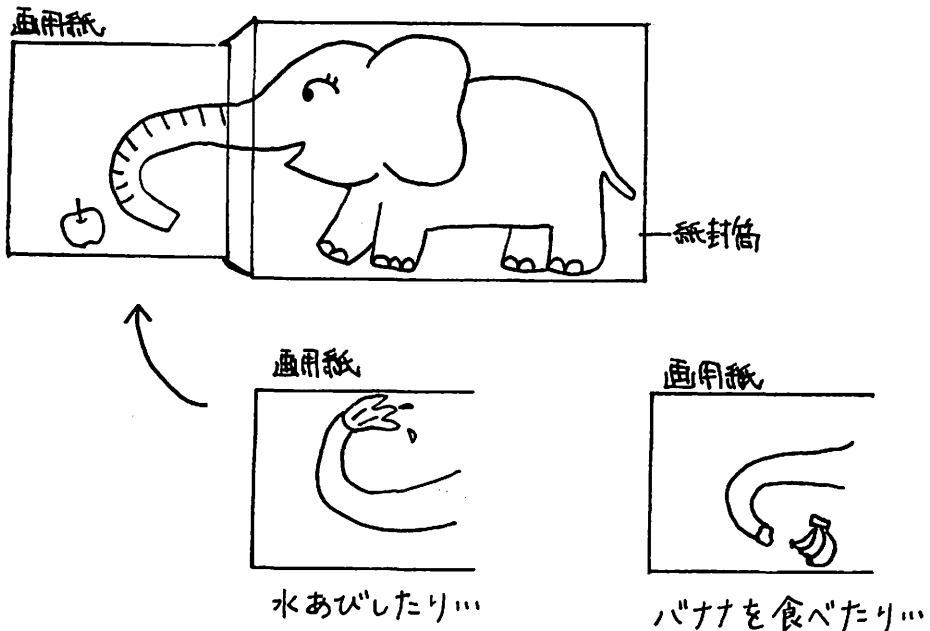
〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちの命は神さまのもので。でも、毎日のように、戦争や飢えや病気でたくさんの人たち、子どもたちが死んでいます。どうか、イエスさまの十字架の死の重みを心にとめて、ほんとうの平和をつくり出せますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈ります。アーメン。

〈やってみよう〉

～紙封筒で“えばなし”～

紙封筒に絵を描き、画用紙に絵を描いたものを差し替えて遊ぶ



〈ねらい〉

私たちが神様に敵対する者であるにも関わらず、神様に愛していただいていることを実感する。

〈分級教師へのアドバイス〉

特に近年、戦争のニュースが多いにも関わらず、戦争の恐ろしさについてのリアリティーが希薄になってきています。教会学校教師もほとんどは戦争体験はないでしょう。年配の長老さんなどに特別にお話をしてもらうのもよいかもしれません。

〈展開例〉

①みんな神様のことは好きですか？

(回答例)

・好き

②実は神様は、正しいお方ですから、本当は、正しい人が大好きなんです。みんなは、神様に好かれる正しい子かな？

・正しい

・正しくない

③みんなは、神様の言うことを聞いて、お父さんお母さんの言うことを聞いて、兄弟げんかをしてしないで、きちんと礼拝を守って、嘘をつかないでいるかな？

・してない

④もし、みんなの友だちが、みんなの嫌がることして、約束を破って、嘘をついたらどうする？

・怒る

・絶交する

⑤でも、みんなは神様との約束を破って、神様のいやがる悪いことをしてるし、嘘をついてるんだよ。

それなのに神様は、みんなのことを嫌いにならないで、愛していてくれるんだよ。

⑥だからみんなも、すぐにけんかをしたり、絶交したりするんじゃなくて、みんなに意地悪する人にも親切にしてあげられるとイイね。

〈折り〉

天のお父様。私たちは、あなたとの約束を破り、いつも悪いことばかりしてしまいますが、それでもあなたは私たちのことを愛して、大切にしてください。ありがとうございます。私たちも、あなたのように、すべての人を愛して、仲良くして、親切にすることができるようにしてください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①平和は、創り出すものであることを覚え、②神様との平和が、平和の君・キリストによって与えられ、③敵を愛することの大切さを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「今まで、だれかと仲直りしたことがありますか。それは、どんな時でしたか。」

2. 神様は、平和の神です。ですから、だれかが神様のことをきらっていたり、人と人が憎しみ合うことをとても悲しまれます。

3. イエス様は、神様と私たちのこわれてしまった関係を、十字架の死によって償って、取り戻してくださいました。イエス様は、平和の君です。

4. イエス様によって、私の罪が赦されたことが分かる時、私も初めて、他の人を赦すことが出来るようになります。神様と人、人と人、国と国、壊れてしまった平和が、イエス様の赦しと愛によって回復することができるようにお祈りしましょう。

〈祈り〉

平和の神様、イエス様の十字架の救いによって、あなたとの平和を創り出してください。ありがとうございます。どうぞ、イエス様に赦されたように、私たちも人を赦すことが出来るようにしてください。イエス様に愛されているように、私たちも人を愛することが出来るようにしてください。イエス様の平和を、私の心に、人びとの心に、世界中の国々に満たしてください。



〈聖書をさらに深く〉

- 隣人は愛するが、敵は憎むものだ、というのは私たちにとって自然な感情かもしれませんが。イエスさまの時代のユダヤ人たちも同じように考えていましたが、イエスさまは「敵を愛しなさい」と言われました。確かに、旧約聖書の中にはユダヤ人以外の人たちに対する厳しい言葉が出てきます。例えば、出エジプト記23章4節など。しかし、それらの言葉は、憎んでもいいという意味ではなく、彼らの罪に対する神様ご自身の裁きの厳しさを教えるためのものです。
- 敵をも愛するという愛は、神様の愛を知ることから可能になります。そして、その神様の愛は、イエスさまにおいて現されています。自分を迫害するもののためにも祈りながら死んでいかれたイエスさまの十字架を思い起こしましょう（ルカ23:34）。世界中で起こっている戦争の悲しい現実について、また、それぞれの身近なところにある小さな憎み合いなどについても話し合いながら、平和のための祈りをささげましょう。

〈教理を響かせるために〉

- 敵さえも愛するということは、私たちの信仰生活における究極の目標と言えるかもしれません。そのように生きることで、私たちは神様の栄光を現すからです。その意味では、いつも学んでいるカテキズムの全体が、敵を愛するという一つの実践へ向けられているとも言えます。カテキズムを学ぶことの意味を、そのような点から捉え直してみるのもいいでしょう。また、カテキズム全体の中では、特に十戒についての内容が平和の実践にとって重要でしょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

16日（月曜日）

ローマの信徒への手紙5章12～21節

- Q. 来るべき方キリストを前もって表す者だったのは誰？

17日（火曜日）

ローマの信徒への手紙6章1～14節

- Q. 私たちは何に対して死に、何に対して生きている？

18日（水曜日）

ローマの信徒への手紙6章15～23節

- Q. 罪が支払う報酬は死ですが、神の賜物は何？

19日（木曜日）

ローマの信徒への手紙7章1～12節

- Q. 律法から解放された者は、何に従う新しい生き方で仕えるようになる？

20日（金曜日）

ローマの信徒への手紙7章13～25節

- Q. 望まない悪を行っているのは、私の中に住む何？

21日（土曜日）

ローマの信徒への手紙8章1～17節

- Q. 神の霊によって導かれる者は皆、何？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト マタイによる福音書10章26～31節

この世界の中で、わたしたちの身の回りで、毎日いろいろな出来事が起っています。しかし、それらは決して偶然に起っているのでも、神の知らない所で起っているのでもありません。神はこの世界を創造しただけでなく、そのすべてを御心によって治めておられる「摂理の神」でもあられます。だからこそ、わたしたちはどんな状況においても神の愛に自らを委ね、感謝しつつ御言葉に従って生きることができるのです。

〈人々を恐れるな〉

マタイ福音書10章では、主イエスが12弟子を選び、彼等を福音宣教に遣わす前に、弟子たちにお語りになった言葉が記されていますが、本日の箇所はその中の一部です。

主イエスは26節で、主の御言葉は決して覆われたままのもの、隠されたままのものではないことを教えています。そして27節で、「暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい」とお命じになり、主の御言葉をこの世界に大胆に宣べ伝えて行くことを弟子たちに求めておられます。

しかし、現実にはわたしたちがこの世界の中で神の御言葉を伝え、御言葉に従って歩もうとした時、様々な抵抗や迫害を受けることがあります。そして、そのような迫害の中で、わたしたちはついこの世の権力や人々を恐れ、御言葉を語ることを躊躇してしまうことがあります。けれども、主イエスは26節で、「人々を恐れてはならない。」と、弟子たちに対して教えられました。また、28節でも、「体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。」と、お語りになり、わたしたちに勇気を持って御言葉に生きることを求めておられるのです。

〈真に恐れるべきお方〉

しかし、なぜ主イエスはわたしたちに対して、

この世の人々を恐れるな、とお語りになったのでしょうか。それは、わたしたち人間が本当に恐れるべきお方は真の神だけであるからです。

この世の権力や支配者がどれほど力を持っていたとしても、この世界のすべてのことを治めておられる真の王は神ご自身です。28節にあるように、この世の権力者がどんなに力を持っていたとしても、わたしたちの魂を殺すことはできません。わたしたちの命を創造した神だけが、わたしたちの体も魂も共に滅ぼすことのできる唯一のお方なのです。さらに29節、30節で主イエスが教えておられるように、その神は1羽の鳥が地に落ちることや、わたしたちの髪の毛一本に至るまで、実にすべてを御心によって治めておられる（摂理しておられる）のです。だからこそ、わたしたちが真に恐れるべきお方は、この世の人々ではなく、すべてを治めておられる神だけなのです。

〈神の愛による摂理〉

主イエスは31節で「だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」とおっしゃいました。この言葉から、わたしたちは神の摂理の目的を教えられます。確かに神の摂理はこの世界のすべてのことに及んでいます。しかし、神は何の目的も無くこの世界を治めておられるわけではありません。神はご自身の愛によって、この世界を、そして何よりもわたしたちを救うためにすべてを治めておられます。そのために神は御子イエス・キリストをこの世にお遣わしになったのです（ヨハネ福音書3章16～17）。つまり、わたしたちに対する神の摂理の背後には、深い神の愛があるということです。神はわたしたちを愛し、わたしたちを救うために、そして、神の愛の中で生かすために今もこの歴史の中で働いていくくださるのです。（弓矢健児）

カテキズム 子どもカテキズム問13

子どもカテキズム

問13 神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答 今、私たちに働く、神さまの善いお力のことです。

神さまのお許しがなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、

神さまは私たちの父として私たちを守ってくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、

すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです。

〈今も働く神〉

神の摂理とは、神がわたしたちの世界と人生のなかで起きることを、けっして野放しにされないという信仰です。つまり創造された世界を、たんなる「自然法則」に任せてはられません。またすべてのことを「偶然」の成り行きに任せることもなさいません。人間の事柄も、運命の支配や人間の自由気ままなふるまいに放任しているわけでもありません。神は、わたしたちの人生とその環境を、ご自身の「善いお力」によって支え、導いておられます。だからわたしたちも、自分の生活を行き当たりばったり、投げやりせず、十分に計画し、祈り、熟慮を重ね、何をするにも神様の御旨を求めるべきです。

〈信仰により、祈りにより〉

神の創造のわざを知るのが信仰の働きであるように、摂理のみわざも信仰によってだけ知ることができます。主イエス・キリストは、十字架にかかれる前の夜、ゲツセマネで苦悶に満ちた祈りをささげました。できるなら、十字架という杯を、過ぎ去らせてほしいとさえ祈られました。しかし、「わたしの願いどおりではなく、御心のままに」と祈ることを、主は決して忘れませんでした。自分の願いどおりのことを求めるなら、神様の導きも摂理も不用です。祈りは、自分の願いより神の御旨が実現することを願う信仰のわざです。神が一番よいことをしてください。その神への信頼を勝ち得る場所が、祈りです。ですから、摂理の御業を信じるために、何よりも必要なことは祈ることです。

〈私たちの父として〉

神様は、ご自身を信頼する者たちのために、最善の御旨を働かせておられます。だから、わたしたちは、自分の意に添わない出来事に直面する時にも、神の善意をすぐさま疑うようなことはしません。神は、わたしたちの天の父であります。主イエス・キリストによって、神がわたしたちの父となってくださったのです。そのような、愛と真実に満ちた神が、世界と人生を保ちまた治めてくださいます。わたしたちの小さな命、壊れやすい人生が、慈しみに満ちた父の手で支えられているのです。

聖書の信仰は、けっして抽象的なことではありません。日々の具体的な生活のなかで、食べること飲むこと、健康と病気、富と貧困などを通して、神が生きて働いてくださるのです。「髪の毛一本」にいたるまで、天の父である神の配慮が届いているというのです。

〈嬉しいことも悲しいことも〉

神の摂理が、わたしたちに戸惑いや苦難をもたらす場合があることを、カテキズムは隠そうとしていません。健康だけでなく病気も、喜びだけでなく悲しみも、ひとりの神のご意志から出ているのです。

人間の目から見ると不都合に思えることのなかに、天の父なる神様の熟慮から生まれた訓練の恵みが隠されています。摂理の信仰は、人生を貫く愛の秩序を見抜く力です。どんな出来事の中にも、「私たちの役に立つ」神の働きを見いだすとき、この父なる神の愛から私を引き離すものは何もないと知るので（ローマ8章39節）。（小野静雄）

テキスト マタイによる福音書10章26～31節
カテキズム 子どもカテキズム問13

〔単元のねらい〕

主権者にして創造者なる神が、自分を守ってくださるためにその全力を注いでくださることを信じていることが出来る人は何と幸いであろうか。この事実が大人も子どもも健やかに正しく生かします。二回に分けて摂理の信仰を語ります。そこでも、要になるのはイエス・キリストとの深い交わり、礼拝体験です。単なる信念では、信仰は破綻します。まさに今ここで、聖霊なる御神が子らに働いてくださることを祈りましょう。良き礼拝式となりますように。

「恐れる必唇なんがないさ、だつて一羽の雀でさえも……」

今日のイエスさまのお話の中には、雀が出てきました。皆の中で雀を見たことのある人はいますか。もちろん、誰でもいるでしょう。それなら、雀を食べたことのある人はいますか。きっといないでしょうね。先生もないです。でも、イエスさまの頃は、雀が食べる為に売られていたのです。小さな雀ですから、食べる場所は少ないでしょうし、おいしいのかどうか分かりません。

イエスさまは、何のためにこの雀のことをお話しされたのでしょうか。イエスさまはおっしゃいました。「二羽の雀は市場に行くと、一アサリオンで売られていますね。」一アサリオンというのは、イエスさまの時代のお金の中で一番安いお金の単位でした。日本でいうと一円玉ですね。その一円で買えるような食べ物が雀です。貧しい人は鶏肉なんか食べられずに、雀を食べていたのです。一円を持ってお店屋さんに行くと、雀は二羽くれるのです。「一羽でいいのになあ」と思っても、二羽で一アサリオンです。つまり、雀は一羽では売り物にならないほど安いのです。

皆はお買い物するとき、お店の人に「オマケしてください。」と言ったことがありますか。先生の頃は、そんなとき、ときどき、お店の人がオマケをつけてくれました。イエスさまはこのお話を何度もなさいましたけれど、ある時、こうおっしゃいました。「5羽の雀は2アサリオンで売ら

れていますよ。」中級の小学生のお友達はすぐに割り算ができるでしょう。でも割り切れないですね。あまりが出ます。2アサリオンで4羽買えるのですが、お店には一つのお皿に5羽並んでいるのです。一羽オマケです。つまり、雀はそれほど、安いのです。

でも、イエスさまは、おっしゃいました。「そんな安くて小さく名前もないような一羽の雀でさえ、神さまはお忘れになることはないのです。神さまのお許しがなければ、その一匹だって生きることも死ぬ事もないのです。」

皆の中でペットを飼っているお友達もいるでしょう。小さな動物、ハムスターやウサギを飼っているお友達もいるかもしれません。手のひらの中に入ってしまうような小さな動物も、神さまの許しがあって生きています。死ぬこともそうです。

先生はだんだん髪の毛が薄くなって来ています。ちょっと悲しい気持ちです。皆には先生の気持ちは分からないでしょうが、神さまはご存知です。イエスさまは、神さまは、先生の髪の毛の一本も残らず数えていると教えて下さいました。僕たち私たちは、自分の髪の毛が何本生えているか誰も知りません。

ある人はこんな風に言います。自分のことなら、自分が一番良く知っている。けれども本当は違います。神さまこそ、僕たち私たちのすべてをご存

知なのです。だったら、僕たち私たちは、安心して全部を神さまに知っていただけるはずです。悩んでいる事、悲しい事、辛い事、嬉しい事、楽しい事、どんなことでも神さまにお話しできるはずです。つまり、お祈りできるはずです。

神さまは御子イエスさまを信じる僕たち私たちの天のお父さまとなって下さいました。お父さんやお母さんは、いつも僕たち私たちが何かをして欲しい、何かを買って欲しいとお願いすると何でも聞いてくれるでしょうか。違うでしょう。どうしてだかわかりますか。意地悪をしているのではありません。「しつけ」です。我慢することを教え、無駄遣いをさせないためです。本当に必要なものを与えたいのです。それなら、天のお父さまはどうでしょう。僕たち私たちは、ベットが死ぬ事、そればかりか愛する人が病気になったり、亡くなったり、自分も病気になったり、怪我をしたり、意地悪されたり、親が離婚したり、いろいろ悲しい事を経験していると思います。

そんなとき、もう神さまを信じるのは止めよう、日曜学校に行くのは止めようと思ったりしないでください。お祈りするのです。お祈りしてもちっとも良くならないとか、お祈りしたのに祈りが聞かれなかったと悲しい経験をもっているお友達もいるはずです。でも、神さまはどんなに悲しく

辛いことでも、僕たち私たちに苦しめて、やる気をなくさせたり、生きるのを嫌にならせたりなすることはありません。僕たち私たちに神さまの子どもらしくするために、一番良いようにするため、悪魔と戦って下さるのです。だから、お祈りをやめないでください。お祈りすると、神さまがいっしょにいてくださり、すべてのことが僕たち私たちの祝福になるように、役立つように変えてしまわれることが分かってきます。けれども、お祈りしないと分かりません。

イエスさまは、僕たち私たちの罪を赦して神さまの子にするために、悲しい事も辛い事も、十字架のお苦しみの全部を耐えられました。そればかりか復活して、勝利して下さいました。

だからイエスさまは命令されます。「どんなに強い人間でも、たとえあなたたちを殺してしまうこともできる人間でも、人間が一番怖がっている死でも恐れてはなりません」どうして恐れる必要がないのですか。問13をもう一度唱えてみましょう。来週学ぶ問14も唱えてみましょう。神さまより強いものなんてありません。だから怖がらなくてもよいのです。怖くなったり、悲しくて辛くてたまらないときには、どうすれば良いのですか。「天のお父さま」とお祈りすれば良いのです。

(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] マタイによる福音書10章30節

あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。

〈主題〉

生きて働かれる神さま

〈ねらい〉

今もわたしたちを祝福しておられる神さまの愛を知り、どんな時にも神さまにお祈りするようにすすめる。

〈展開例〉

みなさんは、朝起きて、夜眠るまでの間、いつも元気ですか。病気になって、熱を出したときはどんなきもちがしますか。わたしたちが寝ているときも、起きているときも、元気なときも、病気のときも、ほんとうの神さまはわたしたちを守っておられます。そして、守ってくださるだけではなくて、わたしたちを「元気を出して」と励ましてくださるのも、神さまの力です。ですから、どんなにつらいときでも、悲しいときでも、わたしたちは、神さまの力によって、立ち上がっていけ

ますね。そして、うれしいときには、その喜びを、周りの人に伝えていくこと、悲しいときは、その悲しみを一緒に担うこと、それも、神さまの力によってできることです。ですから、神さまの力によりすがすることは、決して、その力を誇って威張ることではなく、かえって、神さまの力を知って、もっとお祈りしていくようになることですね。わたしたちの力は小さく、か弱くても、神さまの力は大きく、力強いのです。そして、その力にはやさしい恵みが満ちているのです。

〈お祈り〉

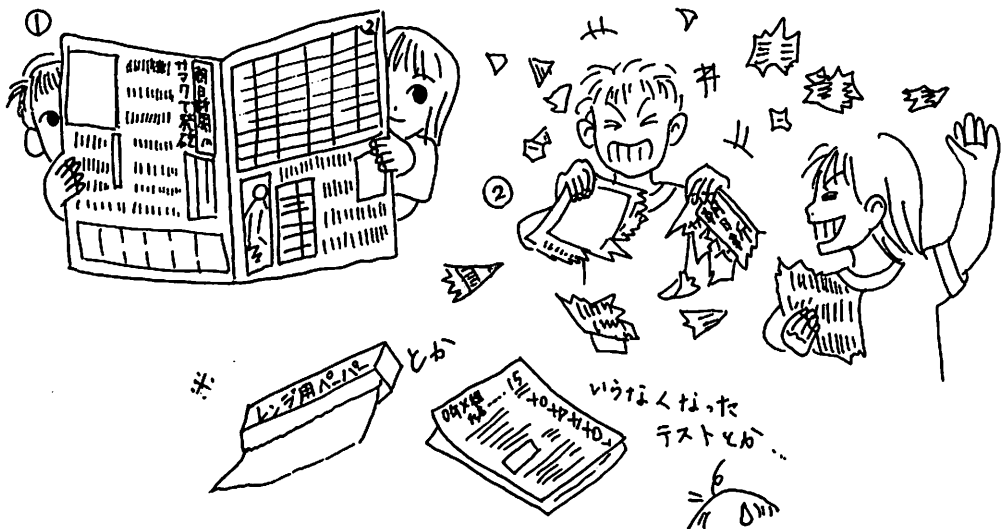
天の父なる神さま。元気なときも、病気のときも、いつも、わたしたちと一緒にいてくださり、ありがとうございます。どうか、いつも、神さまの力とやさしさを信じていることができますように。イエスさまのとういお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～どこまで小さくなるかなあ～

- ① グループに分かれて、新聞紙などの少し大きめの紙を引き裂く。
- ② 時間を決めて、一番こまかくしたグループの勝ち！

※少し引き裂きにくい紙を使うと面白いよ！



〈ねらい〉

神様が私たちのすべてをその御手のうちにおいてくださっていることを確信する。

〈分級教師へのアドバイス〉

今週は、神様の摂理が私たちのすべてを覆ってくださっていることを指摘して、そのことの持つ安心感を強調します。この安心感が強調されることによって、次週の異教的な手段の無意味性が強調されます。

教師自身がしっかりと自信に満ちて「それも神様の御手の内にある」と言葉と態度で示すことが大切です。現実には、摂理と私たちの苦難の問題は決して簡単に乗り越えることができるものではありませんが、この单元では、どんなことでも神様の御手に委ねて安心できることを即答しましょう。

〈展開例〉

①みんなは、神様のお祈りして何かお願いすることがある？

- ・ある
- ・ない

②何をお祈りするかな

- ・欲しいもの
- ・お天気

③先生も「明日は日曜日だから良い天気にしてください」とかお祈りしますよ。

そうすると神様はお天気してくれますね。

それは、神様がお天気を決めることができるからなんです。

④神様はどんなことでも御自分の一番よいと思うことを決めることができになりますから、私たちは、何でも神様にお願いすることができるんですね。

⑤でも時には、神様もお祈りを聞いてくださらないことがありますか？

・ある

⑥日曜日に天気になるようにお祈りしていても、雨が降ることがありますよね。でもそうやって時々雨が降るから、お庭のお花は枯れないで花を咲かせることができますね。

⑦神様は、私たち一人一人のことも、他の人たちのこともみんな考えて、一番良い物を一番良い時に与えてくださるんですよ。だからみんな、神様にお祈りして私たちに大切なものをきちんといただけるようにお願いしましょう。

〈祈り〉

天のお父様。あなたが私たちの欲しいもの、お願いしたことをすべて知っていてくださり、また私たちに今本当に必要なものをすべて御存じであることを感謝します。どうか、私たちの祈りに応えてくださり、私たちに必要なものをお与えください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①神様は、摂理の神であられ、今も働いておられることを覚え、②自然や万物が、偶然にあるのではないことを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

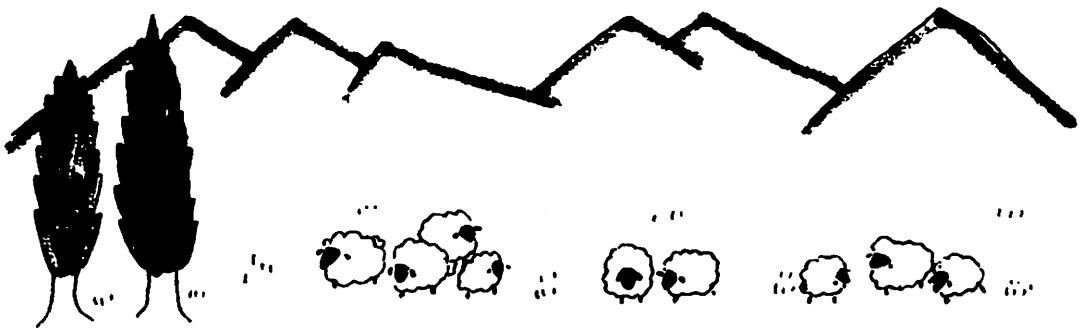
「今までに、神様がいらっしゃることを感じたことがありますか。それは、どんな時でしたか。」

2. 神様は、摂理の神です。ですから、今も自然や万物は、神様のみ手の中にあり、神様のみ力によって守られています。

3. 自然も、動物も、人間も、偶然にあるではありません。神様のご計画によって、ひとつひとつ意味と目的を与えられて存在しています。神様が、あなたのことを生まれてきてほしかったから、生まれてきて、今、生かされているのです。あなたは、かけがえない神様の宝です。

〈祈り〉

神様、あなたは生きておられ、日々の生活の中で、いつも一緒にいてくださいますから、ありがとうございます。わたしを生まれさせてくださって、ありがとうございます。いつも万物を作られた神様が、わたしを守り、導いてくださっていることを思い出させてください。



〈聖書をさらに深く〉

1. 私たちには恐いものがあります。学校の先生やクラスメートの中にも恐い人があるかもしれませんが。特に、暴力をふるうような人は恐いものですが、しかもそれが、私たちの信仰に対して文句を言うてくる人であつたらどうでしょう。イエスさまを信じるのをやめてしまうのでしょうか。教会に行くのをやめてしまうのでしょうか。聖書箇所のおすぐ前に、イエスさまが迫害を予告しておられることを確認しましょう。そのような状況になつても、恐れてはならないとイエスさまは言っておられるのです。
2. すべてのことは神様の御手の中にあります。イエスさまが迫害を予告されましたが、予告されたということは、そのことも決してイエスさまの予想外のこととして起こるのではなく、摂理の中で起こるということを意味しています。だからこそ、神様は私たちを守ってくださることもできるのです。

〈教理を響かせるために〉

1. 自分が思いもしなかった不思議な出来事が起こることがありますが、それをただの偶然と考へてしまうことはないでしょうか。すべてのことが、今も生きておられる神様の御手の内にあります。神様がこのようにして下さつたと実感できるような体験があれば、話し合つてみましょう。大きな出来事や不思議な出来事でなくても構いません。むしろ、当たり前のように思える毎日の生活（食べたり飲んだり）の中で摂理の神様を感じられることこそ大切と言えてでしょう。
2. ただし、悲しいことも摂理として受け止めるのは、難しいものです。そのような中にある友だちのために、共に祈りながら、神様の御心を求めましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

23日（月曜日）

ローマの信徒への手紙 8章 18～30節

Q. 霊は、どう祈るべきかを知らない私たちを、どのように執り成してくださる？

24日（火曜日）

ローマの信徒への手紙 8章 31～39節

Q. 神の愛から私たちを引き離すものが何かある？

25日（水曜日）

ローマの信徒への手紙 9章 1～18節

Q. 何に従つて生まれる子どもがアブラハムの子孫？

26日（木曜日）

ローマの信徒への手紙 9章 19～29節

Q. 神は私たちを何の器として召し出して下さつた？

27日（金曜日）

ローマの信徒への手紙 9章 30～10章 13節

Q. 人はどのようにすると義とされ、どのようにすると救われる？

29日（土曜日）

ローマの信徒への手紙 10章 14～21節

Q. 信仰は何によって始まる？

○心に残つた言葉を書き出してみよう。

テキスト ルカによる福音書7章11～17節

本日の箇所は主イエスがある婦人の一人息子を生き返らせる奇蹟をなされた物語です。聖書はこの出来事を通して、わたしたち人間の命を保持し、その命を死から復活へと回復してくださるお方は、神である主イエスご自身であることを教えています。

〈この世界における死の現実〉

11節、12節にあるように、主イエスはナインという町に行かれた時、そこでやもめの一人息子が死んで、その棺が担ぎだされる場面に遭遇なさいました。町の人々もこの母親に同情し、大勢がそばに付き添っていました。この時、一人息子を失ったやもめはまさに悲しみと失意のどん底にあったと思われます。

いつの時代でも、わたしたち人間にとって最も大きな試練は死であることに変わりはありません。人間がどんなに努力をしても、この死という現実から誰も逃れることができないのです。死という現実の前には、わたしたち人間は無力であるというのが偽りの無い事実です。

〈死を滅ぼし、命を回復させる神〉

しかし、13節にあるように、主イエスは失意の中で歎いている「この母親を見て、憐れに思い」、「もう泣かなくともよい」と声をおかけになりました。ここから、神である主イエスは、わたしたちが主に気付く前から、わたしたちに目を留めておられるお方であり、わたしたちが声をかける前に、ご自分の方からわたしたちに呼びかけてくださるお方だということを教えられます。

さらに、重要なことは「もう泣かなくてもよい」というこの主イエスの言葉の意味です。これは単なる慰めのための言葉ではありません。主イエスはその言葉が真実であることを示すために、14節で自ら近づいて行って棺に手を触れ、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と、お命じになられま

した。すると15節にあるように死んでいた息子は生き返ったのです。まさに主イエスは絶望の中にあつたこの母親から涙をぬぐいさり、泣かなくてもよいようにしてくださったのです。

ヨハネ黙示録21章4節では、終末において神はわたしたちの「目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる」と約束されています。しかし、本日の箇所は、主イエスの御言葉によるこの奇蹟を通して、その終末的な救いの出来事が今ここで起つたのだと教えているのです。

〈命を治める神と共に〉

この主イエスの素晴らしい奇蹟を目の当たりにした人々は、16節にあるように、神を賛美しつつ、「大預言者が我々の間に現れた」と言いました。旧約聖書の列王記上17章には預言者エリヤがある婦人の息子を生き返らせた出来事が、また、列王記下4章には預言者エリシャがある婦人の一人息子を生き返らせた出来事が記されています。しかし16節は、今ここで奇蹟をなされた主イエスは、その旧約の預言者以上のお方であるということを教えています。まさに主イエスにおいて申命記18章15節以下にある神の約束が成就したのです。

さらに、人々はここで「神はその民を心にかけてくださった」（原文では「神はその民の許を訪れた」）と言いました。主イエスの御言葉のお働きを通して、人々は確かに神ご自身が自分たちの所に来てくださり、自分たちを顧みてくださったことを確信したのです。だからこそ、17節にあるように、人々はこの素晴らしい出来事をユダヤ全土に宣べ伝えていったのです。

御言葉を通して、神はいつもわたしたちと共におられます。そして、神はその御手を持ってわたしたちの命を守ってくださるお方なのです。

(弓矢健児)

カテキズム 子どもカテキズム問14

子どもカテキズム

問14 運が悪いと言ったり、占いを気にしたり、たたりを気にすることはできますか。

答 私たちにはできません。

神さまより大きく強いものはないからです。父なる神さまは私たちを愛してくださるのです。ですから、たとえひとりぼっちでいてもこわくはありません。

そんなとき、私たちは、「天のお父さま」とお名前をお呼びします。

お祈りすると、神さまがいっしょにいてくださることがわかるのです。

証聖句 出エジプト20:3、申命記13:2-6、17:3-5、18:9-14、イザヤ44:24-25、

エレミヤ29:8-9と11、ダニエル2:27-28、ヨハネ9:2-3、ローマ8:38

参考教理問答 『ジュネーヴ』28-29、『ハイデルベルク』94-95、『ウ大教理』105

参考図書 カルヴァン「占星術への警告」(岩波文庫『カルヴァン小論集』所収)

1. 神の御業としての自然現象

神は人の心に「永遠を思う心」(コヘレト3:11)をお与えになりました。ですから、「神について知りうる事柄」(ローマ2:19)は、人間にもある程度わかるのです。人の一生が理解し難い何か不思議な力によって導かれ左右されることを人々が感じるのは、そのためです。

聖書は、そのような現象そのものを否定することはありません。律法も預言者も持たない東方の占星学者たちを、神が星の運行によって救い主のもとへと導かれたとおりにす(マタイ2:1-12)。問題は、そのような不思議な現象を通して私たちがいっそう神を知り、正しく崇めるかどうかなのです(ローマ2:21)。

2. 生けるまことの神のみを信頼する

本問は、問13の消極的側面です。

唯一まことの神の摂理信仰を持たない場合、あるいは信仰者でさえも神に対する信頼が揺らぐ時、人は見えない未来に不安を抱き心の拠り所を他に求めようとするものです(ハイデル95)。聖書が諸々の占いや呪術等を厳しく禁じている理由が、ここにあります。

「運命」や「たたり」を恐れたり、「占い」を始め開運のためと称するあらゆるものにお金を注ぎ込んでも、何一つ根本的な解決を与えてはくれません。なぜなら、「運命」も「たたり」も「悪魔」でさえも、すべては全知全能の神の御支配のもとにあるからです(ジュネーヴ28-29)。「神さまより大きく強いもの」など何もありません。

3. 神の愛の御手を信じる

大切なことは、この無限に大きく強い神様が私たちの父であられ、私たちを愛してくださるお方だということを知ることです。この神様は、全宇宙と共に私たちをもお造りになりました(イザヤ44:24)。いいえ、私たちのためにこそ全宇宙を造られたのです。それだけではありません。神様は、御自分の御子をさえ惜しまずにくださったお方です(ローマ8:32)。この神様の愛から私たちを引き離すことは何ものにも許されていないのです(ローマ8:38)。

神様の心は私たちの心よりも大きく、すべてを御存知です(ヨハネ1:3:20)。「将来と希望を与える」(エレ29:11)神様の愛の御手に、安心してすべてをお委ねいたしましょう。(吉田 隆)

テキスト ルカによる福音書7章11～17節
 カテキズム 子どもカテキズム問14

〔単元のねらい〕

問14は、日本人のためのカテキズムであれば、どうしても必要と考え挿入した。契約の子でなかった者は、この考え、空気のなかに縛り付けられて生きてきた。地域の子らもまた、同じである。テキストは、死という冷酷な現実の前になすすべもなく泣き、諦める以外にない我々の現実と、そこに立ちはだかって下さる主イエスを示す。先回に引き続き、摂理の信仰は、主キリストへの信仰と交わりによって与えられ養われることを心して、この教えを語りたい。

「もう泣かなくてもよい！」

皆のなかには、自分の星座を知っているお友達もいるでしょう。どうして知っているのでしょうか？ たぶん「星占い」を見たり読んだりしたことがあるからではないですか。マンガの本の中には、たいてい占いのコーナーがあります。朝のテレビ番組でも、今日の運勢とか言って、占いのコーナーがあったりするのを観た事があります。「今週のラッキーカラーは〇〇色です。」とか、「今日のラッキーアイテムは〇〇です。」とか言います。「今日は運勢が悪いからあまり出歩かないようにしましょう」とか、「今日は運が良いから新しいことを始めましょう」とか占い師の人はいい加減なこと、嘘を言います。

どうして大勢の人達が占いとかたたりとかを気にするのでしょうか。それは、僕たち私たちのように真の神さまのことを知らないからです。天と地をお造りになられ、今この時も世界と宇宙をお守りくださっている本当の神さま、イエスさまのことを知らないからです。知らない人は、怖がって生きるしかないのです。怖がって生きる人は、神さまや隣人、自分自身にも罪を犯してしまいます。

先ず最初に言います。占いなんか気にしてはいけません。人間が人間の将来を言い当てたり、手相を見て、昔こんなことがあったでしょうなんて

当てられるはずはありません。死んだ人のたたりとか、先祖のたたりとか、前世（自分が生まれる前）の因縁（以前に行なった悪い行いによってこの世の生が影響されている）だとかは、ありません。全部いいかげんです。聖書はそんなことを認めていません。

今日の暗唱聖句をもう一度読みましょう。「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。」つまり、「運が悪い」とか「これからますます不幸になって行くだろう」とか考えなくても良いのです。考えてはならないのです。神さまはイエスさまを信じる僕たち私たちを祝福しようとすべてのことを準備しておられるからです。神さまは僕たち私たちが幸せに、利益になるようにきちんと考え抜いておられるからです。

それならどうしてそのことが分かるのでしょうか。それは、イエスさまが僕たち私たちといつもいっしょにいてくださるからです。それなら、イエスさまがいつもいっしょにいてくださる人はどうして祝福ばかりされるのでしょうか。運がよいのでしょうか。すばらしいこと恵みと慈しみばかりが追いかけてくるのでしょうか。

今日の聖書のお話です。イエスさまがナインという町に行かれたときのことで。ちょうど、あ

る母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出される
ところに通りかかりました。そのお母さんには夫が
いませんでした。ですから貧しかったのです。で
も、たった一人の息子がいました。この子だけが
身寄りです。そして、きっと大人になったら自分
を助けてくれるだろう、それまでは何としても立
派に育てなければ、そんな風に考えていました。
ところが、病気になってしまいました。どんどん
悪くなるばかりでした。お金があれば、お医者さん
に診せることもできたかもしれせん。けれど
も、無理な相談でした。だから、一生懸命お祈り
しました。ところが、良くなることなく、遂に
死んでしまったのです。

この時のお母さんの悲しみがどれほど深かった
か、どれほど大きな悲しみであったか、胸が張り
裂け、もう叫ぶように泣くしかなかったのです。
そしてイエスさまは、内蔵も張り裂けるような思
いで、じっとその光景を御覧になっておられました。

先生なら、ただお祈りするしかありません。本
当にかわいそうにと一緒に涙を流すしかないと思
います。ところが、イエスさまは、おっしゃいま
した。「もう泣かなくともよい」どうして泣く必
要がないのでしょうか。イエスさまは、こうおっ
しゃってから、お墓に行つて死体を埋めようとす
る行進を止められました。そして、棺に手をおい
て言いました。「若者よ、あなたに言う。起きな

さい。」すると、どうでしょう。死人は起き上が
つてしゃべり始めました。

イエスさま御自身、僕たち私たちのために十字
架に死んで下さいました。そして三日目に復活さ
れました。ですからイエスさまは、死人をよみが
えらせることができになるのです。それは、僕
たち私たちに一番悲しい事、辛いことが起こつ
ても、涙を流すだけで、終りにさせられることが
ないということです。ですから、僕たち私たちが
「もうおしまいだ」というようなこれ以上にな
い悲しみと絶望を感じる時にも、それを祝福に変
えることができになるのです。そのことを本当
に信じさせるために、イエスさまはナインの町
のこのお母さんに奇跡を起こしてくださいました。
今、確かに、死んだ人が誰もこういうように甦
ったりしません。けれども、天のお父さまが定め
てくださったイエスさまの再臨の日には、この息
子のように僕たち私たちも復活します。そのこと
が保障されています。約束されています。

こんなすごい事を起こして下さる神さまです
から、僕たち私たちは、どんなにその時には悲
しく苦しく嫌な事が起こつたとしても、自分達を祝
福されている子ども、神さまから愛されている子
どもと信じないわけにはいきません。そんな僕
たち私たちが、占いを気にしてびくびくするこ
とができますか。 (相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 8章28節

神を愛する者たち、つまり、御計画に従つて召された者たちには、
万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。

〈主題〉

ただしい神さまのお導き

〈ねらい〉

どんな時にも神さまにお祈りしつつ、将来に確かな望みをもつように勧める。

〈展開例〉

みなさんは、将来、どんな人になりたいですか。偉い人になりたいですか。パイロットや、看護婦さんになりたいですか。そのためには、今からいろんな勉強をしたり、お手伝いをしたり、お友達と仲良くあそんだりしなくてはいけませんね。イエスさまは、小さいころからヨセフさんやマリヤさんの言うことをよく聞いて、お手伝いをよくしました。大工さんの子どもとしてみんなに知られていました。でも、聖書には、イエスさまが一番学んだことは、「にんたい」って書いてあります。

たくさんいろんなことを学んだようで、結局は、「にんたい」を学んだ、って言うんです。「にんたい」とは、ガマンって言うことですが、これはヤセガマンではなくて、人のために尽くす、ということ。また、人の将来のために最も良いことをすることです。そのためには、神さまのことを良く知って、周りの人たちをこころから愛することが大切です。皆さんは、ただしいことのためにガマンしたことがありますか。イエスさまがただしさを貫いて、十字架にかけられました。その「ニンタイ」をこれからを学んでいきましょう。

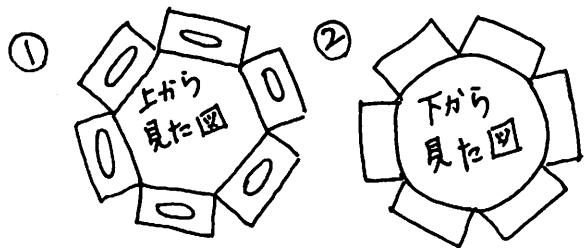
〈お祈り〉

天の父なる神さま。今、にんたいするを教えてください。どうか、こころからお友達を愛し、お互いに、将来のことに希望を持つことができますように。どうといイエスさまのお名前によって、お祈りします。アーメン。

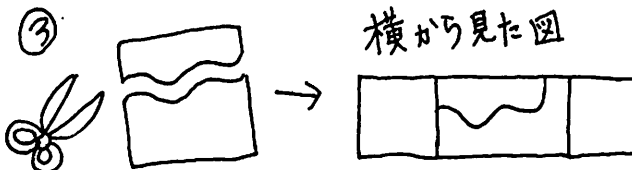
〈やってみよう〉

～大きなケーキを作ろう～

- ①ティッシュペーパーの空き箱6個を裏面でつなぐ。
(取り出し口が表側となるように)
- ②①を円形に切った厚紙にしっかりと貼る。



- ③色紙をクリームのように切って、ティッシュの取り出し口を隠すように貼る。



- ④同じように、2段目(空き箱4個)、3段目(空き箱2個)を重ねて、一番上に、プリンや空きカップなどをのせて貼り、全体を色紙やシールなどで飾り付けをする。

※ケーキの中に、プレゼントを入れておくと面白い。

〈ねらい〉

先週の摂理の積極的面を前提にして、困難の中でも、神の摂理の御手に頼ることを知る。

〈分級教師へのアドバイス〉

今回は、特に聖書箇所をもとにして、人間の死の苦しみについて考えるように展開しています。子どもたちが死について理解が難しいと思われる時、また逆に近親者の死を経験したばかりの時等、カテキズムを中心に、占いについての理解を求めてもよいと思われます。

現代の子どもたちは、一方で無神論的、現世主義的教育を受けており、その一方で、オカルトや迷信にどっぷりとつかっています。よい意味で霊的な視点を持ちつつ、正しく神様に委ねることができるようにするのは、一朝一夕ではありません。教会学校教師の日頃の言動が問われるでしょう。

〈展開例〉

①みんなは、おじいちゃんおばあちゃんがいますか？

（回答例）

- ・いる
- ・いない

②おじいちゃんおばあちゃんがいる人もいるけれど、もう亡くなってしまった人もいますね。ひいおじいちゃんひいおばあちゃんがいる人はいますか？

- ・いる
- ・いない

③先生はもうおじいちゃんもおばあちゃんも亡く

なっていました。家族や知った人が亡くなった人もいます。

④年をとって亡くなる人もいますが、子どものうちに死んでしまう人もいますね。

先生のお友だちは、小学校5年生の時に病気で死んでしまいました。先生はとても悲しかったけれども、友だちのお父さんお母さんをもっと悲しかったと思うよ。

⑤みんなも、悲しかったり、辛かったりすることがあるよね。そんな時に神様に祈りしてる？

⑥お祈りしても悲しい出来事がなくならず、苦しいままだったりするかもしれないけれど、でも、そんな時もお祈りすることを止めないでください。

⑦今はみんな難しくわからないかもしれないけれど、苦しい時も辛い時もどんな時もお祈りすることを諦めたりしないで、神様にお願いしていれば、必ず神様は私たちを助けてくださいます。だから、先生と約束して、どんな時にも神様にお祈りしてください。これは本当のことです。

〈祈り〉

天のお父様。私たちは、いつでも神様に守っていただいていることを感謝します。私たちには時には辛いこと悲しいことがあります。そんな時もどうか神様にお祈りしますから、神様が私たちに慰めてください。主イエス様のお名前によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①神様は、摂理の神であられ、人を生かし、導いておられることを覚え、②偶然・運命・占い・あたりなどを恐れなくてよいことを自覚する。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「今までに、神様が守ってくださったことを感じたことがありますか。それは、どんな時でしたか。」

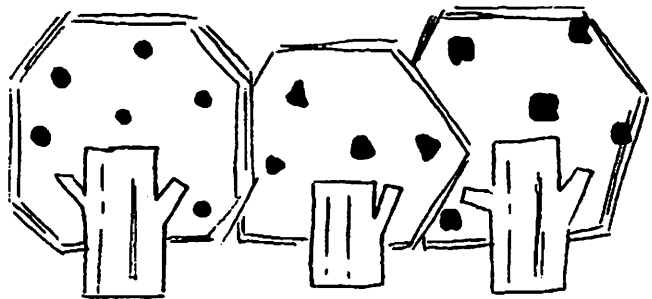
2. 神様は、私たちひとりひとりを完全に守ることが出来るお方です。ですから、生活のすべてのことは、神様のみ手の中にあります。神様の力が届かなくて、偶然や運命のようなもの

のが、あなたを支配することはありません。

3. 神様を知らない人たちは、占いを信じたり、あたりをおそれたりしますが、神様を信じている私たちは、神様に守られているので、そのようなものを怖がったり、恐れたりしなくてもよいのです。

〈折り〉

神様、いつも一緒にいてくださって、ありがとうございます。どうぞ、人びとが、ほんとうの神様を知って、運命や占いやたりの間違いに気づくようにしてください。私たちが、運命や占いやたりを恐がったりすることがないように、いつも正しい信仰にお導きください。



〈聖書をさらに深く〉

1. イエスさまが死者をよみがえらせる出来事が、福音書の中に三回出てきます。思い出せるでしょうか。一つは、会堂長ヤイロの娘をよみがえらせる出来事(マタイ9:18～、マルコ5:21～、ルカ8:40～)、もう一つは、マルタとマリアの兄弟ラザロをよみがえらせる出来事(ヨハネ11:38～)、そして、このナインのやもめの一人息子の出来事です。どの奇跡においても、イエスさまは言葉を語りかけ、その言葉の力によって、まるで眠っている人を起こすかのようによみがえらせます。イエスさまの言葉には、死の力をも打ち破る命の力があるのです。

〈教理を響かせるために〉

1. ナインの出来事において、母親は、夫に先立たれ、そして一人息子にも先立たれます。不幸な出来事が続くと、ばちが当たったのだとか、悪い霊にたたられているというふうに見える人たちがいますが、私たちはそのようには考えません。すべてのことは、愛なる神様の御手の中にあります。そして、その神様の愛は、イエスさまを通して私たちに与えられています。イエスさまは、死んだ一人息子の棺に触れられましたが、死者に触れるということは忌み嫌われた行為でした。しかし、イエスさまは、あえて棺に触られたのです。それは、私たちが、イエスさまを通して、ただ神様の愛に触れていることができるようになるためでした。
2. 何か悪いことが続けて起こったりして、不安になったり、心配している人はいないでしょうか。共に話し合いながら、神様の愛の摂理を信じてお祈りしましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

30日(月曜日)

ローマの信徒への手紙11章1～10節

Q. 命をねらわれ、私だけが残ったと訴えたと預言者は誰？

31日(火曜日)

ローマの信徒への手紙11章11～36節

Q. 異邦人は野生の何にたとえられる？

1日(水曜日)

ローマの信徒への手紙12章1～8節

Q. 私たちはそれぞれ異なった何を持っている？

2日(木曜日)

ローマの信徒への手紙12章9～21節

Q. 迫害する者のために何をすべき？

3日(金曜日)

ローマの信徒への手紙13章1～7節

Q. 上に立つ権威にはどうすべき？

5日(土曜日)

ローマの信徒への手紙13章8～14節

Q. 律法を全うするのは何？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト 創世記2章6～25節

(1) 土の塵による創造

神様は「土の塵で人を形づくられた」と記しています。土で形づくられたということだけを見ますと、その形が作られただけのようにも感じます。しかし、ただ形がそこで与えられたというわけではありません。19節に獣やあらゆる鳥を土で形づくられたとあるのは、神様がそれらのものを生き物として創られたということなのです。それと同様に、神様は土の塵から人という生き物を創られたのです。

(2) 命の息を吹き込まれる

他の動物と同じように土の塵で人間は形づくられたのですが、人間には他の動物たちとは決定的に違う点があります。それは「命の息を吹き入れられた」ということです。この命の息を吹き込まれて、人は他の動物とは全く違う、生きる者となったのです。ただ動き回る動物のようなものではなく、人間らしく生きる人間とされたのです。

この人間らしく生きる人間とは、神にかたどって創られた被造物であるということです。人は体を持つ点では神様と決定的に異なりますが、霊的、人格的存在であるという点においては神様と共通する者として創られているのです。言い換えれば、神様との人格的な交わりを持つことのできる存在として創られているということなのです。

神様との人格的な交わりは、神様を礼拝することにおいてなされます。人は神様のかたちを持ち神様を礼拝することを本分として生きる者として最初から創られていたのです。

神様は創造の冠として人間をこれほどまでに特別に、他の動物とは違う存在として、お創り下さったのです。人間は神様に特別なもの、他の被造物とは全く違うすばらしいかたちを与えられて創られたのです。

(3) エデンの園と中央にある二つの木

神様は御自身が特に人のために設けて下さった

エデンの園に人を置かれました。エデンの園は神様の恵みに満ちた場所で、良く潤っていて美しい木々の生い茂る、人間にとって何の不足もない場所として描かれています。人はそこを守り耕すという労働の勤めを、神様から与えられました。人にとって労働もまた純粋な喜びだったのです。

園にあるどの木から取って食べても良いが、園の中央にある命の木と善悪の知識の木からは取って食べることを禁止し、食べると必ず死ぬとの非常に強い口調の禁止を与えられました。

これはあの二つの木に何か特別な力があるということではなく、人が神様の言葉に従うかどうかの純粋な信仰のテストだったのです。造り主の御言によって生かされる被造物にとって、神様の御言に従うことは命の祝福の大前提となるのです。そして、その御言に従ったなら、人は最高度の命の祝福に入れたはずなのです。

(4) 女の創造

人は一人で生きるのではなく、他者との交わりにおいて共同の生を営むことは、創造の秩序における神様の御心なのです。また、人間が一人で生きるのではなく複数で人格的交わりをもって生きることは、神のかたちを持つ人間にとって当然のことなのです。ですから、人には特に彼に相応しい助け手が必要なのです。この助け手とは言い換えればパートナーということです。パートナーであるということは、人格的な交わりを持てる、互いに対等な存在であるということなのです。

他の動物はそのような存在とはなり得ませんでした。そこで神様は人を深い眠りにつかせられ、彼のあばら骨の一部を取り、女を創られたのです。

眠りから覚めた人が女を見たとき、彼は「これこそわたしの骨の骨、肉の肉」と言いました。それはまさに、彼と一心同体の彼にピッタリ合った助け手を見出した喜びの叫びだったのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問15

子どもカテキズム

問15 神さまは人間をどのように創造されましたか。

答 神さまは、人間を神さまのかたちに似せて、男の人と女の人として造られました。

土のちりから造り、神さまのいのちを吹き入れてくださいました。

こうして、人間はただの動物ではなく、神さまとの交わりを持つものとされました。

ですから、人間にとって生きるとは、神さまを礼拝すること、お友だちを愛することです。

証拠聖句 創世記1:26-28、2:7、コロサイ3:10、エフェソ4:24

参考教理問答 『ジュネーヴ』1-7、『ハイデルベルク』6、『ウ告白』4:2、

『ウ大教理』17、『ウ小教理』10

1. 人間の創造

問12の天地創造の教理から離れているため、その関連性が見えにくくなっていますが、創世記1章の天地創造物語は人間の創造をその頂点としています。逆に言えば、天地創造はすべて人間を創造するための環境作りに過ぎない、ということです。造られたすべてのものが「極めて良かった」と言われるのは、その意味でもあります。神は私たち人間をそれほど愛すべき存在として創造されたのです。

天地創造との関連性を理解することはまた、被造世界と人間との一体性や被造世界に対する人間の使命(創世記1:28)を理解する上でも重要です。

2. 神のかたち

人は「神にかたどって」(創世記1:27) 創造されました。それは、顔やかたちが似ているということではなく、神の知恵・正しさ・聖さ、別に言えば、神の心を持つ者としてという意味です。この神との緊密さは、神の命の息(霊)を吹き入れられるという創造記事(創世記2:7)に一層よく表現されています。だからこそ、人間は神なしで生きて行けないのです。

この“神のかたち”は、男と女とに与えられました(創世記1:27)。男だけでは「良くない」(創世記2:18)、つまり不完全だからです。“神のか

たち”は、男と女と共同で担い互いに助け合う関係があって初めて完全なものとなるのです。

さらに、“神のかたち”は生まれくるすべての人間に刻み込まれた魂のかたちでもあります。たとい生まれながらに障害(しょうがい)があろうと奇形で生まれようと、“神のかたち”は存在するのです。ここに、すべての人間が神の目に尊い(イザヤ43:1,4,7)との教えの根拠があります。

3. 人間にとって生きるとは

以上のことから、私たち人間の存在が、初めから神と人との交わりに規定されていることがお分かりでしょう。命の源である神との豊かな交わり、それを聖書は「命」と呼びます。ただ心臓が動いていれば「生きている」のではなく、創られた目的にしたがって、創ってくださった方と共に歩んでいる時、人は「生きている」のです。

神を愛し隣人を愛すること、これら二つの愛に生きることが、人間にとって真実に「生きる」ことの証しです。しかし、それはたんなる使命という以上に、何よりも神がお与えくださった「最上の幸福」(ジュネーヴ1-7、ハイデル6参照)であることを覚えましょう。

真の人間性の回復とは、この喜びの回復でもあるのです。(吉田 隆)

テキスト 創世記2章6～25節
カテキズム 子どもカテキズム問15

〔単元のねらい〕

人間とは何かを、子どもたちに考えさせたい。子どもたちも、学校で人間とは何かを考える契機を与えられている。しかし、私共は、神からの問いとして、人間とは何か。自分とは何かを問わせたい。そのためには、聖書の人間理解を知らせることが基礎である。ここでは、三一の神の学びを思い起こしつつ、礼拝する者、お互いを愛する者として造られた人間であることを教え、信仰者として生きることが人間として当然の姿であることを教えたい。

「神さまが息を吹き込んでくださったから」

皆の中には、学校で、人間とは、猿が進化してこうなった、人間になったというお話を聞いたことがあるかもしれません。本当にそうでしょうか。先生はそう思いません。猿はどんなにがんばっても猿のままです。どんなに時間をかけても人間にはなりません。そのような事を言う学者さんが大勢います。でも、それを信じない学者さんも大勢います。

人間はどうして人間になったのか。人間って何か。猿や動物とどこが同じでどこが違うのか。そんなことを皆はこれから学校で勉強するはずですが、でも、それを考える時に忘れてはならないとても大切なことがあります。「人間のことは人間が一番分かっている」とは言えないということです。人間は、神さまによってつくられました。ですから人間の事は神さまにお聞きすること、教えてもらう事が必要であって、一番大切なのです。

人間は神さまのかたちに似せて造られたものです。神さまのかたちに似せて造られたものは、人間だけです。だから、人間はすべての生き物とまったく違います。比べられないほど尊いのです。そして、能力もあるのです。けれども、その尊さは、人間が他の動物より偉いものだから、動物をいじめたり、軽く扱ったりできるということではありません。その反対です。神さまが人間のために、すばらしい世界を与えて楽しませてくださったよ

うに、今度は人間が動物に接してあげることが僕たち私たちの責任なのです。

人間は、神さまのかたちに似せて造られたとき、男の人と女の人としてつくられました。これは、神さまが男の神さま、女の神さまがいるということではありません。問10で学んだことを思い出してください。神さまは愛の交わりをもっておられます。御父と御子と聖なる御神の交わりです。愛の交わりです。命の交わりです。だから、この愛があふれて人間をお造りになって、神さまの愛を味わわせてくださる者として僕たち私たち人間は造られたのです。だから、神さまに愛されていない人間は一人もいません。僕たち私たちは、神さまに愛されるために生まれてきたのです。だから、この神さまを僕たち私たちは心から愛します。お友達を愛します。この神さまがおられることをお友達に教えてあげます。

人間はどのようにして造られたのか、それは、「土」からだと聖書は教えてくれます。最近、人間の体の細胞の核にある物質は、土の物質と同じものだということが新聞に書いてありました。難しいお話ですが、学者の先生が発見したのだそうです。土の成分から造られた人間の体は、それだけだと他の動物と同じです。死んだら土のチリにもどってしまいます。それだけでは、人間は

人間になれません。人間は神のかたち似せてつくられて、鼻から神さまの命の息が吹き入れられました。僕たち私たちは、息をするから生きています。息をしない人は死んでいる人です。でも、息をしても死んでいる人もいます。どんな人でしょうか。それは、神さまの息を受けていない人のことです。神さまの命の息を受けていない人のことです。最初の人、その鼻に神さまが命の息を吹き入れてくださって人間になりました。人間として生きることができました。神さまの息を受けていないという人は、神さまとの関係では、死んでいるのです。「霊的な死」って言うのです。

それなら、僕たち私たちは生きていますか、それとも死んでいるのですか。どうしたら生きて人間になれるのですか。僕たち私たちは、日曜日ここに集って来ます。丁寧に正しく言うと神さまに呼ばれてここに集められて来ます。何をするためでしょうか。神さまを礼拝するためですね。神さまを礼拝するということは、神さまのほうに僕たち私たちの顔を向けるという事です。それは、先ず、神さまの方がいつも、教会堂にいるときだけではなく、神さまは僕たち私たちの方を向いてくださっています。神さまはそうにしてお守りくださっているのです。そして、日曜日には特別に神さまは僕たち私たちをここに呼び集めてく

ださって、息を吹き入れてくださるのです。聖霊なる神さまが僕たち私たちの心の中に新しく宿ってください、満たしてくださるのです。それが礼拝式の恵みです。僕たち私たちは、今ここで本当の人間らしさを取り戻しているのです。ただ動物の命だけ、肉体の命だけではなく、人間だけが受けることができる神さまの命、神さまとの交わりを与えていただいているのです。

人間だけが祈りすることができます。神さまとお話しすることが出来ます。神さまのお声を聴く事が出来ます。今、この教会で僕たち私たちは、神さまとの命の交わり、神さまとの命の関係を与えていただいている真っ最中です。

神さまは愛に満ち溢れています。神さまは愛で満ち満ちています。そんな神さまの子どもの僕たち私たちは、お互いに仲良くしたくなります。喧嘩すると心が痛くなります。神さまが心に住んでいてくださるから、仲良くしたい、お友達も家族も、周りの皆に優しくしてあげたいと思うのです。それがだんだんとできるようになるためには、もっともっと、礼拝する必要があります。毎週、休まずに教会に通って下さい。そして家に帰ってからも、明日からも、イエスさまのこと、神さまを忘れないでお祈りしましょう。(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] 創世記2章7節

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、
その鼻に命の息を吹き入れられた。
人はこうして生きる者となった。

〈主題〉

人を生かされる神様

〈ねらい〉

神さまに生かされているというとても大切な真実を伝える。

〈展開例〉

みなさんは、町中で、かわいい動物のキグルミを見たことがありますか。そとから見ると、動物ですが、その中身はなんでしょう。そうですね。「にんげん」ですね。中には人間が入っていて、動物を演じているんですね。それでは、人間の「しょうたい」は何でしょうか。人間の中には何があるのでしょうか。そう、人間の中には、ほかの動物にはない、心やたましいがありますね。人間は上を向いて歩けるだけではなくて、その心で、神さまのことを思うことができます。ですから、人間に

とって、もっとも自然な姿は、神さまにお祈りすることですね。サルも、イヌも、ライオンも、お祈りしませんが、人間だけが、神さまにお祈りするんですね。イエスさまのとうといお名前によってお祈りすること。これが、神さまに造られた人間にとって、最も大切なことです。パウロさんはこの土の器の中に、宝がある、と言いました。そう、この宝こそ、イエスさまの恵み、福音です。その宝をささげて、お祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。土の器の中に、イエスさまの宝を与えてくださり、ありがとうございます。どうか、この宝を、みんなにささげて、人間が人間らしく、神さまのご栄光のために生きることができるようにお導きください。イエスさまのとうといお名前によって、お祈りいたします。アーメン。

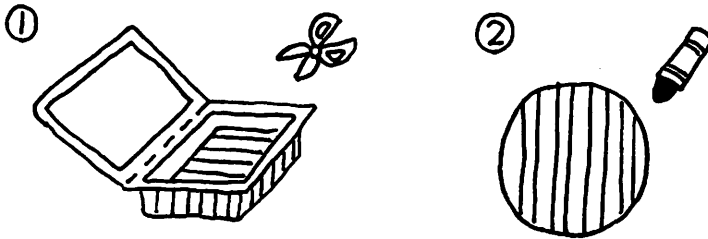
〈やってみよう〉

～楽しいおやつ時間ですよ～

①納豆の白色トレイの底をまあるく切り取る。

②クレヨンで色をつけたら、ポテトチップのできあがり！

※形を変えて、ビスケットにしたり、いろいろなお菓子を作ってみよう。



〈ねらい〉

私たちが神様によって造られ、命を与えられているものであることを知る。

〈分級教師へのアドバイス〉

未信者の家庭や学校では、当然のように進化論を真理として教育されています。少しも疑わずに信じていることを否定的に指摘するのは、慎重に行わなければ、単に反発を受けるだけです。また、中途半端な科学的反論は、聖書の真理性を損なうことになります。神様による人間の創造が、人間の存在にとっていかに慰め深いものであるかを積極的に示すことが大切です。

〈展開例〉

①みんなは、誰から生まれてきたの？

(回答例)

・おkaaさん

②みんなはお父さんお母さんから生まれたから、お父さんやお母さんによく似ているし、お父さんやお母さんに大切に愛してもらえていますね。

③今日の聖書の箇所には、私たち人間が神様によって造られたことが書いてありましたね。みんなも神様に造っていただいたんですよ。

④じゃあ、みんなは神様にどこが似ていると思う

・顔

・格好

⑤残念でした。神様は目に見えない方だから、顔とか、体とかはありません。私たちが神様に似ているのは、誰かのことを大切に愛することができるかどうか、神様のことを考えたり、こうやって礼拝したりすることができるかどうか、そんなところが神様から特別にいただいた、神様に似ているところです。

⑥それから、みんなのお父さんやお母さんがみんなのことを愛して大切にしてくださるように、神様もみんなのことを本当に心から愛して大切にしてくださっているんですよ。みんなは神様のこと好きですか？

・好き

・嫌い

⑦あれ？ 大切な神様のことを嫌いなんて言う人がいるね。変だなあ。

神様はみんなのことを大切に愛してくださっていますし、私たちも私たちのことを造って、愛してくださる神様を愛して大切にしなければいけませんね。

〈祈り〉

天のお父様。私たちが、あなたから特別に造っていただいて、特別に愛していただいていることを感謝します。神様どうか私たちが神様に感謝して神様を愛することができるようにしてください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①人間は、神様によって創造されたことを覚え、②神様の息を吹き込まれているので、神様と人格的に交わることができることを覚える。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）
「神様に創られている私たちの心や体について、考えてみよう。」
たとえば、物を見ることが出来る目、聴くことが出来る耳、話すことが出来る口、歩くことが出来る足、神様を賛美したり喜ぶことの出来る心など。
2. 人間は、神様によって創られました。動物が進化を繰り返して、人間になったものではありません。
3. 最初の人、アダムとエバでした。二人とも、

神様の息を吹き込まれたので、人はだれでも、神様の言葉を聞くことができ、神様にお祈りすることができ、神様を賛美することができます。

4. 人間は、神様によって創られ、生かされているので、ほんとうの神様との正しい関係をもつときに、ほんとうに幸せになれるのです。

〈祈り〉

神様、私たちが創り、生かして下さって、ありがとうございます。どうぞ、あなたからいただいた耳で、もっと聖書の御言葉を聴くことができますように、あなたからいただいた目で、もっとあなたが創られた自然の美しさを見ることができますように、あなたからいただいた口で、もっとあなたを賛美したり、お祈りすることが出来るようにしてください。



〈聖書をさらに深く〉

1. 第1章から、人間の創造について振り返っておきましょう。人間は第何日目に造られたでしょう。第六日目です。天と地にあらゆるものが造られて、いわば生きるための舞台がすべて整ったところで、神様は人間を造られたのです。神様は、私たちが生きていくために必要なすべてのものを備えてくださるお方です。私たちはいつも、あれが足りない、これが足りない、不満を抱えて生きていないでしょうか。創造の場面を読みながら、神様の恵みをあらためて覚えましょう。
2. そして、神様は人間を、特別な存在として造られました。そのことは、人間が神にかたどって(神のかたち)に造られたこと、また、人間に命の息を吹き入れられたことによって示されています。確かに、人間はこの最初の状態から堕落することになりました。しかし、キリストを信じるとき、聖霊というキリストの息を新たに吹きかけられる(ヨハネ20:22)ということを確認しましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 子どもは親に似るものですが、人間は神様に似ています。ただし、それは、顔や体つきが似ているわけではありません。小教理の言葉では、知識、義、聖という目に見えない性質において神様に似ているのです。そして、大切なことは、人間がそのように神様のかたちに造られたということは、人間は神様を愛し、礼拝することができるということです。そのような心のかたちが自分の中に形作られているでしょうか。
2. 人間は、男の人と女の人に造られました。異性との関係も、神様の御心に従って考えてみましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

6日(月曜日)

ローマの信徒への手紙14章1～12節

Q. 生きるにしても、死ぬにしても、私たちは誰のもの？

7日(火曜日)

ローマの信徒への手紙14章13～23節

Q. 神の国とは、飲み食いではなく、何？

8日(水曜日)

ローマの信徒への手紙15章1～13節

Q. 強い者はどうすべき？ どうすべきでない？

9日(木曜日)

ローマの信徒への手紙15章14～21節

Q. パウロはどこからどこまで巡ってキリストの福音を伝えた？

10日(金曜日)

ローマの信徒への手紙15章22～33節

Q. パウロはローマを経てどこへ向かう？

11日(土曜日)

ローマの信徒への手紙16章1～17節

Q. 命がけてパウロの命を守った協力者は誰？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト 創世記3章1～7節

(1) 神の言葉を正しく聴く

神様はエデンの園に人を置かれ、何不自由ない完全な祝福の内においておられました。そのエデンで営まれる生において一つだけ神様は命令を与えられました。それは、園の中央にある命の木と善悪の知識の木の実を取って食べてはいけないとの命令でした。そして、その命令と共に、この命令を破れば必ず死ぬと警告なさいました。これは神様による純然たる信仰の試験であり、これを守れば最高度の命の祝福が与えられるはずだったのです。

このような命令を受けていた人間の前にサタンの使いである蛇が現れ誘惑するのです。サタンの誘惑は巧妙であり、神様の御言を巧みに利用するのです。そのことによりサタンは人に神様に対する不信感をいだかせ、御言に批判的な態度を取らせるのです。そのことによって、人に神様の御言そのものの確かさを疑わせるのです。

このところのサタンの誘惑もそのようなものでした。まず、女のところへ現れ「本当に神が言われたのですか」と問うのです。その問いに対して女はすぐに答えるのですが、神様が命じてはおられない、その木に「触れてもいけない」とおっしゃったと付け加えるのです。ここで彼女は神様の御言を曲げてしまったのです。さらに彼女は「死んではいけないから」だと神様がおっしゃったと言うのです。神様はこのところで、必ず死ぬと警告なさいましたが、彼女は神様の言葉を薄めてしまったのです。その結果サタンの誘惑に負けてしまったのです。

神様の御言を正しく蓄えず、御言を自分勝手に

薄めてしまったのでは、サタンの誘惑に勝てる神様の御言も、御言ではなくなるのです。

サタンの誘惑の巧妙さも、サタンの誘惑に対して勝利を与える神様の御言の力も、共に現代においても変わることはないのです。

(2) 人の罪の根本

サタンの誘惑の言葉は、人が御自身のようになるのをねたみ、食べさせないようにしているのだとの神様への不信感をあおるものであったのです。そして、何よりも人を魅了し動揺させたのはその実を食べると神のようになれるのだとの言葉だったのです。神のようになれるという言葉は、神々のようになれるとの意味を持つ言葉です。神そのものになれるというのではなく、神のように何でもできるものとなれるというのです。

神のようになれるとのこの言葉は人を神様から引き離すのに絶大な力を持つ言葉です。なぜなら、人間は自分を神のような絶対の存在とする志向、自分を神のような何もかも知る者にしようとする志向は、人間の持っている願望なのです。このような志向はどの時代にも関係なく、現代に生きる私たちも持っているものなのです。人のあらゆる罪の根は、神になろうとするこの根本的な志向に根ざしているのです。

この神になろうとするところに、偶像礼拝の現実があるのです。まことの神様を離れるとき、人は自分に都合のいい神々を作り出し、その神の主人として君臨しようとし、また、自分自身が神々のように人から崇められようとするからです。

(巻名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問16,17

子どもカテキズム

問16 最初の間は、極めて良いものとして続きましたか。

答 いいえ。

アダムとエバは、神さまの御言葉を破って、罪を犯しました。

問17 罪とは何ですか。

答 神さまの御言葉を破って、それに背くことです。

一つでもかなわないならば、私たちは神さまの御前に罪人です。

証契聖句 (16) 創世記2:17と3:1-7、申命記30:19-20、コヘレト7:29、ローマ5:12a,18a,19a

(17) 申命記27:26、マタイ5:18-19、マルコ10:17-27、ローマ3:20、ヨハネ3:4

参考教理問答 (16) 『ハイデルベルク』7-9、『ウ告白』6:1-2、『ウ大教理』21、『ウ小教理』12-13,15

(17) 『ハイデルベルク』62、『ウ告白』6:6、『ウ大教理』24、『ウ小教理』14

1. 人間の墮落

人が置かれた「極めて良い」状態の中には、神との自由な交わりがありました。神によって与えられた自分の意志で自由に神を愛する喜びを、人は持っていたのです。にもかかわらず、人はなぜ、そのまま留まっていられなかったのでしょうか。

聖書は、その試金石として「善悪の知識の木」(創世記2:9)が置かれたことを物語っています。善悪を知るとは、要するに、すべてを理解する神のような存在になるということです。人には知ることができないこと、知る必要のないことがたくさんあります。人の幸いは、神のように知ることよりも、むしろ神に知られていること(コリ1:8:2-3)にあったはずなのです。

ところが、人は与えられた幸せに満足せず、自分の意志で自分のための幸せを勝ち取ろうとして墮落しました。神から離れることが自由だと錯覚したのです。命からの逸脱は、死を意味していた(創世記2:17)にもかかわらず。

2. 罪とは何か

聖書は人間の罪の諸相について、実に様々な言葉を使って説明しています。罪が、一筋縄ではない、私たちに染みついたものだからでありま

しょう。時に、罪とは的外れのことだと言われます。また、自己中心やプライドが罪の本質だと言われます。いずれも正しい説明です。

しかし、肝心なことは、罪が人の基準によるのではなく、神の基準によって計られるということです。私たちの目に適っていることと神の基準は、必ずしも同じではないからです。神の基準とは、神の律法・神の御言葉のことです。

何かの犯罪を犯すことだけが「罪」なのではありません。この神の基準に対する無視・怠慢・無関心もまた罪です。ましてや、この基準に、心の中であれ実際の行いであれ、背くことは罪なのです。

3. 割引きできない罪

神の御言葉は天地が消えうせるまで「一点一画も」消え去ることはありません(マタイ5:18)。なぜなら、神の御言葉とは、神御自身の御心にほかならないからです。神が全身全霊を傾けて私たちに向き合っておられる以上、いい加減にできる事柄など何一つありません。私たちは、この神の御前に罪人なのであり、この方以外に逃れる所もないのです。(吉田 隆)

テキスト 創世記3章1～7節
 カテキズム 子どもカテキズム問16,17

(単元のねらい)

アダムとエバの墮落物語を通して、子らの罪の現実を認めさせることがねらいである。『私も神さまの御前に罪人です。』問19の告白を目指して、語りこむ。この罪の問題に集中するときこそ、子らとの個別の(膝を突き合わせての)祈りのとき、牧会するときが必要である。日曜学校が行事、目に見える働きで終る事がないように！魂の看取りなしに、神に求められ、喜ばれる奉仕の実を結ぶ事はできない。的を外さない奉仕が求められる。祈りを集めよう。

「罪ってなに？」

神さまのかたちにならされた人間は男と女とにつくられました。男の人の名前はアダム、女の人はエバです。二人は、神さまがお造りくださったエデンという場所で、それはそれは、幸せに楽しく神さまと共に暮らしていました。愛する神さまはいつもそばにいて下さいます。二人は、喧嘩などしたこともありません。愛し合っていたのです。食べるための木の実はあふれるほどありました。

そんなある日のことです。蛇がエバさんにこう言って近づいてきました。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのですか。」蛇は最初からエバさんに、神さまは、意地悪なんじゃないの？と思わせるために、「食べてはいけない」という言い方をします。「してはいけない」ということは、たった一つのこと以外は「してよい」ということです。エバさんは答えました。「園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから。」このエバさんの答えも間違っています。神さまは、「善悪の知識の木の実」を食べると、死ぬかもしれないとおっしゃったわけではありません、必ず死んでしまうのです。

悪魔である蛇は、人間を神さまから放そうと必死です。どんなことをしても神さまと人間との愛の関係を壊して、人間を悪魔の側に取り込もうと

するのです。悪魔はエバに自信たっぷりに言いました。「エバさん、決して死にません。逆に、あなたも神さまになれるのです。」そう言われると、今まで見たどの木の实より美味しそうに見えてきました。そして、「ガブッ」と食べたのです。しかも一人で食べたのではなく、アダムにも木の实を渡して一緒に食べました。

するとどうなったでしょう。自分達が裸であることが分かったのです。裸である事が嫌で、お互いを隠しあうようになってしまったのです。悪魔が言ったように目が開いたからでしょうか。違います。自分が自分であることが嫌になってしまったのです。自分が自分であることが恥ずかしくなってしまったのです。そこで、隠すようになりました。偽るようになりました。この後、あれほど愛し合っていた二人はお互いのことも恥ずかしくなって、喧嘩まで始めます。

アダムとエバさんは、何をしてしまったのでしょうか。神さまの言葉を破ったのです。それが罪です。罪を犯した人間は神さまとのよい関係、正しい関係を失ってしまいました。人間同士の関係もよい関係、正しい関係を失ってしまいました。

あるお友だちがこのように言いました。「神さまはどうして人間に罪を犯させるように造られたのですか。神さまが人間をお造りになられたのだったら、もっと良い人間に造られたら、罪なん

か犯さなかったはずで、神さまが人間を造るのに失敗したのではないですか。神さまが悪い。」この質問はよく分かります。

神さまは人間をお造りになられたとき、人間は極めて良いものでした。神さまのかたちに似せて造られたのですから当然です。神さまのかたち、神さまに似せるということは、人間をペットのように造ったではありません。ロボットのように作られたではありません。ペットの中でも犬は、ご主人の言う事をよく聞きます。でも、その関係はどこまでもペットです。ご主人が何を考えているのか、何を願っているのか、分からなくてもよいのです。分からなくても言う事を聞きます。ロボットは、コンピューターによって、こういうときにはこう行動する、こう反応するということが組み込まれています。自分で考えて行うではありません。

神さまは本当の意味での自由をお持ちです。神さまだけが本当の自由をもっておられます。人間は神さまに似せて造られたとき、この自由も与えられています。自由は自分で考え、決断して、行動すること、それができることです。神さまは人間に自由を与えて下さいました。強制的にさせられるのではなく、自由に神さまを愛し、自由に御言葉を守ることができるようにされたのです。けれども、その自由を人間は神さまに反抗するため

に使いました。だから、神さまが悪いのではありません。

神さまに顔を背けたら人間は、体は生きていても、本当の人間としては死んでいるのです。人間は人間である事をやめてしまうのです。神さまは神さまで、人間は人間です。人間は神さまに愛され、守られ、神さまを第一にして共に生きるとき本当に幸福なのです。

アダムとエバのお話は、昔のお話だけではありません。僕たち私たちも、同じように神さまの言葉を破っているのではないですか。自分が王様、自分が一番偉い、自分が正しい、自分は間違っていない、そんな考えを持ったり、したりしたことのない人は一人もいません。

必ず死ぬと言われていたアダムとエバは、すぐには死にませんでした。ここに神さまの愛があります。アダムとエバが、もう一度神さまのもとに立ち返って、神さまと正しい関係を結ぶ為に、神さまはイエスさまを十字架で犠牲にして、罪を赦して下さったのです。僕たち私たちも、イエスさまの十字架を信じている子どもとして、自分中心の心、わがままな心と戦って、イエスさまを一番として、神さまを神さまとして生きて行きましょう。
(相馬伸郎)

[今日の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙6章23節

罪が支払う報酬は死です。

しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。

〈主題〉

心を見られる神さまへの罪

〈ねらい〉

神さまはわたしたちの心を見られ、すべての罪をただしくさばかれるお方であることを伝える。

〈展開例〉

みなさんは、「万引きは犯罪です」というポスターを見たことがありますか。そう、人のものを取ったらドロボウですね。聖書には、たしい人はいない。皆、罪人です、と書いてあります。罪、犯罪に心当たりがないのに、どうして、皆、罪人なの、と思うかもしれませんね。実は、神さまは、わたしたちの心の中を全部知っておられます。ですから、たとえ、ドロボウをしたことがなくても、もっとおこずかいがほしいな、とか、あれもほしい、これもほしい、という心を神さまはいましめ

られます。ですから、ほんとうは、刑務所に入るひとだけが罪人ではなく、みんな、罪人です。神さまのさいばんにかけられなくてはいけないのです。イエスさまは、わたしたちの身代わりに、イエスさまが、神さまのさいばんにかけられて、死刑になったんです。だから、イエスさまを信じる人は、皆、神さまのさいばんから救われているんですね。これを、罪のゆるし、って言います。ほんとうに神さまの恵みですね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。イエスさまは、わたしたちの代わりに、十字架にかけられました。それは、わたしたちの代わりに、神さまにさばかれるためでした。どうか、この神さまのただしさと罪のゆるしを信じることが出来ますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

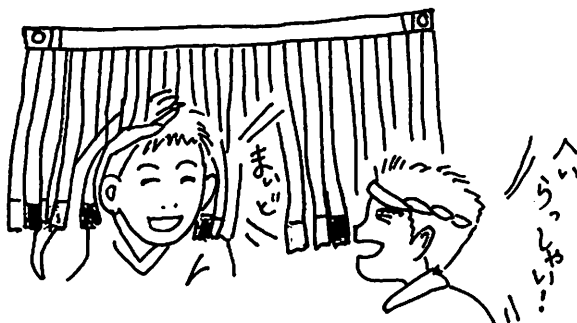
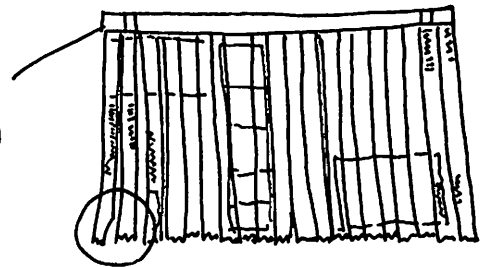
〈やってみよう〉

〜こつちですよ〜

- ①新聞紙1枚を広げて、片側にテープをはり、反対側から均等に裂く。
- ②先に、ビニールテープなどの飾りをつけておもりにする。



テープ2重
(木釘3本用)



- ③テープの両側をつるして、のれんをくぐって遊ぶ。

〈ねらい〉

アダムが墮落が、私たち人間すべてが持つ罪につながることを、私たちが皆その罪に縛られた存在であることを自覚する。

〈分級教師へのアドバイス〉

墮落した存在である私たちが誘惑に流されることと、墮落していない時点でのアダムが誘惑に負けたこととの間には、大きな違いがありますが、その違いよりも、むしろ私たちが決してアダムに責任転嫁できないこと、私たち自身が罪に汚れた存在であること、両者の罪と弱さの共通点を提示するようにしています。

〈展開例〉

①アダムとエバは、神様から「食べてはいけません」って言われていた木の実を食べてしまいましたね。それで、アダムやエバだけでなく、私たちもみんな罪人になってしまいました。

②みんなは、お父さんお母さんに、「これは絶対食べちゃダメ」って言われていたのに食べちゃったことがある？

(回答例)

- ・ある
- ・ない

③先生も昔、食べちゃダメって言われていたのに、こっそり食べちゃって怒られたことがありました。「絶対ダメ」って言われると、逆にやりたくなっちゃうんだよね。でもこれはいけないことですよね。

④神様が「してはいけない」っておっしゃっていたことをしてしまうのは、悪いことです。罪で

すね。

⑤他にも、内緒だよって言っているのにしゃべっちゃったり、宿題しなきゃダメだよって言われていたのにしなかったり、お手伝いするって約束してたのにしなかったり、みんな色んなときに色んな約束を破ってしまっているね。

⑥約束を破ったり、罪を犯したりしたら、謝らないといけないですね。悪いことをしたときに、神様にちゃんと謝っていますか？

⑦私たちの罪を神様に悔い改めて、きちんと謝るようにしましょう。

〈祈り〉

天のお父様。私たちは、神様に罪を犯す悪い者であることを、今、神様に心から悔い改めます。どうか私たちの罪を神様が赦して、贖ってくださいように心より祈ります。主イエス様の御名によってお祈りします。

〈あそぼう〉

「旗揚げゲーム」

指示に忠実に従うのはなんて難しいんでしょう！

- ・一人のリーダーが、右手左手の上げ下ろしを指示する。
「右手を挙げて」「左手を下ろして」
- ・他の人は、リーダーの指示通り手を上げ下ろしする。
- ・リーダーは段々と速く、難しい指示を出す。
「右手を挙げて左手を下げない」
- ・手だけではなく、足を挙げたり、姿勢を変えたりと指示を難しくすると楽しい。

〈ねらい〉

①罪の原因は、神様ではなく、人間にあることを覚え、②罪人の状態に墮落してしまった人間を、神様は悲しみのまなざしで、まだ愛しておられることを学ぶ。

〈展開例〉

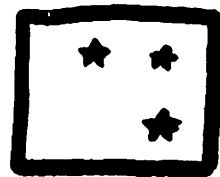
1. アイスブレイク（うち解けるための質問）
「自分に罪があることを感じたことがありますか。それは、どんな時でしたか。」
2. 神様は、人間を良いものとして創られました。人間は、神様との約束を破ってしまったので、罪人になってしまいました。人間が罪人になった原因は、人間にあります。神様は、悪くありません。

3. 罪人の状態に墮落してしまった人間を、神様は悲しみのまなざしで、まだ愛しておられます。私たちの罪を償うために、イエス様が十字架にかかって、身代わりとなって死んでくださいました。

4. イエス様の十字架の償いによって、神様は、どの人も、どんな罪も赦してくださいます。

〈祈り〉

神様、あなたに罪をおかしてしまった最初の人アダムの中から、私たちには罪がありますが、そのような私たちを見捨てることなく、愛してくださいありがとうございます。私たちの罪を償うために、イエス様が十字架にかかって、身代わりとなって死んでくださったことを感謝致します。



〈聖書をさらに深く〉

1. 誘惑は巧妙に近づいてきます。神様に背きなさいとストレートには誘惑しません。神様の命令を持ち出し、本当にそうかなあ、そうではないと思うよ、というふうに誘導していきます。サタンがイエスさまを誘惑したときも、聖書の言葉を持ち出して近づいてきました(マタイ4:1~)。誘惑に負けないためには、ただ聖書の言葉を知っているというだけでなく、その御言葉を正しく理解し、また心から信頼して従おうという心がなければなりません。
2. 墮落した人間の心には、神のようになりたいという思いがありました。そして、そのような重大な罪を、木の実をバクリと食べるというささいなことで犯しました。私たちも、何気なく簡単に、しかし重大な罪を犯しているということはないでしょうか。話し合ってみましょう。

〈教理を響かせるために〉

1. 悪いことをすると怒られますが、しかし人によって怒ったり怒らなかつたりすることもあります。善悪の判断の基準は、あいまいなときがあります。しかし、聖書が人は罪人であるというとき、それは、神様の基準によって計られてのことです。ウェストミンスター小教理では、神はアダムと命(業)の契約を結んでいたが、アダムがそれを破ったとあり、また罪とは律法に少しでもかなわないことだと言います。この意味で、すべての人は罪人なのです。
2. 人間には自由が与えられています。それは、神様との交わりの豊かさを生きるための自由でした。しかしアダムは、その自由を、神様から背くために用いてしまいました。私たちも、若い時は特に自由を求めます。しかし、その自由を本当に正しく用いているか、話し合ってみましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

13日(月曜日)

コリントの信徒への手紙一 1章1~17節

Q. この手紙を書いているのは誰？

14日(火曜日)

コリントの信徒への手紙一 1章18~31節

Q. 神は、どういう手段で信じる者を救おうとお考えになった？

15日(水曜日)

コリントの信徒への手紙一 2章1~16節

Q. パウロの言葉と宣教は、何の証明によるものだった？

16日(木曜日)

コリントの信徒への手紙一 3章1~17節

Q. パウロは植え、アポロは注いだ。それでは成長させたのは？

17日(金曜日)

コリントの信徒への手紙一 3章18~4章5節

Q. 神の秘められた計画をゆだねられた管理者に要求されるのは？

18日(土曜日)

コリントの信徒への手紙一 4章6~21節

Q. 神の国は言葉ではなく、何にある？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト 創世記3章8～24節

(1) 罪

このところで聖書は罪を大変現実的なものとしてとらえています。神様の目の前にある私たちの罪の現実をここに見ることができます。

蛇に語りかけられた女はサタンの誘惑により御言を曲げ、御言から目をそらし、神様のご命令に逆らって罪を犯します。木の実を食べた女は、それを男に渡して食べさせて共犯者を作ります。男は何の躊躇も迷いもなく、あっさり食べているかのような記述がなされています。同じ状況に私たちが置かれたとき、私たちもそうするであろうと言わんばかりにさりりと書かれています。このことで神様の試験に失敗した罪の現実が、まさに現代の読者である私たちの問題であることを思い起こさせるのです。

このところで罪を犯した人は、神様の尋問を受けています。人は自分のなした罪の責任を他者に押しつけようとしています。最初の人、「これこそわたしの骨の骨、肉の肉」とまで言った最高のパートナーにその罪の責任を押しつけるのです。これまで愛し合う存在であったものが、敵対し、憎みあう存在となったのです。そして、互いに互いをおとしめようとするのです。ここに私たちの日々犯す現実の罪の事実をかいま見ることができます。

この現実の罪の根元は神様の御言を捨て、神様に従わないところにあるのです。神様の御言を軽んじ、それを捨てる時、サタンの言葉に縛られ、偽りの喜びに目を奪われてサタンの奴隷、罪の奴隷となるのです。

そのように罪の奴隷となった人間は、神様から目をそらし、神様の顔を避けるのです。まるで子どもが悪いことをしたときに、親から目をそらし、顔を合わせないようにするのです。人は人格的存在として神様と顔と顔を合わせることができるものであり、それも神様の祝福だったのです。しかし、罪を負ったアダムはその祝福からはずれて

しまったのです。

(2) 罪による刑罰と救いの期待

人の罪の結果、神様の良き創造によって与えられた全てのものが呪われるものとなったのです。男女の関係はその麗しい関係を失い、支配と隷属の関係となります。人のために良い物を産していた地は茨を生え出でさせ、その結果喜びであるはずの労働から、一生涯苦しみ続けて働く苦役となるのです。そして、人はその生涯を終えて塵に帰らなければならないのです。死を見ない者として創られた人が死ぬものとなったのです。さらに人は神様の祝福と恵みがあふれていたエデンの園から追放され、二度とそこへは帰れなくなったのです。まさに人は死せる存在となったのです。

人の墮落の悲惨が深刻に記されているこの箇所の中に、私たちは一筋の光も見ます。それは蛇への神様の宣告の中にあります。それは15節の御言であり、この箇所は「原福音」と呼ばれます。それは、ここにすでに主イエス・キリストの贖いの恵みが語られているからです。

人は墮落によって救いに対しては全くの無能力になり、サタンの奴隷となり、滅びるしかないものになりました。しかし、神様はそうになった人の代わりに、サタンとの間に「敵意」を置いて下さると語って下さいます。これは、サタンを御自身の敵として、おん自ら滅ぼして下さるとの約束なのです。そのために救い主を人類の間から生まれさせて下さるとの約束なのです。

蛇は彼のかかとを砕きはしても、それは致命傷にはなりません。彼は蛇の頭を砕き、サタンは敗北します。この闘いは、十字架の上で成し遂げられることになるのです。神様は罪を犯した人に死を宣告なさるそのただ中において、御自身の一方的な恵みによる命の約束をも語っておられるのです。

(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問18

子どもカテキズム

問18 罪を犯した人間はどのようにになりましたか。

答 神さまとの交わりを失い、

生きているあいだも、死んだあとも、神さまの怒りを受けなければならなくなりました。ですから、心が曲がって、自分中心になり、

お友だちとけんかをしたり、うそをついたり、盗んだり、悪いことをしてしまうのです。

証拠聖句 創世記2:17、3:8、マルコ7:20-23、ヨハネ8:34、ローマ1:18、6:23

参考教理問答 『ハイデルベルク』5,10-11、『ウ告白』6:2、4-6、

『ウ大教理』25、27-29、『ウ小教理』17-19

1. 神との交わりの喪失

墮落したアダムとエバは、楽園から追放されます(創世記3:23-24)。あれほど命の輝きに満ちていた園は、今や呪われた大地と化しました(3:17)。園を吹き抜ける爽やかな風さえ、背筋の凍りつく思いです(3:8)。住んでいる場所は同じはずなのに、いったい何が変わったのでしょうか。

それは、人が神から離れたからだど、聖書は告げます。追放されたから悲惨な状態になったわけではありません。人の心が神から離れ始めた、その時から人間の罪と悲惨は始まったのです。

神のかたちに造られ、神の息を吹き入れられ、神と共に生きるよう造られた人間にとって、神との交わりの喪失は死を意味したからです。

2. 怒りの子

創世記は、墮落以来、雪だるま式に増殖して行く人の罪の力を描きます(4章)。やがて地を覆い(6:5)天に達する程(11:4)になった人の悪に、神の怒りがくだります。それにもかかわらず、それは決してぬぐい去ることができないことを聖書は告げます(9:21)。人は「生まれながら神の怒りを受けるべき者」(エフェソ2:3)となりました。

さらに、不従順どころか不義によって真理を阻む

人間の悪に対する神の怒り(ローマ1:18)は、今の世のみならず後の世も、その「極みに達する」(黙示録15:1)まで続きます。神が永遠であられる以上、悪に対する神の怒りもまた永遠だからです。人はその中で、自ら招いた悲惨と死の責め苦を味わわなければなりません。

3. 罪の実

「性根の腐った」という言葉がありますが、墮落後の人間は文字通り「性根が腐って」しまいました。この決して拭い去ることのできない腐敗した人間の性質が、いわゆる「原罪」です。作家の三浦綾子さんは、私たち人間の中に潜む恐るべきこの性質を、すべてを一瞬に凍てつく死の世界にしてしまう『氷点』と表現しました。

どんなに生き生きと見える果樹であっても、腐った根からは何一つ良い実を期待できません(マタイ7:17-18)。どんなにまじめに生きようとしても、それとは違った自分を見い出すのは、「わたしの中に住んでいる罪」(ローマ7:20)のせいです。そして、そこから一切の悪が生れ出るので(マルコ10:21-23)。

神を愛し隣人を愛して生きるという創造の目的を見失い、魂において盲目となった人間は、ただ自分のことのみを考えてさまよい、アダムとエバの犯した誤ちを繰り返すばかりです。(吉田 隆)

テキスト 創世記3章8～24節
 カテキズム 子どもカテキズム問18

〔単元のねらい〕

罪の悲惨さを教えることが、この単元のねらいである。罪を犯していても、自分の状態を悲惨であることに、気付かないことが多い。悲惨だと思えないから、悔い改めようとしめない。神との交わりを失っても、失っていることにも気付かない。このような私たちが、悲惨さに目覚めるのは、神の御声を聞き、キリストとの出会いによる。罪の悲惨さは、罪を語るだけでは表せない。キリストによる救いの希望のなかで、自らの悲惨さを受け入れることができる。

「逃避行の果て」

アダムとエバは、食べてはならないと禁じられている木の実を食べてしまいました。それは、見るに美しく、美味しそうだったからです。また、食べると賢くなると、へびに唆されたからです。神様の言葉よりへびの唆しの言葉を信じたエバとアダムは、これを食べると誰もが羨むような賢い人になれると思ってしまいました。賢くなれば、神様に聞かなくても、自分で何でも判断することができる、と思ってしまいました。神様からも自立した人間になれると思ってしまいました。

しかし、食べた後、アダムとエバは、神様と目が合わないよう、避けるようにして園の木の間を身を隠しました。神様から自立するはずだったのですが、結果として生じたのは、神様に叱られるという恐れでした。これが、知恵により頼む者の姿です。自分が獲得した知恵によって生きていこうとするとき、ごまかしたり、帳尻を合わせたり、逃げ場を探したり、そのようなことばかりに、頭を使わなくてはならなくなります。アダムとエバは、神様を信じ、神様とともに生きていく幸せを、自らの手で捨ててしまいました。

恐れて隠れているアダムとエバは、自分からもう二度と神様の前に現れることができません。これからは、逃げ通し、隠れ続けるしかありません。もし、神様が、アダムとエバを無視されたなら、アダムとエバも、隠れ通す以外何もできませんでした。しかし、神様は、探しに来られるお方です。

「どこにいるのか」(9節)と、呼び求めておられます。神様は、どこにアダムとエバがいるのかをご存じなく、あてもなく呼ばわっておられるのではありません。神様は、彼らが禁令を破ったことも、どこに隠れているのかも、すべてご存じです。神様は、「どこにいるのか」と問いかけることで、アダムとエバからの応答を引き出そうとしておられます。アダムとエバは、この問いかけを聞いて、神様から逃げ続けるができないことを学びました。

ここから神様の尋問が始まります。アダムは、「神様、ごめんなさい」とは、決して告白しません。アダムが語るのは、妻のエバの罪です。更には、エバを与えてくださった神様への苦情です。悪い妻を得てしまった悲劇の夫を演じています。罪を犯して、神様を恐れ、逃げ隠れていても、それでも、「ごめんなさい」と語ることはできないとは、なんと、心が頑なのでしょう。神様の尋問は、続いて、エバに及びます。エバは、すべての諸悪の根元として、へびの誘惑を語ります。エバも、アダム同様、自分からは「ごめんなさい」と語り出さず、まるでへびに騙された被害者を装っています。

もし、ここで、アダムが、「悪いのは私です。エバではありません。お赦してください」と語り、エバがそれを聞いて「いえ、悪いのは私です。アダムではありません。お赦してください」と語り合っていたら、神様の判決は違っていたらうと思

われます。しかし、実際に彼らが語ったことは、「悪いのは私ではありません。エバです」であり、「悪いのは私ではありません。ヘビです」であったのです。神様を信じることから離れ、知恵を求めた者達のなれの果てが、この言葉に表されています。

罪の本質を、アダムとエバの物語から、学ぶことができます。一つは、神様の御前にでることができない恐怖とおのきです。次は、裸の恥が象徴的に表していることですが、御前に立つことができない恥です。隠れて生きるしかありません。そして、一番恐ろしいことですが、それは、「自分が罪を犯した。悪いのは自分だ」と罪を認めることができなくなることです。両親であったり、社会であったり、夫であったり、妻であったり、兄弟であったり、代用要因は様々ですが、自分以外の何かを悪者に仕立て上げることで、自分はそれほど悪くないと、言い逃れようとするところに、罪の惨めさがはっきりと表れています。

この罪の現実のなかで、神様が、アダムとエバに問いかけ、神様が、罪の現実のなかへと進み寄ってくださいます。言い訳にならない言い訳をも、神様が聞いていてくださいます。神様が、立ち会ってくださることにより、罪は罪として明らかになり、また、罪のなかに生きるアダムとエバであったとしても、神様の取り扱いを受けることができます。神様が、罪を裁かれるとは、神様が罪を罪としてしっかりと扱ってくださることです。罪を人間の手に委ねてしまったら、人間は罪のどん底でもがき苦しむしかありません。しかし、神様が罪を裁いてくださることによって、罪は神様の御手によって処理されるのです。

神様の裁きは、女には出産の痛み、男には労働の痛みを与えることでした。また、男が女を支配する光景は、本来のあるべき姿ではなく、罪深い人間への裁きのなかで浮かび上がる姿です。

ここでの中心は、男も女も痛みを抱えて生きることです。本来、知恵とは、楽できる魔法のほうでした。知恵があれば、要領よく仕事をこなせると思われています。しかし、アダムとエバが、神様への信仰以上に知恵を求めた結果辿り着いた終着点は、苦勞しながら生きる人生でした。そして、最後は土に帰るだけの人生です。しかし、この苦しみに満ちた死で終わる人生であったとしても、神様が、即刻、死をもって罪に報われなかったことは、大いなる恵みです。罪の裁きとして、かつ、神様の憐れみとして、苦しみながら生きる人生を、アダムとエバは与えられたのです。

この苦しみに満ちた人生のなかに、女の末として神の御子イエス・キリストがお出でくださいました。キリストは、罪を犯されませんでした。人々の罪をご自分の罪として受け止めてくださいました。誰も、自分から「ごめんなさい」と神様に謝らないなかであって、罪のないイエス様が十字架で「ごめんなさい」と神様に謝ってくださいました。更に、アダムとエバが受けた痛み多き人生を、イエス様も、そっくりそのままお受けくださいました。イエス様以上に痛みを友としてこの地上の生涯を歩まれた方はおられません。

罪を犯し隠れていたアダムとエバに、「どこにいるのか」という問いかけをもって近づいてくださった神様は、イエス・キリストにおいて、まさに、罪の現実のなかへと入ってきてくださいました。この世は罪に溢れています。しかし、神様と無縁の世界ではありません。キリストと出会って、悔い改めて、神に立ち返る道が、もう既に用意されています。神様の裁きを恐れて隠れ、罪の姿を取っていたとしても、それは、悔い改めてはありません。悔い改めては、神様から逃げないで、「お赦してください」と神様に近づいていく行為だからです。 (岩崎 謙)

[今日の暗唱聖句]

創世記 3 章 9 節

主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」

〈主題〉

神さまとの交わりを失う悲しさ

〈ねらい〉

神さまは罪によってわたしたちの失ったものの本当の大きさを知っておられることを伝える。

〈展開例〉

みなさんは、大事にしているものをなくしたり、どこかに忘れていたりしたことがありますか。また、どこかで迷子になったことがありますか。お父さんや、お母さんが、きつとさがしまわったことでしょね。天の神さまは、わたしたちが神さまのもとに帰ってくることを喜んでくださいます。イエスさまは、一匹の小羊を探し求めるように、わたしたちを愛していることを教えてくださいました。でも、わたしたちは、神さまから離れていることに気づきませんし、神さまに背いていること

にも気づきません。神さまが、わたしたちを愛しておられることを知って、はじめて、「神さまが、こんなにわたしを愛しておられることを、知らなかった」と言って、後悔するのです。昔、ヤコブさんも、「神さまがわたしと共におられることを知らなかった」と言って、感謝しました。罪を犯して、隠れていたアダムさんも、神さまはやさしく「どこにいるのか」と呼んでくださいました。イエスさまは、今日も、あなたの名前を呼んで、連れ出してくださいます。

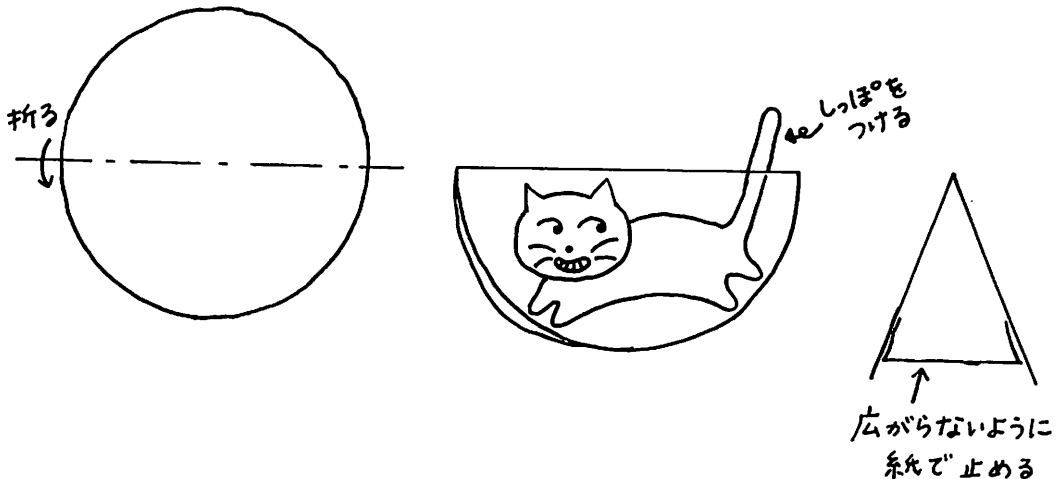
〈お祈り〉

天の父なる神さま。イエスさまはもっともはずかしい死と悲しみをわたしたちのために負ってくださいました。どうか、イエスさまの悲しみをすこしずつ心に覚えることができますように。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～ゆらゆらネコちゃん～

紙皿（薄いもの）を二つに折って、絵を描き、ゆらして遊ぶ。



〈ねらい〉

罪は必ず悔い改めと償いを必要とすること。私たちの悔い改めとイエス・キリストによる償いが私たちを罪から回復することを示す。

〈分級教師へのアドバイス〉

聖書の教えや様々な概念を、私たちの日常の出来事に当てはめて考えるのは、その現実感を明瞭にする効果があります。単に概念としての「罪」「償い」ではなく、子どもたちの日常生活の中での現実的な問題に適用してみましょう。しかし、「当てはめ」は、場合によっては概念の矮小化や一面化をもたらしてしまいます。単に「悪いことを謝る」ではない、もっと本質的な「罪の悔い改め」に踏み込むことができればよいのですが、無理は禁物です。

〈展開例〉

①先週は、私たちが神様の言いつけを守らないで悪いことをしてしまうことを勉強しましたね。

②みんな、約束を破ったり、悪いことをしたらどうする？

(回答例)

・謝る

・ごまかす

③例えば、お母さんに黙ってつまみ食いしていたら、お母さんにバレないかと思ってドキドキしない？

④悪いことをすると、バレないだろうかとか、怒られないだろうかとか思って怖くなるんですね。アダムとエバもそうでしたね。

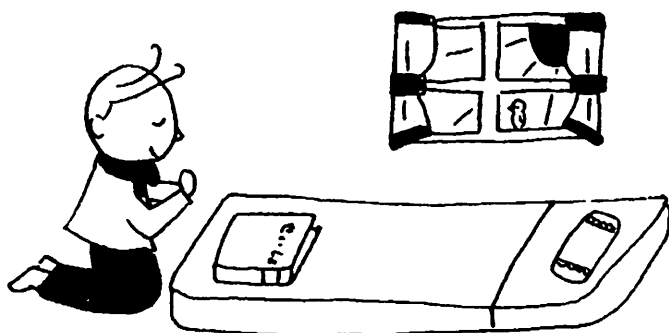
⑤そんな時には、ちゃんと謝ることが大事ですよ。

お母さんの言うことを聞かなかった時は、お母さんに謝らなければいけないし、悪いことをしたのだから神様にも謝らなければならないですね。

⑥みんなちゃんと悪いことをしたら謝ってる？

〈祈り〉

天のお父様。私たちが悪いことをした時、約束を破ったとき、すぐに神様に謝ることができるように助けてください。私たちの罪を神様が赦してくださいますように。主イエス様の御名によってお祈りします。



〈ねらい〉

①人間には、どの人にも罪があることを覚え、②そのような罪人の私たちを愛してくださるイエス・キリストの愛を示し、③自らの姿を省みることへと招く。

〈展開例〉

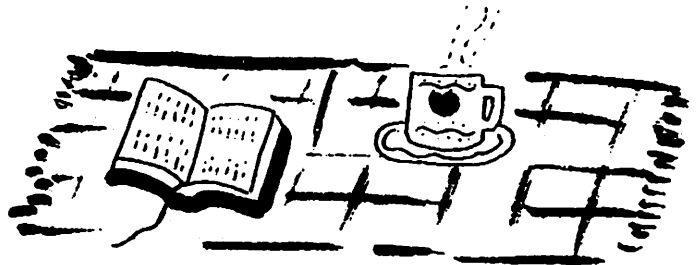
1. アイスブレイク（うち解けるための質問）
「罪という言葉を知ると、どんなことを考えますか。」
2. 神人間には、どの人にも罪があります。罪のない人は、だれもいません。どんなに、すばらしい人も、立派な人も、神様から見ると、みんな罪人です。
3. そのような罪人の私たちを、イエス様は愛して下さり、ありのままの私たちを招いて、

十字架にかかって身代わりとなって罪を完全に償って下さいました。十字架の苦しみも、悲しみも、耐えて下さったのは、あなたを罪から完全に救うためです。

4. 十字架にかかるほどに、愛して下さっているイエス様のことを思いながら、ありのままの自分を省みてみよう。

〈祈り〉

神様、私たちは、罪をおかしたくないと思ってもおかしてしまいますし、今日は絶対に一回も罪をおかさない決めていても、すぐにおかしてしまう弱い罪人です。こんな私たちだからこそ、イエス様が十字架にかかって罪からすくって下さいましたから、ありがとうございます。イエス様、ごめんなさい、そして、ありがとう。



〈聖書をさらに深く〉

1. 罪を犯した人間の姿が、三つの側面からうかがえます。まず、神様との関係で、人間は神様から隠れようとします。つまり、こそこそするのです。次に、人間同士の関係で、アダムと女は互いに責任を押し付けあおうとします。つまり、ずるくなるのです。そして、世界との関係で、人間は労苦して働きながら生きる者となります。つまり、むなしいのです。これが、神様との交わりを失った罪人の現実であり、悲惨な姿です。自分自身の心の状態や生活と重なるところはないでしょうか。
2. しかし、神様は、そのような悲惨な状態の人間をお見捨てになりませんでした。神様は、あなたは「どこにいるのか」と探しておられます(3:9)。原福音と呼ばれる約束を与えておられます(3:15)。そして、皮の衣を作って着せられます(3:21)。自分の罪を見出すときに、神様の救いの約束をも見出すのです。

〈教理を響かせるために〉

1. 人は誰も自分が生まれてきたときの記憶を持っていませんが、人類は、自分たちが創造されたときの状態を失ってしまいました。生まれたときのことを思い出そうとしても思い出せないように、最初の状態に戻りたいと願っても、戻ることができません。神様との交わりを失ってしまったのです。私たちにはどうすることもできない原罪があるということを確認することから始めなければなりません。
2. そして、その原罪から、けんかをする、うそをつくなど、具体的で日常的な罪が生まれてきます。そして、その多くは、「自分中心」という心から生まれてくるのではないのでしょうか。自分を基準として物事を考えていないか、話し合ってみましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

20日(月曜日)

コリントの信徒への手紙一5章1～13節

Q. 練り粉全体を膨らませるのは何？

21日(火曜日)

コリントの信徒への手紙一6章1～11節

Q. 神の国を受け継がない正しくない者とはどういう者？

22日(水曜日)

コリントの信徒への手紙一6章12～20節

Q. 主に結び付く者はどうなる？

23日(木曜日)

コリントの信徒への手紙一7章1～16節

Q. どんな生活を送るようにと神はあなたがたを召された？

24日(金曜日)

コリントの信徒への手紙一7章17～24節

Q. 主によって召された自由な身分の者は、キリストの何？

25日(土曜日)

コリントの信徒への手紙一7章25～40節

Q. 現状にとどまっているのがよいのは、今、何が迫っている状態だから？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

テキスト ローマの信徒への手紙7章13～25節

(1) 内在する罪の問題

パウロは15節で「わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。」と告白しています。この告白はパウロ自身の中に大きな分裂があることを示しているのです。

このような告白をパウロがなす理由は14節の後半に記されています。それは、人間性が罪の下にあり、罪の奴隷として束縛されてしまっているからだということです。そして、人間は生まれながらにその罪に束縛されているのです。罪に束縛されている人間は、それ故に原罪から逃れることも出来ないのです。

その原罪故にパウロは自分のなしている行いが人間として本来持っているはずの意思から出たものではなく、まさにそれとは正反対のことを行ってしまうと言うのです。パウロは自分の意思として善を行いたいと願いつつも、なす事ができない現実を通して具体的にそのことを言い表しています。

しかし、パウロは人間が生来善であり、生まれ成長する段階で悪が入り込むというようなことを語っているわけではありません。彼が人間として本来持っているはずの意思とは正反対のことを行ってしまうと言うことによって、自らの内にある罪の事実、原罪を持つ事実を明らかに示しているのです。

(2) 人間の創造と墮落後の人間

パウロが人間として本来持っている善として語るのは、最初の人々が創造されたときの状態と深く関係があります。人間は最初、神様と交わり、神様の御栄光を表し、神様をほめたたえることを喜びとする存在として創られたのです。そのような人は、常に神様の御言に聴き、神様と顔と顔を

合わす祝福の中に入れられていたのです。また、そのような恵みの内にあった人間は善を行うことを願っていたのです。それはすでに人間の創造(9月5日)のところで明らかにされた通りです。人間がそのような存在として創られたものであるからこそパウロは、人間が本来持っているはずの意思として、善を行うことを挙げるのです。

しかし、墮落によって人間は神様に背を向け、神様から顔を隠す存在となったのです。その結果神様が喜ばれる善を行わず、かえって神様を悲しませる悪を行ってしまうのです。その悪を犯してしまうのは人間が罪の奴隷とされているからなのです。その原罪の故に、人は神様の御前に罪を犯し続け、目に見える現実的な罪も犯すのです。

しかし、この責任を他人に負わせることはできないのです。たとえ本来願っていないことであっても、人間自身が罪を犯しているのは事実だからです。しかもその罪は他者に対してなしているのではなく、神様に対する罪なのです。ですから、人はその罪に対する責任があるのです。

(3) 全的無能力

20節までの箇所では明らかにされませんが、パウロは、この罪の事実を語る大きな枠の中で一つの事実を描いています。それは、全ての人に罪がある事実と同時に、罪故に全ての人々が善に対して、また、救いに対して無能力であるということです。つまり、人は神様の求められる善を行うことはできず、それ故に救いに対しても完全に無能力となっているのです。そのような私たち人間はどうしても神様が与えて下さったキリストの救いに与る必要があるのです。その救いが与えられるように私たちは神様の御前にひれ伏し祈ることが必要なのです。(春名義行)

カテキズム 子どもカテキズム問19

子どもカテキズム

問19 あなたは罪人ですか。

答 はい、私も神さまの御前に罪人です

証換聖句 ヨブ14:4、15:14、詩編51:7、エレミヤ17:9、マタイ7:17-18、

ヨハネ3:6、ローマ5:12、7:15-20、ヨハネ1:8、10。

参考教理問答 『ハイデルベルク』5、『ウ告白』6:3、『ウ大教理』26、『ウ小教理』16

本問は、問16-17で一般的・客観的に述べられた人間の罪の事実が、「私」という個別的・主観的にも事実であるかを問う問いです。「私」も罪人であるとして言えるのか、あるいは本当に「私は罪人です」とどうすれば自覚できるか、という問題を扱います。

1. アダムの罪は私の罪

ヘブル語の「アダム」とは「人」のことです。創世記2章で神と共に生きるために命の約束を与えられたのは、「人」に対してであってアダム一個人にはありません。それは、約束を直接したわけでもない女が「わたしたちは……食べてもよいのです」(3:2)と言っているところからも明らかです。それと同じように、創造された状態から墮ちたのはアダム一個人ではなく、全人類なのでした。「アダムによってすべての人が死ぬことになった」のです(1コリント15:22)。

2. 生まれながらに罪人

前回御紹介した小説『氷点』の中で、自分の体の中に犯罪者の血が流れているという事実を告げ知らされた主人公が、ショックのあまり自殺へと向かうというお話が出てきます。小説の中では虚偽の告知だったわけですが、聖書はそれが人間の現実であることを告げています。犯罪者アダムとエバの血が、人類の中に流れ込んでいるからです。毒された水源から流れ出た水が大地を汚し死の世

界に変えて行くように、人類の始祖の罪は私たち人間の血となり肉となって、この世界を汚染したのです(ローマ5:12)。

人は、生まれながらに罪人です。ダビデ王は、自らの深い罪意識を「わたしは咎のうちに産み落とされ/母がわたしを身ごもったときも/わたしは罪のうちにあったのです」と表現しました(詩編51:7)。義人と呼ばれたヨブでさえ、自分を裁こうとしておられる神に向かって、「汚れたものから清いものを引き出すことができましようか」(14:4)と言って嘆いています。

3. 神の御前に罪人

しかし、人はこの事実を容易に認めることも自覚することもありません。「罪人」と言われても自分は何が大罪を犯したわけではない、それくらいは皆がやっている…。汚染された環境で生きる者にとっては、いつしかそれが自然になるからです。

罪を自覚する第一の方法は、まず神の基準に自分を照らすことです(ハイデル3)。けれども、罪の自覚が真にもたらされるのは、私たち罪人が神と出会うことによるのみです。神の臨在に触れた預言者イザヤは「わたしは滅ぼされる」(イザヤ6:5)と恐れ、ペトロはイエスの足元にひれ伏して自分の罪を認めました(ルカ5:8)。神を騙すことはできないからです(ヨハネ1:10)。

(吉田 隆)

テキスト ローマの信徒への手紙7章13～25節

カテキズム 子どもカテキズム問19

〔単元のねらい〕

ここでのねらいは、神の御前で、自分が罪人であることを受け入れることにある。自分が健康であると思いついていても病気でいる場合と同じように、自分に罪人の自覚がなくても、神の御前では罪人である。罪の自覚は、道徳的な良いことをできない嘆きや自己嫌悪と同じではない。罪は、自分で気付くものではなく、神が、神の御前で、罪と定められるものである。神の御前における罪の自覚は、神の裁きを身に受ける恐れである。そのとき、死の問題は、どこかで扱わねばならない。

「死に至る罪がわたしに宿っている」

ある人が、鏡を見ました。いつもと同じような朝だったのですが、そのとき、その人は自分の目に力がないことに気付きました。疲れているのは確かですが、それよりも、このまま生きて、死に近づいているだけだという思いが心に宿りました。そして、その人は、教会に通うようになり、イエス様を信じることができました。その人は、それから年を取りました。体も弱くなりました。でも、鏡を見ても、あの日、あの時感じた死の恐れは、消え去りました。イエス様を信じたその人の心に、復活の命の輝きが宿りました。

死ぬということ、年をとった人だけが考えることではありません。子供もまた、死ぬことを知っています。自分の人生は、最後にはどうなるのだろうか。車であれば、どこを目指して走っているだろうか。中学に進学し、高校に進学し、働いたり更に学んだりしながら、さまざまな通過点を経て、最後に辿り着くところはどこだろうか。

ここで大切なことは、肉体的な死ではなくて、自分の人生の結ぶ糸が死でしかないことに気付くことです。年をとったから死ぬ死ではありません。病気による死でもありません。自分の生きてきた人生に釣り合うものが、最後に与えられる死です。自分の人生に相応しいものが、最後に与えられる死であることを認めることです。これが、ローマ書7章5節・13節で「死に至る実」とか「死をもたらす」と言われている事柄です。

このような死への恐れは、神の裁きと結びついています。聖書には正しいことが書いてあります。それを守ればよいことも知っています。しかし、できないのです。正しいことが何であるかを知らないときは、自分にはそれができないことも知りませんでした。悪いことをしていても、「みんなもしているさ」と余り気にもしませんでした。しかし、正しいことが分かると、それができないことが罪であることに気付きます。そして、神様が、それができない自分を、死をもって裁いたとしても、その裁きが当然であることが分かります。罪が分かると、罪の値は死であることが分かります。

パウロは、自分の行っていることを点検してみました。そのとき、自分が謎になりました。自分で自分が分からなくなりました。彼は、それを行ったらよい正しいことを、知っていました。しかし、それができていない自分が自分の目のまえにいました。神を愛し、人を愛することの素晴らしさを知っていました。しかし、本当の意味で愛するとはどのようにすることが分かったとき、自分にはそのように愛することができないことを知りました。今回は失敗したから、次回は上手くやろうと言って、自分をごまかすことはできませんでした。何度やってもできない自分に気付きました。

そして、パウロは、このような事態を、「自分のなかに罪が宿っている」と表現しています。そ

の罪は、自分のなかで間借りして小さくなっているのではありません。自分のなかに住んでいる罪は堂々としているのです。リビングルームでくつろいで生活しているのが、罪です。正しいことを知ってそれを行おうとしている自分は、かえって、縮こまって部屋の片隅に追いやられています。罪が、王様のように振る舞っています。正しいことを知って行おうとする自分もいるのですが、その自分に自分が従おうとしません。自分を支配しているのは、結局、罪なのです。正しいことを行おうと思っても、結局、最終的には、罪の言うがままに、従ってしまうのです。

パウロは、この罪によって自分が拘束されており、そして、罪は必ず自分を死に導くことに気付きました。この罪から逃れようとするのですが、自分ではどうすることもできません。言い逃れることができるのであれば、「悪いことをしているのは、自分ではなく、自分の内に宿っている罪です」と罪に責任を転嫁することです。しかし、正しいことをしようとしている自分が本当の自分であり、自分の内に宿る罪は偽物の自分であるというような区別をすることはできません。正しいことをしようとしているのも自分なら、罪に従って悪を行っているのも自分です。自分のなかに住んでいる罪が、自分そのものです。

神様のために行うことも、最後は自分のために行ってしまいます。人を愛して行うことも、最後は、人に愛されたいから行ってしまいます。そして、一番できないことは、赦すことです。憎むことは、すぐできます。復讐することもできます。行いにおいて復讐しなくても、心において無視することで、自分の世界から相手を締め出し、心において抹殺することもできます。しかし、なかなか赦すことはできません。赦したつもりになっても、また、同じように悪いことをされると、二度目はもう赦すことができません。赦し

なさいと聖書に書いてあって、イエス様の教えも理解できるのですが、自分の心が相手を赦せる心になりません。パウロは、ここで嘆くしかありません。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、誰が救ってくれるのでしょうか」（7章24節）。ここにも、「死に定められた」とあります。

パウロのこの嘆きは、急に25節で中断されます。「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」とあります。パウロは、「だれが救ってくださるのでしょうか」との問いに対して、「イエス様に感謝します」と答えています。救ってくださるのはイエス様です。罪の奴隷になっている私たちを救うために、イエス様がお出でくださいました。死に定められた私たちに代わって、イエス様が十字架で死んでくださいました。そのイエス様は、聖霊によって、私たちの心に住んでくださいます。イエス様を信じた時、イエス様が心にお出でくださいます。心のリビングルームに住んでいた罪をその支配下においてくださいます。罪は、私たちより強いですが、イエス様に対しては無力です。イエス様が私たちを支配してくださるとき、罪は、もはや私たちに手出しはできません。

但し、この世にあっては、正しいことを知りつつも行うことができない自分に嘆かざるをえません。罪との戦いは、死ぬまで続きます。その戦いにおいてしばしば敗北します。しかし、キリスト者は、罪の結果である死からは、キリストにあって解放されています。罪との戦いは、自分にはイエス様の救いが本当に必要であることを気付かせてくれる契機となります。罪と戦えば戦うほど、どうしようもない自分に嘆き、悔い改め、この自分を救ってくださるイエス様に、より深く感謝することができます。（岩崎 謙）

【今日の暗唱聖句】

ローマの信徒への手紙 7章24～25節

わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。

死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。

わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。

〈主題〉

失ったものの回復

〈ねらい〉

わたしたちの罪の大きさは計り知れない。ただイエスさまの愛のみがこれをおおって余りあることを伝える。

〈展開例〉

みなさんは、「おたがいさま」という言葉を知っていますか。「わたしが悪かった」と言うとき、「なあに、おたがいさまですよ」と言われると、「そうか、みんなおたがいに迷惑をかけているのかなあ」と思います。でも、神さまに向かっては、「おたがいさま」とは言えませんね。それは、神さまは、まったく罪がなく、ただしく、かんぜんなお方だからですね。かんぜんなお方から見ると、わたしたちの罪は丸見えます。でも、このようなふかんぜんなわたしたちを神さまはあわれんでく

ださって、イエスさまのかんぜんさによって覆ってくださったんです。イエスさまは、十字架の上でも、一緒に十字架にかかった犯罪人に「今日、あなたもわたしと一緒にパラダイスにいる」と約束してくださいました。今日、あなたも、イエスさまがわたしの身代わりに十字架についてくださったと信じるとき、「わたしも罪人です」「イエスさま、どうか、罪をゆるしてください」ところからお祈りしましょう。そして、みんなもおたがいに罪をゆるし合い、お祈りを一緒にするようになりましょう。

〈お祈り〉

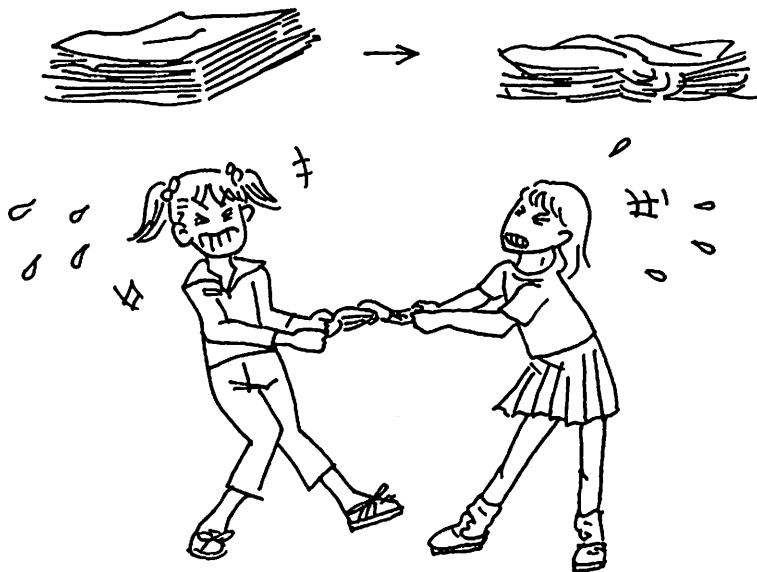
天の父なる神さま。自分の罪をごまかさないで、神さまにころからあやまることができますように。きよくたしい心を与えてください。イエスさまのとうといお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

～ティッシュペーパーでかくらべ～

○ティッシュペーパーを5組（10枚）重ねて、お互いからめてひっぱりっこをする。

※10組（20枚）だと、子どもがぶら下がることが出来るよ！



〈ねらい〉

私たちが罪の支配下であり、善を行う能力に欠けていることを知り、救いの必要を覚える。

〈分級教師へのアドバイス〉

罪の自覚は何回でも繰り返して自覚しなければならぬことです。単に「罪と裁き」の組み合わせでもって、子どもたちを脅すのではなく、むしろ積極的にキリストの救いを印象づけることが大切です。

カテキズムの項目としては罪の項目ですが、贖いの救いとまったく切り離して罪を取り上げることはできませんし、もしそれだけ取り上げるのだとすれば、礼拝式のメッセージや分級のお話はまったく希望を指し示さない一種の脅しに終わってしまいます。私たちの信仰が常にキリストの十字架と結びついて理解されることが必要です。

〈展開例〉

①先週は罪を犯したら謝らなければならないことを勉強しましたね。

②じゃあ、先週一週間、一つも罪を犯さなかった人はいるかな？

(回答例)

- ・犯さなかった
- ・悪いことをした

③本当に、一つも嘘をつかず、約束を全部守って、^{1人1人}仲がもしないし、わがままも言わないで、一つも怒られなかった？

④どんなに私たちが罪を犯さないように頑張っても、私たちの体には罪が染みついてしまっているから、私たちはいつでもどこでも悪いことをしちゃうんですよ。

じゃあどうしたらよいと思う？

- ・がんばる
- ・イエス様にお祈りする

⑤覚えてるかなあ？ イエス様は、どんなことでも自分できちんと決めることができるお方だったですね。私たちの罪も、イエス様にお願ひすれば赦していただけるのですよ。

⑥イエス様をお願いして、私たちの罪を赦していただいて、今週は先週よりもずっと神様を信じて、神様に従っていくことができるようにお祈りしましょう。

〈祈り〉

天のお父様。私たちの罪をあなたがイエス・キリストの十字架によって贖ってくださることを感謝します。あなたによって、私たちが少しずつでもよい者となることができるようにしてください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。

〈ねらい〉

①自分を省みて、罪人であることを覚え、②罪を悔い改め、③神様の前にひれ伏し祈ることへと招く。

〈展開例〉

1. アイスブレイク（うち解けるための質問）

「今まで、一度も罪をおかさずに過ごすことができた日があったでしょうか。みんなで話し合ってみよう。」

2. 神様の完全な正しさ、完全な聖さ、完全な愛から、自分をふりかえってみよう。どの人も、罪があり、自分ではどうすることもできないのです。

3. 神様は、罪人の私たちを、イエス様の十字架

の償いによって、完全に赦してくださいました。神様に、罪を告白して、罪を悔いて憎み、それをイエス様を信じてお任せしましょう。

4. 神様は、私たちが罪を憎み、罪を悲しむ心を分かってくださいます。どんな罪も赦してくださいまし、どの人のお祈りも聞き入れてくださいます。私たちが神様の前にひれ伏し祈るように、神様は招いてくださっています。

〈祈り〉

神様、私の罪を赦してください。私は私の罪を自分ではどうすることもできないのです。私は罪がだいきらいです。罪をおかしてしまう自分が、とても悲しく思います。どうか今、イエス様の十字架の償いによって、私の罪を完全に赦してください。そして、心に平安をお与えください。



〈聖書をさらに深く〉

1. 悪いことをするとき、それが悪いことだと分かっている、わざとする場合もあれば、それはよくないことだと分かっているが、何かには引きずられるようにしてしまうこともあります。そのような経験がないか、話し合ってみましょう。自分では、自分の心も行いもコントロールできません。
2. 自分の中には、自分ではどうしようもない罪が住んでいるということを認めなければ、自分の力でなんとか問題を解決し、救いさえ得ようと考えてしまいます。そのように考えている人はいないでしょうか。むしろ、自分はなんと惨めな人間か、と思ったところで、救いが見えてきます(7:24～)。また逆に、神様からの救いを知ることで、自分がいかに何もできない罪人かも分かるはずです。

〈教理を響かせるために〉

1. 私たちは、他人に足を踏まれていることにはすぐに気が付きますが、自分が他人の足を踏んでいることにはなかなか気が付きません。つまり、自分自身が罪人であるということにはなかなか気が付かないのです。ウリヤの妻を奪い、ウリヤを死に追いやったダビデ王は、その罪に最初気が付きません。しかしナタンの指摘を受けて初めて罪に気が付きます(サムエル記下12章)。私たちも、他人の罪や過ちばかり見ている、自分自身の罪の姿を見失ってはいないでしょうか。
2. 大切なことは、聖書の御言葉を、自分自身のために書かれた言葉として真剣に読むことです。聖書をどのように読み、また説教をどのように聞いているか、話し合ってみましょう。

〈毎日聖書を読んで、答えてみよう〉

27日(月曜日)

コリントの信徒への手紙一8章1～13節

Q. 自分は何か知っていると思う人は、まだ何を知らない？

28日(火曜日)

コリントの信徒への手紙一9章1～12節

Q. モーセの律法に何と書いてある？

29日(水曜日)

コリントの信徒への手紙一9章12～27節

Q. 誰に対しても自由な者であるパウロは、すべての人の何になった？

30日(木曜日)

コリントの信徒への手紙一10章1～13節

Q. 神は試練と共に何を備えてくださる？

1日(金曜日)

コリントの信徒への手紙一10章14～22節

Q. 偶像に献げる供え物は、何に献げている？

2日(土曜日)

コリントの信徒への手紙一10章23～11章1節

Q. 食べるにしる飲むにしる、何のためにすべき？

○心に残った言葉を書き出してみよう。

〈編集部より〉

先の号でお知らせいたしておりましたように、本号から、神戸改革派神学校校長、牧田吉和先生の「20周年宣言」の学びが始まります。予定では、本号から第16号までの連載となります。本号には、その「序論」部分を掲載いたしました。90分程度の学び会のペースであれば、一回もしくは二回ほどで読み終わってしまうかもしれません。けれども最初の学びで、宣言本文をあらためて、繰り返し皆さんで朗読(音読)しながら味わい、学んでくださることをお勧めいたします。

「創立宣言」と「20周年宣言」は、私ども日本キリスト改革派教会の教会形成の基本姿勢がうたわれております。その意味では、それ以降の「信仰の宣言」とは異なる性質を持っております。今日、改めて日本キリスト改革派教会のアイデンティティを鮮明にすることは、私ども自身の大きな課題であると思われまふ。しかもそれは、私どもだけの恵みの課題であるばかりか、日本の諸教会のためにも、「道しるべ」となることと確信いたします。

所収の論文は、2003年11月に開催された、日本キリスト改革派教会名古屋岩の上传道所における全体研修会における講演を、先生があらためて書き直して下さったものです。(相馬伸郎)

* * *

〈20周年記念宣言本文〉

日本基督改革派教会創立二十周年記念宣言

宣言 われら日本基督改革派教会は、創立二十周年の記念すべき日にあたり、当初の信仰と熱情とをしのびつつ、神の栄光のため、われらに与えられている一切をささげて励むことを、新たに決意する。

回顧 思えば、昭和二十一年四月二十八日、荒廃焦土の祖国に、神のみ旨にかなう国家と教会の建設を願うわが日本基督改革派教会が創立されたことは、神の深きみ旨によるところである。まことに、キリスト教有神論こそ新日本建設の唯一の基礎であるとして、信条的にも教会政治

的にも宗教改革の正統を継ぐ教会を樹立しようとする改革派教会が、日本人のみの手によって誕生したことは、わが国キリスト教史を飾る画期的事件であった。

それゆえ、わが教会のになう使命の重大さを、われらは恐れつつ自覚するものであるが、わが教会の進むべき道は、創立当時の「日本基督改革派教会宣言」に明白に示された。

われらは今ここに、二十年の歩みを顧みて、この重い使命を十分に果たし得なかった罪と弱さを覚えつつも、八教会二百人の会員をもって発足したわが教会が、今日、六十五教会四千人余の会員を有するまでに発展し、われらの信仰規準であるウェストミンスター信条の教会訳を完成し、神戸改革派神学校を擁して、着々と長老主義教会の形成をなしつつあることは、ひとえに、神の恵みによるものと、深く感謝するところである。

歴史 そもそも、神が人間に与えたもうた恵みの契約は、アダムにおいて罪に落ちた人類を、イエス・キリストによって救い、天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめる契約であって、それは、キリストの受肉と十字架と復活によって成就され、再臨において完成される。歴史は、この契約に基づく神のご支配のもとに、キリストの教会による福音の宣教をとおして、終末的栄光へと向かいつつある。

われらは、聖書に示されたこの歴史観に立ち、キリストの教会のえだとして、福音宣教の使命を果たそうとするものである。

礼拝 教会の生命は、礼拝にある。キリストにおいて神ひとと共に住みたもう天国の型として存する教会は、主の日の礼拝において端的にその姿を現わす。わが教会の神中心的・礼拝的人生観は、主の日の礼拝の厳守において、最もあざやかに告白される。神は、礼拝におけるみ言葉の朗読と説教およびそれへの聴従において、霊的にその民のうちに臨在したもう。

神学 従って、神の言葉の体系的把握すなわち神

学こそ、教会の生命的形成に不可欠である。聖書に啓示されているキリスト教真理を、歴史的改革派神学の光に導かれつつ体系的に学びとすることは、われらが常に第一におく務めである。もとより神学は、単なる観念的思弁ではなく、生けるキリストが人間の現実に語りたもうみ言葉の学であって、非宗教化されつつある現代の世俗主義的社会に対して、神の主権に基づく明確な生活原理を提示することは、生ける神学の急務である。誤りなき聖書の規範により、創造主なる神の主権と、ひとり子イエス・キリストの十字架のあがないによる罪のゆるしと、聖霊による新生ときよめとに基礎をおく、キリスト教有神論を提示し実践することは、全教会が一体となって従事すべき霊の戦いである。

われらは、教会のこの神学的戦いが、われら自身の言葉によるわが教会の信条として、神と世の前に告白されることを期待する。

伝道 キリスト教有神的世界観・人生観の主張と実践が、単なる文化運動にとどまることがないためには、信仰による罪のゆるしの福音をのへ伝える伝道が、教会によって力強く遂行されねばならない。われらは、聖霊ご自身が、み言葉をとおして直接罪人を救いたもうことを信ずるとともに、復活の主キリストが新約の教会に託された世界伝道の使命を、切に自覚するものである。教会の生命は、伝道の実践となって躍動する。

キリスト教伝道の実践にあたっては、み言葉によるのみでなく、愛の行ないにもよるべきことが、主イエス・キリストのみ教えと模範である。わが教会の伝道も、神学と愛の執事の奉仕とを一元的に実践するものでなければならない。

創立以来のわが教会の発展を謙虚に顧みるとき、海外改革派・長老派緒教会の援助と協力によるところが、きわめて大きい。われらはここに、一つ改革派信仰に立つ全世界の教会に感謝しつつ、わが教会自体が、献身的信仰をもって、全日本、否、他の果てにいたるまで伝道を推進することを誓う。

一致 われらは、キリストの教会の公同性を信ずるものとして、わが教会の使命遂行を、内外諸教会との交わりと協力とのうちに行なおうとす

るものである。これは、信仰の一致に基づく交わりであって、キリスト教真理の犠牲のもとに行われる妥協的教会合同運動とは、全く性質を異にする。われらは、霊的に一つである地上の教会が、教理と教会政治において、その統一性を可視的に表明することこそ、教会のかしらなるキリストのみ心であると信ずる。

祈祷 思うに、神の国の進展は、人間のわざにあらず、聖霊が人をとおしてなしたもうみわざであるゆえ、わが教会がその尊い使命をみ心にならなうために根本的に必要なのは、熱心にして絶え間ない祈祷である。わが教会は、神学と伝道を祈祷の生活において統一することによってのみ、聖霊の力あふれる教会として立ちうる。わが教会の祈祷生活が、神の恵みのもとに祝福されることを、切望する。

信徒 わが教会のこの高く険しい目標めざして奉仕することは、神に召されたすべての信徒にひとしく与えられた光栄である。信徒は各々おかれた現実の生活のただ中で、神の言葉を学び、伝えなければならない。教会の神学と伝道とは、キリストにつらなる信徒各自が、この世にあって神の言葉に従う生活を営むときの、具体的な信仰の戦いに基礎をもつ。とくに、われらの奉仕の第一歩は、神の契約に基づく家庭の形成にある。聖別された家庭を基としてこそ、信徒は、神よりうけた各々の賜物を生かして、教会と世にあってキリストの証人として奉仕しうる。

全能の神が、教会をとおして人類を救いたもうとき、ひとりびとりの信徒の中に聖霊による力を働かせて、ご自身の栄光を現わしたもうことは、使徒的教会の例より明らかである。われらもこの模範に従い、全会員が聖霊に満たされ、神がわれらの教会を祖国におこしたもうたみ旨に栄光を帰しまつることを願う。

現代 科学技術のいちじるしい発達により、世界観が空間的にも時間的にも一変しつつある今日、機械文明の中における人間性の回復と自由とは、全世界の渴望するところである。他方、わが国の物質的復興と繁栄は世界の奇跡とまで称されながら、ひとたび、わが同胞の精神面に目を向けるならば、その空白と混迷とはもはや放置することができない。在来の伝統的権威すでに力

なく、真の権威が模索されつつあるこの時にあたり、歴史と自然における聖なる神の主権への服従において、真の救いの自由と喜びを与える改革派信仰をもって、わが国同胞のみならず全人類のよるべき原理と信ずることは、創立以来揺るぎないわれらの確信である。

われらは、永遠に過ぎ行くことのない神の言葉の上に立って、あらゆる形の無神論を打破し、すべての領域において神の主権を告知し、主が再び来たりたもう時まで、おりを得るも得ざるも、うむこともなく、福音の宣教に邁進することを、ここに誓う。

「これ、すべてのものは神よりいで、神によりて成り、神に帰すればなり。栄光とこしえに神にあれ。アアメン」。

昭和四十一年四月二十八日

* * *

〈20周年記念宣言の学び〉

「創立20周年記念宣言と今日的意義」(一)

牧田吉和 (神戸改革派神学校)

はじめに

「創立20周年記念宣言」に関してはこれまでも多くの方々が記してこられました。それらを通しては、読者の皆様も様々な機会に学んでこられたことと思います。そのような中で、もし筆者が「創立20周年記念宣言」(以後、「20周年宣言」と略記)について記す特別な理由があるとするれば、恐らくただ一つのことでしょう。それは、筆者が「創立20周年世代」とも呼ぶべき位置を占めるという理由です。

1966年4月28～29日の2日間にわたり、東京の豊島公会堂で創立20周年の記念全国信徒大会が開催されました。当時、筆者は大学4年生でした。600名ほど集まった記念信徒大会は盛会であり、その時の熱気を今でも生き生きと思い起こすことができます。

第一日目の臨時大会で20周年宣言が採択されました。その時の宣言が、その後の筆者の献身者としての歩みの出発点となりました。信徒大会の閉会の集会において大会の実行委員長であった松田

輝一牧師が献身者を紹介していただきましたが、筆者はその中の一人でした。松田先生が熱烈に日本宣教への献身を訴えられたことを覚えています。その時の先生の声の調子まで耳に残っています。20周年信徒大会と20周年宣言に押し出されて、筆者は、翌年1967年に神学校に入学し、実践的にも神学的にも同宣言に支えられて今日まで奉仕してきたと思っています。また、20周年当時の改革派教会の状況も肌身で知っているつもりです。神学校においても創立20周年宣言の執筆責任者であった吉岡繁先生が校長になられた時の学生であり、授業を通して同宣言の内容を教えていただきました。以上のような意味で20周年宣言のスピリットのようなものをじかに受け取った世代、同宣言に直接的な影響を最も強く受けた世代と言ってしまうと思います。筆者が20周年宣言について記すメリットがあるとすれば、以上のような20周年宣言をめぐる特別な歴史的環境の中に身を置いた者の言葉という点であろうかと思えます。大げさに言えば、「20周年世代」の一つの証言と言えるかもしれません。

さて、20周年宣言の扱い方としては色々な方法が考えられます。20周年宣言を改革派教会の歴史的脈絡の中で厳密に扱うこともできます。この方法は、この小論においてもいづれにしてもある程度は避けることはできないでしょう。しかし、この点については『日本基督改革派教会史』をひもといて読んでくだされば十分に学んでいただけます。ここでは、主として表題にありますように「20周年宣言の今日的意義」という実践的角度から同宣言について考えてみたいと思います。この第一回目は全体として序論的なことに限定して記させていただきます。

1. 20周年宣言の歴史的背景

20周年宣言の今日的意義を考えるために、20周年宣言の根本的な狙いは何であったのかをあらためて見つめ直すことが必要です。しかし、同宣言の狙いを理解するためには、同宣言の歴史的背景を知っておく必要があります。従って、歴史的扱いはこの小論の目的ではありませんが、歴史的背景を簡単に扱っておくことにします。

1. 「創立宣言」の二つの根本主張

20周年宣言は時には「第二宣言」と呼ばれることさえあるように、「第一宣言」すなわち「創立宣言」を前提にし、その脈絡の中で書かれたものです。この点は、20周年宣言の『宣言』の項においても「当初の信仰と熱情とをしのびつつ」とあり、『回顧』の項でも「それゆえ、わが教会のなう使命の重大さを、われらは恐れつつ自覚するものであるが、わが教会の進むべき道は、創立当時の『日本基督改革派教会宣言』に明白に示されていた」とあることから明らかです。

周知のように「創立宣言」には二つの根本主張がありました。一つは、「創立宣言」の第一点といわれるもので「有神的人生観ないし世界観の確立」という主張です。二つ目は、「創立宣言」の第二点と言われるもので、「一つ信仰告白と一つ教会政治と一つ善き生活において聖書の教会を形成する」という主張です。この二つの主張の内容についてはここでは詳論はいたしません。

しかし、少なくとも指摘しうることは、第二点の教会形成論に関して言えば、日本のプロテスタント・キリスト教の流れの中で今日特に注目されて来ているのではないかと思います。私たちと近い関係にある「日本キリスト教会」はもちろんのこと、「日本基督教団」の中の「連合長老会」を中心としたグループ、さらには福音派といわれるキリスト教の流れ、例えば「ホーリネス」の流れにおいてさえ教会形成における“信仰告白”の重要性がよりよはるかに熱心にまた積極的に現在では議論されています。歴史的に見ても、創立宣言の第二点が数え上げた諸要素は教会形成をする場合に必然化する問題であり、それらが議論されるようになるのは当然のことです。「創立宣言」は教会の教会形成の中核となる点を60年近く前にすでに明確に主張していたと言えるでしょう。

創立宣言の第一点に関して言えば、有神的人生観・世界観の主張は、これを一つの教派の創立理由として掲げたのはやはり日本のキリスト教史の中で初めてのことです。多くの場合、教会形成派か、社会派か、二極に分化するのですが、わたしたちの教会はそれを統合する立場を教派として主張したわけです。これは日本の教会史上画期的な出来事です。世界の改革派諸教会を見渡してもユ

ニークな意味をもっているはずですが。もちろん、世界の改革派教会においては、例えばオランダ改革派教会においては、実質的にこれら二つの要素は生きた伝統として歴史的に継承されてきていますので、ことさら宣言として表明する必要もなかったと言えるかもしれません。しかし、教派の公的宣言として有神的人生観・世界観を明確に表明しているという点では、やはり世界的にも独自の意義をもっていると筆者は強く確信しています。

2. 「創立宣言」の第二点の整備

日本キリスト改革派教会は、「創立宣言」を掲げて1946年4月にわずか8教会200人の会員で出発しました。一年後の4月には神戸改革派神学校を創立しています。また「信仰基準」や「教会規則」という制度面の整備に精力的に取り組みました。1953年第8回定期大会では「日本基督改革派教会憲法成立宣言」を行っています。すなわち、「信仰基準」に関しては、原文をもってそれにあてて、邦訳としては「ウ告白」は松尾武訳を、「ウ大教理」は岡田稔訳を、「ウ小教理」は藤井重顕訳を参考にすることを明記しています。大会委員会訳としては、1957年に「ウ小教理」、63年に「ウ大教理」、64年に「ウ告白」が完成されました。また、「教会規則」の方は、当初は「政治基準」(1949年)と「礼拝指針」(1951年)の二本立てから成っていました。「教会規則」におけるこの二本立ては、旧日本基督教会の伝統を継承したものであったようです。その後、現在のように米國長老教会の方式に従い「政治基準」と「訓練規程」と「礼拝指針」の三本立となり、呼び方も「教会規程」となりました。

以上のように、「創立宣言」の第二点である「一つ信仰告白、一つ教会政治、一つ善き生活」による聖書の教会の形成の方は制度面においては急速に整備されて行きました。

3. 「創立宣言」の第一点の展開

他方、「創立宣言」の第一点である「有神的的世界観・人生観の確立」の主張の具体化にも努力が傾けられました。

何といたっても大きな試みは、教育面に見られ、1946年には「双患幼稚園」が開園し、さらには53

年には「双患小学校」が開校し、「双患学園」が成立します。有神論的世界観・人生観に基づく教育が目指されたもので、将来的には中学・高校・大学までの一貫教育を目標としていました。しかし、10年後の63年には挫折するに至りました。この試みは当時の改革派教会の実力では無理があったのでしょうか、日本におけるカルヴィニズムの具体的展開という点で大きな痛手になりました。

しかし、第二点の展開はこれだけではなく、1950年の「カルヴィン主義学生運動」(CSM)があります。この運動から多くの人材が生まれました。1954年には「日本カルヴィニスト協会」(JCA)が設立され、55年にはCSMがこれに合同します。同協会の働きとして当時はかなり活発な出版活動も行われています。

4. 20周年宣言の背景としての「行き悩む改革派路線」の状況

全体として見れば、改革派教会の創立後10年間はきわめて精力的な活動が展開されました。これは戦後の混乱の中で新しい教派として出発し、しかも日本基督教団からの離脱という状況もあって外部からの様々な批判に晒され、その中で「創立宣言」を掲げ、理想に燃えて献身的な努力がなされたと言えます。

問題はその後歩みでした。『日本基督改革派教会史』は「第12章 行き悩む改革派路線—創立20周年にむかう教会—」というタイトルを付しています。20周年を前にした改革派教会の状況を思い起こすと、確かに「行き悩む」という言葉がぴったりと当てはまるように筆者も思います。「創立宣言」の「スローガン」は叫ばれるのですが、その声は空しく響き、具体的な展開に行き詰まっていたと言ってよいでしょう。第一点の展開という点では上に述べたように「双患学園」の挫折もあり、その具体化の道は見えなくなっていました。第二点の教会形成においても教勢が目に見えて停滞してきたという事実もあります。カンフル剤の役割を果たした「米国キリスト改革派教会」(CRC)とのミッション協力も本格的になるのは20周年以後のことです。神学校も開校10年を経る頃から手厳しい批判が向けられるようになり、第14回大会では「神学校対策委員会」が設置されています。

以後神学校問題は大会の主要テーマになりました。

以上のような教派としての停滞状況は、例外はあったでしょうが、各個教会にも症状として現れていたように思います。個人的なことで、当時、筆者は信仰上の回心を体験し、信仰の喜びと霊的な生命力を深く感じていました。そのような自己の霊的状况と教会の霊的枯渇状況とはあまりにも大きく相違していました。もちろん、個人の信仰的状况と現実の教会生活との間に温度差があることは当然です。教会はいつも弱さや問題を孕んでいるからです。しかし、それにしても当時の教会の霊的枯渇と停滞感には特別なものがあったと思います。そのとき感じた極度の信仰的違和感が、自分の中で根本的な問題意識をもたらしました。すなわち、「教会とは何か」、「礼拝とは何か」、「説教とは何か」、「聖餐とは何か」という問いが自分の心の奥底に刻印されたように思います。このような問題意識は、その後の神学的思考を規定し、現在に至るまで影響を与え続けています。

20周年宣言の背景をなす教会的状況とはだいたい以上のような状況だと思えます。確かに「行き悩む改革派路線」という『日本基督改革派教会史』の表現は事柄の核心を突いているでしょう。

II. 「創立宣言」の第二点の展開としての「20周年宣言」の根本的狙い

以上のような歴史的背景の中で、20周年宣言を見つめ、その位置付けをするならば、20周年宣言は創立宣言の第二点の展開としての意味を持っていると言えます。しかし、問題はいったいどのような意味における展開なのか、という点です。創立宣言の第二点の展開だとしてもどこに20周年宣言の根本的狙いがあったのでしょうか。

20周年宣言は1965年の第20回大会に「宣言作成委員会」(委員:佐藤慎二、吉岡繁、矢内昭二、山崎順二、榊原康夫)が選出され、半年ぐらいの短期間で作成されたものです。中心的執筆者は吉岡繁先生です。執筆者の吉岡先生自身が、宣言の狙いがどこにあったのかを次のように明らかにしておられます。

「ウェストミンスター信仰告白には、見える教会、組織としての教会は、信条、礼拝、説教、礼典、教会政治による秩序、役員、そういうもの、

組織をもったものが教会だと言っています。二十周年宣言におきましては、このような一つの外的な組織というものが教会だと言っています。二十周年宣言におきましては、このような一つの外的な組織というものを、もっと奥にある、生き生きとした生命をもつものとするという霊的な生命に注目しているのです。霊的生命とは聖霊が与える命と言うことです。これなくしてはどんなに整った制度でも教会ではない。」(『宣言の学び—創立宣言から四十周年宣言まで—』、神戸改革派神学校刊、1998年、31頁)

ここで語られていること背景には、「改革派教会は創立宣言に従って第二点を展開するために『組織的な整備』を着々と整えてきたのであるが、二十年経った時点で教会は行き詰まりを経験し、教会の生命的な部分の枯渇という事態に直面している」という事実認識があるでしょう。今まで指摘してきた“改革派路線の行き詰まり”の事実です。したがって、二十周年宣言の根本的な狙いは、“教会の内的・霊的生命の活性化”にあったといて間違いありません。あるいは、霊的生命の実質化の具体的な道筋を指し示したと言っても良いでしょう。いずれにせよ、「キリストの命があふれる教会」の形成があらたに目ざされるのです。事実、宣言には“生命”、“生命的”、“生ける”などの類語が繰り返し使用されています。

例えば、「教会の生命は、礼拝にある」(『礼拝』の項)、「神の言葉の体系的把握すなわち神学こそ教会の生命的形成に不可欠である」(『神学』の項)、「生けるキリストが人間の現実に語りたもうみ言葉の学であって……」(『神学』の項)、「生ける神学の急務である」(『神学』の項)、「教会の生命は、伝道に実践となって躍動する」(『伝道』の項)、「神学と伝道を祈禱おいて統一することによってのみ、聖霊の力あふれる教会として立ちうる」(『伝道』の項)、「全教会が聖霊に満たされ」(『信徒』の項)等々といった表現です。

これらの表現は偶然ではなく、執筆者自身が証言しておられるように意識的に用いられたものです(前掲書、31-32頁)。また、この“生命的”という点については神学校の講義の中でも吉岡先生はたびたび言及し、強調しておられました。執筆

者としては強い自覚があったのだと思います。したがって、この点に二十周年宣言の“心”があると言って間違いありません。

以上のような次第ですので、二十周年宣言を読む場合にはこの狙いをいつも考えて読む必要があります。20周年宣言については様々な読み方があるかと思いますが、やはりこの“心”を見失ったならば20周年宣言を正しく読むことは不可能だと思います。「20周年の今日的意義」という場合にも、まさにこの点から検討されるべきでしょう。これは今日の言葉で言えば、“霊性”の問題、もっと正確に言えば“改革派教会の霊性”が問題になっているのだとも言えるでしょう。このように考えて見ますと、だれしもうすぐに理解できますように、この宣言は、今日あらためて読まれるべき重要な宣言、新鮮な意味を持つ宣言なのです。

個人的には、このような20周年宣言の“心”が、自分自身の信仰体験とも重なって、筆者自身の“心”にも共鳴をもたらしたのだと思います。教会の礼拝の停滞した状況、生命力の枯渇した教会的状況の中で、“こんなものではない！ こんなものではない！”といつも心の中で叫んでいました。それだけに宣言の中で力強く主張される霊的生命の回復の要求は心にしみ入るように納得できたのだと思います。信徒大会開催自体にはかなりの批判もありました。お祭り騒ぎなど意味がない、という声も多かったのです。そのような声の中で、表の旗振り役を果たされたのは松田輝一先生であり、背後で粘り強くその声を説得し、信徒大会を成功に導いた立役者は矢内昭二先生であったと思います。このことも歴史的な事実として証言しておきたいと思います。少なくとも、20周年信徒大会と記念宣言は、20年を経て行き詰まっていた改革派教会の形成に一つの起爆剤としての役割を果たし、新しいエネルギーを注入したことは事実です。しかし、20周年宣言がその後の改革派教会の歩みの中でどのように生かされたのかは検討される必要があります。また、今日どのような意義をもっているのかが考察される必要があります。これについてはこれから触れて行きたいと思えます。

『教会学校教案誌』発行のための 自由献金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。教案誌はすでに第14号を数え、中部中会においては三分の二を超える教会がこの『教案誌』を採用してくださっています。また、他中会、他教会においても採用してくださる教会が与えられています。皆様のご支援に心から感謝を申し上げます。

この『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由献金によってご支援いただきたいと願っています。この献金は、『教案誌』の編集・出版のための費用として用いられます。子どもたちの信仰教育のための『教案誌』の発行のために、ぜひ皆様からのお祈りと献金のご支援をいただきたく、よろしくお願ひ申し上げます。『教案誌』を購入くださることも、発行のための支援となります。信仰の養いの益ともなりますので、ぜひ『教案誌』をご購入いただき、ご支援いただきたいと願っています。よろしくお願ひ申し上げます。

目標金額	30万円
期 間	2004年4月～2005年3月
送 金 先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※『教案誌』自由献金である旨、振込用紙にご記入ください。

日曜学校 2004年度カリキュラム (2004年10～12月分)

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題 単 元 の 目 標	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
10月3日	神の怒り 神は愛であり、義であられる。愛の故にこそお怒りになる義なる神を証しする	問20 ローマ1:18-23	ウ小19、ウ大27-29、ハイテ10-11 ローマ5:9
		問21 ヨハネ7:53-8:11	ウ小20、ウ大30、ハイテ54 イザヤ1:18
10月10日	あがない主の必要性 罪と弱さを抱えながら救い主・あがない主の前に立つことの祝福を証しよう	問22 ルカ1:26-38	ウ小21-22、ハイテ35-36 ヘブライ4:15
		問22 ヘブライ2:14-18	ウ小21-22、ハイテ16-18 ヘブライ2:17-18
10月17日	二性一人格 (一) 神であり人である主イエス・キリスト。「どのようにして」という御業の側面から	問23 マタイ1:18-25	ハイテ29、34 マタイ1:21
		問23 マタイ16:13-20	ウ大42、ハイテ31、33 マタイ16:15-16 (新改訳)
10月24日	二性一人格 (二) 神であり人である主イエス・キリスト。「なぜ」という必要性の側面から	問24 マタイ27:45-50	ウ小27、ウ大46-50、ハイテ43 マタイ27:46
		問24 使徒1:6-11	ウ小28、ウ大51-57、ハイテ45 使徒1:9
10月31日 宗教改革記念	主は救い、イエス 主イエスの御名について。主イエスの御名を呼ぶことの祝福を語ろう	—	—
		イザヤ11:1-5	エフェソ1:4
11月7日	神の御子、キリスト キリストの職務について。神の御子が救い主キリストであられることの祝福を	—	—
		イザヤ11:6-10	イザヤ11:6
11月14日	謙卑のキリスト へりくだりのキリスト。すべてをささげて私たちの救いとなられた。感謝へ	—	—
		イザヤ53:1-12	イザヤ53:12c
11月21日	高擧のキリスト 高く挙げられたキリスト。勝利し今も私たちのために働いておられる。讚美へ	—	—
		マタイ2:1-12	マタイ2:10-11
11月28日 アドベント	待降節 メシア預言。救い主イエス・キリストを待ち望むことへ	—	—
		イザヤ11:6-10	イザヤ11:6
12月5日 アドベント	待降節 メシア預言の続き。再臨の主イエス・キリストを待ち望むことへ	—	—
		イザヤ53:1-12	イザヤ53:12c
12月12日 アドベント	待降節 メシア預言。私たちのために苦しみを担われた救い主の姿を仰ぐ	—	—
		マタイ2:1-12	マタイ2:10-11
12月19日 クリスマス	降誕祭 占星術の学者たちの物語。主イエスを拝み礼拝する喜びへ招く	—	—
		詩編27:1-14	詩編27:1
12月26日	一年の感謝 一年の歩みを振り返って主に感謝をささげ、主をほめたたえる	—	—
		詩編27:1-14	詩編27:1

日曜学校 2004年度カリキュラム 年間計画

(2004年4月～2005年3月)

2年サイクル第1年 (子どもカテキズム問1～33)

月 日	教会暦・行事	主 題 (仮 題)	子どもカテキズム
2004年			
4月4日	受難週主日 進級式	十字架のキリスト	
11日	復活祭	復活のキリスト	
18日		第一部 人生の目的 一、人生の目的 人生の目的……礼拝	問1
25日		神の栄光をあらわす	問1
5月2日		救いの恵み	問2
9日		神の子ども	問2
16日	母の日	御言葉の礼拝	問3
23日		キリストの体なる教会	問3
30日	聖霊降臨祭	聖霊降臨・教会の誕生	
6月6日		神と人を愛する	問4
13日	花の日	第一部 人生の目的 二、聖書、神の御言葉 神の御言葉	問5
20日	父の日	愛の手紙	問6
27日		第二部 信仰の道 一、三位一体の神さま 靈なる神	問7
7月4日		唯一の神	問8
11日		生ける神	問9
18日		三位一体の神 (一)	問10
25日		三位一体の神 (二)	問10
8月1日		第二部 信仰の道 二、父なる神さま 主権者なる神	問11
8日		天地創造	問12
15日	(平和)	平和について	
22日		摂理の神 (一)	問13
29日		摂理の神 (二)	問14
9月5日		第二部 信仰の道 三、人間 人間の創造	問15
12日		罪と墮落	問16, 17
19日	(敬老の日)	罪の悲惨	問18

月 日	教会暦・行事	主 題 (仮 題)	子どもカテキズム
2004年			
9月26日		わたしも罪人	問19
10月3日		神の怒り	問20
10日		あがない主の必要性	問21
17日		第二部 信仰の道 四、御子なる神さま 二性一人格 (一)	問22
24日		二性一人格 (二)	問22
31日	宗教改革記念	主は救い、イエス	問23
11月7日		神の御子、キリスト	問23
14日		謙卑のキリスト	問24
21日		高挙のキリスト	問24
28日	アドベント	待降節	
12月5日	アドベント	待降節	—
12日	アドベント	待降節	—
19日	クリスマス	降誕祭	—
26日	年末	一年の感謝	—
2005年			
1月2日	新年	預言者イエス	問25
9日		大祭司イエス	問26
16日		真の王イエス	問27
23日		第二部 信仰の道 五、聖霊なる神さま 恵みのみ	問28
30日		選びと有効召命	問29
2月6日	(信教の自由)	キリストとの結合	問30
13日	レント	罪の赦しと義認	問31
20日	レント	神の子とされる	問31
27日	レント	聖化の恵み	問32, 33
3月6日	レント	愛の歩み	問32, 33
13日	レント	キリストの苦難	
20日	受難週主日	十字架のキリスト	
27日	復活祭	復活のキリスト	

編集後記

●やさしくおしえることはムツカシイですネー(宮武輝彦)。●二回目でなれたかと思ったら、一回目より難しかったです(長田詠喜)。●小学科上級を準備していて、自らももう一度、神様の存在と恵みを覚えることが出来て感謝しています(持田浩次)。●三位一体など、難しいけれど大切なところです。中学生でも神学の魅力を感じられたらと思っています(石原知弘)。●先日ある集

会で他中会の信徒の方とお話した折、弊誌のことを初めて聞いたと……。ショック! もっと宣伝しなければ!? (相馬伸郎)。●神の愛、神の平和について、語り、実践していきましょう!(辻幸宏)。●教案誌の購読が大会的に広がってきました。多くの教会が教案誌を用いて下さることへの感謝と緊張感の中で執筆しています。執筆者のためにお祈りください(春名義行)。

(イラスト募集のお願い)

弊誌に寄せられている声の一つに、イラストの一つも掲載されておらず、たいへん固い印象であるというものがありません。今号より、幾人かの日曜学校教師にお願いして、イラストを描いていただき、適宜掲載することにいたしました。弊誌を用いておられる皆様の中にも、豊かな賜物をお持ちの方々がおられることと思います。イラストを募集いたしますので、ぜひお寄せいただければ感謝です。また、そのほかにも、日曜学校や分級のアイディア、漫画などの投稿も大歓迎ですので、よろしく願いいたします。

(口座番号変更のお知らせ)

前号で口座番号の変更をお知らせしたばかりなのですが、中部中会教育委員の交代にともない、再度、口座番号を変更させていただきます。お手数ですが、ご確認の上、新しい振替口座、また新しい郵便振替用紙をお用いいただきますよう、お願いいたします。

Soli Deo Gloria!

☆ 本文執筆者一覧 ☆

聖書研究

木下裕也 豊明教会牧師
辻幸宏 大垣伝道所協力牧師
弓矢健児 新座志木教会牧師
春名義行 津島教会牧師

カテキズム研究

岩崎謙 神港教会牧師
三川栄二 稲毛海岸教会牧師
小野静雄 多治見教会牧師
辻幸宏 大垣伝道所協力牧師
吉田隆 仙台教会牧師

説教展開例

三川栄二 稲毛海岸教会牧師
相馬伸郎 名古屋岩の上伝道所宣教師
岩崎謙 神港教会牧師

分級展開例

幼稚科
宮武輝彦 芸陽教会牧師
小学科下級
長田詠喜 高松東教会牧師
小学科上級
持田浩次 三郷伝道所宣教師
中学科
石原知弘 北神戸キリスト伝道所宣教師
成人科
牧田吉和 神戸改革派神学校校長
表紙イラスト
山口英俊 豊明教会長老(日曜学校教師)

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長) 名古屋岩の上传道所宜教教師
木下裕也 豊明教会牧師
辻幸宏 大垣伝道所協力教師
春名義行 津島教会牧師
望月信 高蔵寺教会牧師

定期購読・バックナンバーの申し込み

春名義行 〒496-0038 愛知県津島市橋町2-30 津島教会
Tel/Fax. 0567-26-4221

郵便振替口座 00890-2-148183 「伊藤治郎」

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2004年7・8・9月号 (季刊)

第14号

2004年5月30日発行

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校教案誌編集部
名古屋岩の上传道所 宜教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701

編集・印刷 株式会社あるむ

〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F

頒価 900円 (本体価格)
